

# Extraterrestrials and the New Cosmology

Steven M. Greer, M.D.

Copyright 1995

## 地球外生命体と新しい宇宙観

スティーブン・M・グリア、医師

著作権 1995 年

([CSETIのウェブサイトより](#))

宇宙は知的生命に満ち溢れている。

それどころか、宇宙そのものが知性を持ち、生きているのである。

目に見えるものと見えないもの、理解できるものと超越的なもの、物理的なものと精神世界に属するもの、そのすべてが宇宙の一部であり、生き、覚醒し、知性を持っている。宇宙には多様な無数の生命が存在するが、本質的にただ一つのものである；それは部分を超越して一体化した、驚嘆すべき意識的な統一体（Oneness）である。

意識という一つのレベルからみれば、内も外も、此れも其れも、肉体も精神もない。あらゆる存在物の本質は、純粹で分化されていない永遠の宇宙の心（Mind）である。

それでも、認識の相対性ゆえに、我々はそこに内と外、心と肉体、善と悪、統一と分離を見る。しばしば真理は、これらの逆理を熟考することから生まれる；いずれの見方も真実であるが、それは考察者の認識レベルに依存している。我々が、宇宙と人類にあらざる進歩した生命体の存在を説明する新しい宇宙観に深く思いを巡らすとき、逆理の試練に何度も繰り返し見舞われることになる。しかし、統一体という観点から一心に宇宙を眺めるならば、宇宙は我々にその神秘の一部を差し出すかもしれない。

宇宙観の混乱。この言葉を最もよく言い表すのが、20 世紀の人類が進歩した地球外生命体の存在に直面することにより生じている状況である。これらの存在者は、人類にあらざるのみならず、本質的に我々には不可解な工学技術を所有しているからである。数千年（そしておそらくは数百万年）人類よりも進歩したいかなる文明も、当然ながら我々を困惑させる現れ方をするだろう。恒星間旅行の能力を持つ人々が、交信にマイクロ波信号を用いたり、推進に化石燃

料もしくは核燃料を利用したりすることは、ありそうもないことである。実に、現代の地球の科学者たちが今高く掲げている宇宙の法則そのものが、恒星間旅行の能力を持つ文明が理解し応用しているその、遠い昔の影に過ぎないものである可能性が高い。

200年前の人間にとり、ホログラムやレーザーでさえ魔法のように映ったであろうように、恒星間旅行文明の工学技術および文化の様相は、人類の大部分にとり魔法のように見えることだろう。これらの文明と彼らの工学技術を理解し始めるため、そして最も重要なことだが、現実世界の性質を彼らから学ぶために、我々には科学と宇宙観における大いなる謙虚さと忍耐とが必要になる。

さらにまた、一般には宇宙観の理解のため、とりわけ進歩した地球外の人々の現れ方を理解するために、いわゆる‘物理的宇宙 (physical universe)’と共存する非線形的 (non-linear) 宇宙、非局在的 (non-local) 宇宙、超越的 (transcendental) 宇宙の概念が考慮されなければならない。後述するように、人類も地球外生命体も共に、物理的で定量化できるだけの実体ではなく、彼らも我々も、物理的宇宙に束縛されない領域に存在しているからである。

すなわち、我々も地球外起源の他の生物学的生命体も、心と肉体の両方を持っている；我々はどちらも、物理的であると同時に精神的、線形的であると同時に非局在的、時空に束縛されていると同時に超越的であるのが真実の姿である。そして科学と工学技術により、一体化した心と物理的装置との間に交信が行なわれる領域が発見されたならば、何が起きるか？このような工学技術の出現は、現代の物理学者と哲学者あるいは神学者の双方を、真に困惑させるものとなるだろう。宇宙の理解におけるこのような大飛躍は、別々の領域と考えられていた科学と精神世界、心と物質、肉体と精神を、密接に関係させることになると思われるからである。

さて、この困惑すべき状況をさらに混乱させるのが、非物理的な知性体の存在である。物理的肉体を持たずとも知性を持ち、知覚を持ち、生物学的な人類および地球外生命体と一定の相互作用をする力を持つもの。大衆文化においては、そのような存在者を想像の産物（または原始信仰に属するもの）として拒絶するか、そうでなければ、それが人類、地球外生命体、あるいは本当の非生物学的存在のどれであろうと、すべてを一括りにし、区別のない‘実体 (entities)’という、文字どおりの寄せ集めにしてしまう傾向がある。

明らかなことは、知性を持つ生命体の多様性について熟考するのに伴い、深刻な宇宙観の混乱を生じる恐れが指数関数的に増大するということである。我々を取り囲む宇宙を理解しようとするならば、新しい宇宙観が必要である。

民間 UFO 団体においては、この現実時空を動き回る物体と生命体の性質について、大きな混乱がある。一方で我々は、疑う余地のない物理的な現象を目にする。墜落した宇宙機、レーザー反射、検証された写真とビデオテープ、着陸事件に由来する金属片などである。‘肉と血’を持つ地球外生命体がそれであることは、言うまでもない。また他方では、これらの同じ物体と存在者たちについて、非線形的な現れ方をしたとする多くの報告がある：テレパシーによる交信、

明晰夢、心と物質の相互作用、遠隔視、バイロケーション、空中浮揚、等々。地球外生命体に関わる現象を客観的に学ぶ学徒なら、誰もこれらの現れ方を無視することはできない；その例はきわめて多く、広範囲に及ぶ。我々に困惑と混乱があるからといって、それが現象のこの側面を頭から退ける言い訳にはならない。とはいえ、これらの現れ方を我々が受け入れるためには、'現実 (reality)' についての理解を全て再考することが真に求められる。そして人間は変化を好まないものであり、宇宙観の全面的な見直しを迫る証拠に進んで向き合おうとしない。

宇宙観の混乱が続いてきた結果、現象についての様々な主張が存在することになった。現象の一部は進歩した地球外文明の顕現であり、また一部は、ある意味で地球外生命体に類似した現れ方をする能力を持つ、非生物学的な'精神的存在者 (spiritual beings)' の顕現である。すなわち、地球外文明の進歩した工学技術および能力の幾つか、とりわけ心と思考に接続しているそれは、いわゆる'アストラル体存在者 (astral beings)' または精神的存在者にきわめてよく似た現れ方をするということである。実際に、これらの現れ方は、顕現している存在者たちが同一のものだと多くの人々に言わせるほど、互いによく似ていることがある。その見方は正しくない。輝くものすべてが金ならずであり、現れ方の類似性は起源の同一性を意味しない。

さてまた、このすべてに加えて、ある種のアデプト (達人) が地球外生命体およびアストラル体'存在者の両方にきわめてよく似た現れ方をする能力を持つ、という事実がある。ET 工学技術の特異な現れ方を列挙したのを覚えているだろうか？テレパシー、予知、空中浮揚、念動力、バイロケーション、心-物質および心-肉体の相互作用... これらは、時々 (そして多くの人々が考えるよりももっと頻繁に！) 人間の世界に見られてきた諸能力なのである。

最後に、もう一つ付け加えよう：工学技術と生来の精神的能力を発達させ、地球外文明および非生物学的な精神的存在者の能力に近づいている、闇の軍および準軍事的な人間のグループが存在する。

宇宙は広大で、複雑な場所である。しかし、それを理解するためにあまり難しく考える必要はない。最初に簡単な原理と概念をいくつか用いることにより、宇宙の理解は前進する。この課題は、古代スーフィー (\*イスラム) の格言を思い起こさせる：“知識はただ一つの点である。しかし、愚かなる者がその点を増やした”！

## 新しい宇宙観の中心原理

線形的、相対的な現実と非局在的、非線形的現実と共に、宇宙の実相 (Reality) として同時に存在する。それらを知覚し理解することは、完全に考察者の意識レベルに依存している。物理的な物質でさえ、宇宙の性質の側面である非局在性、超越性、および意識を宿している。

意識と知性を持つ生物学的生命体は、それが地球上のものであれ、またはどこか他の惑星起源のものであれ、物理的現実と精神的現実とを持っている；そのすべてが物理的に、また精神的に、様々な現れ方をする可能性を持っている。純粋な心、または制限されない意識は、そのよ

うな生命体のすべてが本来的に持っているものであり、あらゆる生命に見られる究極最高の共通特質である；制限されない意識は本質的に非局在的であり、時間にも空間にも束縛されないが、現実時空の中に顕現することができる。

生物学的肉体を持たない存在者（いわゆるアストラル体または精神的存在者）もまた、意識と知性を持つ実体である。またそれ自身、生物学的および非生物学的な他の意識的生命体と相互作用をすることができる。稀に、それらは物理的に顕現することさえできる。もう一度繰り返すと、これらの存在者たちを他の生命体と連結している最高の共通特質は、制限されない意識（unbounded consciousness）、または非局在的な心（non-local mind）である。

宇宙は、線形的側面と非線形的または超越的側面の両方で構成されている。それらは、一見矛盾するように思えるが、時空と非時空のあらゆる点において同時に存在している。この観点からすると、時空のあらゆる点は、非局在性の性質により、時空のあらゆる他の点にも存在している。

神（God）、または全知全能の存在（Universal, All-Knowing Being）の概念は、宇宙における膨大な生命の多様性を考えるとき、強められることはあっても弱められることはない。神の栄光は、調和宇宙（cosmos）における生命の無限の多様性と限界のない活動領域を認識することにより、さらに増す。

それでは、宇宙の知的生命は、実際にどのような現れ方をするのか？上に述べた概念を念頭に置いて、生命のこの多様性と、それらが我々の様々な内的感覚と外的感覚にどのようにしてその姿を現すのか、これから概観することにしよう。

## 知的生命体の分類

### 生物学的生命体：種類

人類 - 知性を持ち、本来的に生物学的肉体を持つ、地球に棲む高等な生命体。

地球外生命体 - 知性を持ち、本来的に生物学的肉体を持つ、地球以外の様々な惑星に棲む高等な生命体。

惑星生命体 - 人間の姿を持たず、惑星全体を肉体とする知的存在：例を挙げればガイアとしての地球がある。生物がそうであるように、惑星地球全体が知性を持ち、覚醒している。他の惑星、さらに太陽系、銀河系も同様に、それ全体として独立した意識的有機体と考えられる。

その他の生物学的生命体 - 地球のイルカや鯨目など。これらは人間ではないが、高度な知性を持つと考えられる；理論的な観点から、他の惑星にも人間の姿を持たない、これらの知性を持つ生物学的生命体の系統があると推測される。

## 生物学的生命体：顕現/姿の現し方

(ここに列挙するのは、生物学的な知的生命体がどのような姿の現し方をすると考えられるか、または内的感覚と外的感覚の両方でどのように知覚され得るのかの説明である)

- 物理的な顕現 (Physically)。物理的な肉体を持って現れる。宇宙機を伴うことも伴わないこともある。
- 工学技術を用いた顕現 (Technologically)。ラジオ、テレビ、および心/思考に接続した工学技術を含む、進歩したシステムを用いて現れる (先進的 ET 工学技術)。
- 精神的な顕現 (Mentally)。テレパシー、明晰夢、または直接心に接続する他の経路により現れる。
- アストラル体投影 (星気体投影) による顕現 (Astral Body Projection)。人類、ET、または他の生物学的生命体はその繊細な、非生物学的構成要素を現す ; これは別の生物学的生命体により、覚醒時または眠った夢の状態で見られる。
- コーザル体または思考体への顕現 (Causal or Thought Body Presentation)。最も繊細な自己の側面、思考の本質'体'が別の生物学的生命体を知覚する。この知覚は生物学的な肉体またはアストラル体の投影によらない。
- 純粋な心/統一状態にある心への顕現 (Pure Mind/One Mind)。究極の統一状態。いかなる意識的生命体も純粋な、制限されない心として、その存在が知覚される。当然ながら、あらゆる意識的生命体は本質的に非局在的な、純粋な心であるために、そのようなものとして知覚される。

## 生物学的生命体の知覚経験と能力の種類

- 物理的知覚 - 視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚
- 物理的能力 - 移動/動作、その他、工学技術による増強を含む
- 精神的能力 (従来の意味の) - 思考、観念作用、創造性、可視化、記憶、感覚的知覚、認識、その他

非局在的な精神的能力 (従来の意味ではない) - これには認識、心と物質の非局在的側面の利用が含まれる :

- テレパシー (Telepathy) - 知性を持った一存在者から別の存在者へ思考を送信する、および/または、受信する能力。
- 予知 (Precognition) - 心の繊細な、非局在的側面は、時空に束縛も制限もされないために、認識を認識することのできる知性を持つ高等な生命体は、非局在的な心を経由して、未来に起こり得る出来事を知ることができる ; そのような予知の正確さは、どれも 100 パーセント未満であることに留意されたい。なぜなら、自由意思に影響される'現在'の出来事が、未来に起きる出来事の変率を変えるからである。
- 遡知 (Postcognition ; 過去認知) - 知覚者が直接経験しなかった遠い過去の出来事を、

非局在的な心を経由して知覚する能力。非局在的な心は、時空の線形的連続体の過去時点にも未来時点にもアクセスすることができるために、この能力によって過去の出来事を見るのに、遡れる時間に限界はない。

- 遠隔視 (Remote Viewing, Remote Sensing) - ここでは、現時刻、過去、未来のいずれかにかかわらず、非局在的な制限されない心が、空間的に離れた場所の出来事を見る能力と定義する。現時刻の遠隔視においては、非局在的な心により、遠隔地の出来事をきわめて細部まで知覚することができる。
- 夢幻状態の能力 (Dream State Abilities) - 夢幻状態において、知性を持つ高等な生命体は、予知 (予知夢)、遡知 (遡知夢)、遠隔視、明晰夢 (夢の中で意識があり、覚醒し、自己を認識し、夢の中の出来事に作用を及ぼす可能性を持つものと定義する) を経験することがある。
- セレスティアル知覚 (Celestial Perception) - 物理的な生物学的感覚および高次の意識的感覚の両方を含む知覚で、物理的現実および非物理的現実の両方について、その最も繊細で精妙な側面を知覚することが可能になる； 'オーラ'の知覚はその簡単な一例である。
- 直観的な知 (Intuitive Knowing) - 従来の意味の外面的な知る方法を用いずに、非局在的な心および内的な知と呼ばれる経路により、物事についての詳細で信頼性の高い情報および洞察を得る能力。例えば、ある生命体が植物を知覚し、その特定の薬学的効用を直観的に知ることが可能である。
- 治癒能力 (従来の意味ではない) (Non-traditional Healing Abilities) - ある生命体が、非物理的かつ非工学技術的な方法により、遠隔的か直接的かを問わず、自己または別の生命体を治癒する能力を示すことがある。これらの能力と種類は多様であり、その中に心/肉体の相互作用、繊細なアストラル体/肉体の相互作用などを含めることができる。
- 空中浮揚 (Levitation) (工学技術によらない) - 心と肉体または物質物体との間の繊細な相互作用により、重力の影響を消滅させる能力。心も物質も、相互に接続することのできる繊細な非局在的側面を持つために、空中浮揚などの現象を起こすことが可能になる。
- 念動力 (Telekinesis) - 心の繊細で非局在的な側面と物体が持つ同等の側面の間の接続を経由して、観測可能な空間の中で物体を移動させる能力。例えば、従来の意味の物理的な作用または工学技術の力を用いずに、ある生命体が精神の力で椅子を持ち上げ、部屋の中を移動させることが可能である。
- 遠隔移動 (Teleportation) - 非局在的な心と物質の非局在的側面を経由して、物体を相当な距離を隔てた地点に移動させる、またはその地点に出現させる能力。この能力は、空間の線形的側面を無意味にする。例えば、ある生命体がこの能力を使って、1 個の宝石を一つの大陸から別の大陸に遠隔移動させることが可能である。
- 変成 (Transmutation) (工学技術によらない) - 物質の非局在的側面と心との間の繊細な接続を利用して、ある物質的物体を別の元素または物体に変換する能力。同じことは工学技術を利用しても可能であることに留意されたい。
- バイロケーション (Bi-location; 複所在、同時両所存在) - 時空連続体の中で、肉体または物体を、2 力所またはそれ以上の地点に同時に出現させる能力。例えば、ある生

命体が同時刻に、2カ所またはそれ以上の場所に出現することが可能である。関連する‘複時在 (bi-timing)’は、空間の同一地点で複数の時刻に出現する能力である（いわゆるタイムトラベル）。

- 物質化/非物質化 (Materialization/Dematerialization) (工学技術によらない) - 生命体が持つ能力で、心/物質の接続を利用して物質的物体を出現させたり消滅させたりする能力。同じことは工学技術を利用しても可能であることに留意されたい。
- 幽体離脱/アストラル体投影 (星気体投影) (Out-of-Body Experience/Astral Projection) - 繊細なアストラル体またはライトボディ (light body) を、生物学的な肉体を離脱した時空の一点に自在に投影する能力。
- 近似死体験 (Near-Death Experience) - 肉体の病気または損傷により、アストラル体が一時的に物理的な生物学的肉体を離脱する経験。調和宇宙の非物質的で繊細な側面をかいま見る経験の中で、いわゆる‘来世’を知覚することがある (通常はアストラル体の領域で起きるが、高度な知覚がコーザル体または純粋な思考体の領域で起きる可能性がある)。

### その他の多くの能力...

上記の諸能力は、人類と地球外生命体の両方が持つ、生得的な可能性であることに留意されたい。ある文化の中で、これらの能力が実際に発現しているかどうかは、文化の発達程度とその文化の中心的な関心が何であるかに依存する。ここでの重要な点は、意識的であり、覚醒し、知性を持つ生命体なら、人間であれ他の何であれ、上記の諸能力のすべてを発達させ、経験することが潜在的に可能だということである。

また、次のことを覚えておくことは重要である。すなわち、これらの能力のそれぞれが、生得的な精神的能力を工学技術的に増強することにより、あるいは完全に工学技術の進歩のみにより、達成可能だということである。進歩した地球外生命体の工学技術の多くが、我々には‘魔法’のように見えるが、その理由は、彼らが心と物質の両方の諸側面を利用しているからである。それは、現在の人類の科学が定量的に理解し得る範囲を超えている。皮肉なことに、この理由により、非局在的な心と物質の神秘の中に暮らすある種のいわゆる未開の人々が、欧米の科学者たちよりも正しく ET の工学技術を理解することがある。

### 非生物学的な知的生命体

宇宙の複雑さをさらに増すものに、ここでその性質を述べる、完全に非線形的かつ非物質的な、調和宇宙の諸領域、諸次元、諸側面 (それを何と呼んでもよいが) の存在がある。調和宇宙のこの‘部分’は、実際には物理的な物質宇宙さえ及ばないほど、はるかに広大で複雑である。だから、少なくとも最初にその基本的な性質と現れ方の評価を試みることなしには、どのような宇宙観も完全にはなり得ない。調和宇宙のこの側面は、その物理的側面と (そして生物学的な肉体を持つ人類および地球外生命体とも) 相互作用をすることができる。それゆえに、我々にとり重要なことは、その側面を考察し、それが上に述べた人類、ET、その他の生物学的生命体

が示す多様な現れ方および能力にどのように似ているのか、または異なっているのかを明らかにすることである。

## 非生物学的な知的生命体の種類

アストラル体または光の存在者 (Astral or Light Beings)

- 地球起源のもの (以前に生物学的な人間であった死者)
- 地球以外に起源を持つもの (生物学的な地球外生命体の死者、またはコーザル体もしくはアストラル体の領域に起源を持つもののいずれか)

コーザル体または思考体の存在者 (Causal or Thought Beings) (主に‘思考体’として存在しているもの)

- 地球起源のもの (生物学的な人間の死者)
- 地球以外に起源を持つもの (以前に生物学的な地球外生命体であった死者、またはコーザル体もしくはアストラル体の領域に起源を持つもの)

ここで留意すべきことは、非生物学的な存在者は、それが以前に人類であったか、ET であったか、それとも非生物学的起源を持つものであるかを問わず、生物学的生命体に対して、覚醒状態、夢の状態、瞑想状態などを含む、多種多様な条件下で顕現することができるということである。文化とその発達程度により、また非物質的存在者を容認する程度に応じて、これらの実体は幾つかの名前で知られており、また様々な役割を果たすものと見なされている。その一部をここに列挙する：

- ゴーストまたは精霊 (Ghosts or spirits)
- 指導霊または天使 (Spirit guides or angels)
- 大天使 (Archangels)
- 悟りに達した天界の存在者 (Ascended enlightened beings) (神の化身(Avatars)、キリストやクリシュナなどの預言者)
- 惑星の自然霊 (Planetary Nature Spirits) (ヴェーダの伝統ではデーヴァス(Devas)として知られる)
- 動物霊 (Animal Spirits)
- その他、きわめて多数

## 非生物学的生命体の知覚経験と能力の種類

基本的に、生物学的生命体の項で列挙したすべての経験および能力、またおそらくそれ以上のことが、これらの非生物学的生命体に関連している。ただし、彼らは主に非物質的領域に存在しているために、物質の世界と接続するのはそれほど頻繁ではない。しかし、彼らは調和宇宙の物質的側面と相互作用をすることができるし、物質化やポルターガイスト(騒霊現象)など、様々な特異現象により証明されているように、時々そうしている。確かに、人間の心と精霊の間に、また同様に ET の心と精霊の間にも、相互作用が起きる原因は数多く存在する。

人間が経験することのできる多くの可能性を仔細に検討するときには、調和宇宙の多様性をその中に包含する、広大な宇宙観を持つことが重要である。そうしないと、我々は地球外工学技術の特異な現れと、アストラル体またはコーザル体の領域にある調和宇宙からの顕現を識別できなくなるだろう。

## リンゴ、オレンジ、星くず

これまで述べたことは、包括的宇宙観の諸問題を網羅したものでは全くない；そのような仕事は、数冊ではないにせよ、1冊の本にはなるだろう。しかし、この概説は、ここでの主要な関心事 - 地球外生命体の存在 - についてのきわめて重要な問題に、我々の目を向けさせる。宇宙は、知性を持つ生物学的存在者と知性を持つ非生物学的存在者の両方で満ちており、そこでは著しく異なるタイプの存在者間に、現象の重なりが存在する。そのことが、今地球を訪れている地球外生命体の人々を理解しようとする誰に対しても、一つの特別な課題を提起する。

例えば、ある非生物学的なアストラル体存在者は、一部の進歩した ET 生命体に類似した現れ方をする可能性がある。しかし、その ET 生命体は、外見上（あるいは本質的に）非生物学的実体に見える、きわめて進歩した工学技術を用いているかもしれない。人物のホログラム投影を 17 世紀の人間ならゴーストと解釈しなかつたらどうか？また、衛星実況によるテレビ会議はどうだろうか？ついでに言えば、ただのフラッシュライトはどうか？間違いなく魔法だっただろう！

他にもあるがこの理由により、宇宙観の危機が数十年間にわたり ET/UFO 問題を支配してきた。よく聞いて欲しい、この危機は、ある闇のグループの意図的な偽情報工作および心理戦計画により増長されてきた（これについては後でさらに述べる）。その結果は、リンゴ、オレンジ、星くずの混合物であり、それらはすべて一つの名前で呼ばれる。

おそらくこれは、理解のできない新しい現象に遭遇して動揺する世界がもたらす、予測可能かつ当然の結果である。これは我々に、“The Gods Must Be Crazy (\*邦題：コイサンマン)”という映画を思い起こさせる。その中では、一機の小さな飛行機がアフリカの辺鄙な未開地上空を飛び、乗客の一人が窓からコークの瓶を落とす。この瓶はそれを見つけた先住民たちにより、きわめて不可解で解釈の定まらぬ、超自然的な意味と力を持つ物体になる。この映画はコメディであるが、その中には、重要な関連するメッセージが含まれている：今我々は、コークの瓶を見つけた人々と同じ振る舞いをしていないか？

例えば、ET/UFO 現象の目撃者たちは、地球外宇宙機を全くの非物理的、非物質的なものと結論する可能性がないだろうか？なぜなら、時々それらはただ“消える”からである。魔法？次元移動？それともその ET 工学技術は、途方もない一瞬の加速により、宇宙機を空中静止の状態から時速数千マイルにまで（あるいは超光速にまで）移行させただけなのか？人間の視覚神経は、この大きさの加速度を追跡することは不可能である。だから、その物体はただ“消えた”よ

うに見えるのである。

実に、この宇宙観の混乱は、三つの主要な要素が原因となっている。その第一は、すでに述べたように、進歩した地球外工学技術が持つ固有の性質である。それは、我々が想像できるどんなものよりも進歩しているために、単なる超技術 (super technology) というよりは、むしろ‘超自然 (supernatural)’に見える。地球の科学界が考え始めることさえしていない、宇宙の法則がある。それは理解されているのみならず、ET 文明により進歩した工学技術の中で応用されているのである。この理由により (また、古き良き科学の傲慢さゆえに)、厳格な科学者たちでさえ、地球外生命体に関わる現象のある側面を頭から退ける傾向がある。そうでなければ、それを‘非現実的、超自然的、迷信的な類のもの’と見なしてしまう。

意識の力を借りた工学技術 (consciousness-assisted technology; CAT) の発達について考えて欲しい。例えば、コンピュータにデータを入力するのに、キー操作ではなく、ただ命令を思考する方法が考えられる。コンピュータは予めプログラム化されており、人々の思考の特徴を認識し解釈する。目撃証人の何人かは、地球外生命体が宇宙機の中で、まさに同じことをしたのを見ている。あり得ない？魔法？たわごと？気を付けた方がよい！ネバダ州立大学ラスベガス校のディーン・ラディンという、他ならぬ我々の科学者が、‘サイキック・スイッチ (psychic switch)’と呼ぶものに取り組んでいるが、これはまさしく今述べたことである。進歩した地球外生命体は、この道をどれほど遠くまで行っているだろうか？

CAT の裏返しは、工学技術の力を借りた意識 (technology-assisted consciousness; TAC) である。ここでは、特殊な機械装置が、心、思考、意識などの機能を支援する。その基本例が、モンロー研究所のヘミシンク音響技術 (Hemi-Sync tones) であり、リラクゼーションおよび意識拡張の深化を助け、最終的には活力と能力を高めることを意図している。現代の科学者たちには異様に思えるかもしれないが、さらに進んだ応用が、ある種の工学技術を利用してお互い同士および人類とテレパシー交信する、ET の能力である。このことを物語る実に数百の事件が、世界中の様々な階層の信用できる人々から報告されている。

地球外文明においては、光速を超える速さで交信する能力が、基幹的な工学技術になる。ムーディー・ブルース (\*ロック・バンド) から引用しよう。“旅をする一番よい方法は考えること”なぜか？それは瞬間的だからである。だから、恒星間旅行をする人々が、電波を使わずに思考交信 (thought communication) を発達させていたとしても、全く驚くにはあたらない。目撃証人が次のように考えながら宇宙機を見ていた、多数の事件がある。“あー、あの物体がこちらに戻ってこないかな、そうすればもっとよく見えるのに！”すると突然、その宇宙機が方向転換をし、その目撃者の真上に飛来する。このような双方向的意思交換の確度の高さが示唆するものは、これらの宇宙機およびその搭乗者たちが、自身の思考と他の生命体のそれとを実際に接続する工学技術を持っているだろうということである。

TAC (工学技術の力を借りた意識) はまた、地球外生命体により、遠隔移動、念動力、遠隔視、およびさらに高度な意識状態の中で利用されている可能性もある。一旦、心と物質の間および

心と時空の間の結びつきが明確に理解されるや、その応用の可能性はほとんど無限であり、想像もつかない。

この宇宙観の混乱という議論の中で、進歩した地球外工学技術がなぜ重要なのか、その理由は今や明白であるはずだ。地球外文明のきわめて進歩した工学技術は、別のいわゆる超常現象に類似しているか、または同一に見えるということである。これらの違いを認識するためには、洞察、知識、忍耐、そして何よりも経験が必要である。

例えば、'典型的な宇宙人による誘拐経験'を持ち、逆行催眠を受ける人々は、潜在意識の記憶を詳細に語る。それは、宇宙人による誘拐の記憶とされるものを引き出そうとする、強い偏見を持った催眠術師をとりわけ喜ばず。つまり - それは現実か、それともメモレックスか？

人間の心を扱うときには、大いに注意しなければならない。そうしないと我々は、非生物学的な知的生命体、人類、地球外生命体など、重なり合う明瞭な諸領域を含む、新しい宇宙観のその側面を混乱させることになる。

覚醒時、夢の中、または瞑想状態で、ほとんどホログラムとなった精霊またはアストラル体存在者を見た人間に対して、ある UFO 研究家が、それは地球外生命体の訪問を受けていたのだと間違った判断をしてしまうことがある。しかし待つて欲しい。上にその概要を述べたより包括的な宇宙観は、我々に次のように考える余地を与える：それは指導霊か、天使か、別の現存する人間がベッドルームにそのアストラル体を投影したのか、死去した親類か、入眠時幻覚か、「それとも」地球外生命体が工学技術的もしくは精神的に、部屋にその姿を投影したのか。

重要な点はこれである：もし多様な可能性について知りもせず受け入れもしなければ、その現象を間違って解釈する可能性はきわめて高い。同様に、多くの人々は無数の超常現象を経験するが、それらはただ一つの現象と見なされることになる。その結果は、リンゴ、オレンジ、星くずの混合物である。真に包括的な宇宙観を導入し理解することは、我々がこの混乱を回避するための大きな助けになるだろう。しかしそれでも、一つの現象が別の現象を装う、深い重なりのある諸領域があるために、明確な識別が可能になるまでには、多大な注意力と、熟慮を伴った経験の繰り返しが必要になる。そうでなければ、我々はいかにして、精神的存在者と地球外工学技術による進歩した心/物質の相互作用を区別することになるのか？さらに言えば、人間の工学技術および体験からそれを区別するのか？

そのことは、宇宙観の混乱をもたらす第三の原因へと我々を向かわせる：地球外生命体の問題について社会を混乱させ、欺き、惑わすことを意図した、人間による闇の諸計画。次のことを覚えておかなければならない。すなわち、地球外工学技術を逆行分析 (back-engineer) する闇の人間による企ては、45 年以上も続いており、かなりの進歩を遂げているということである。加えて、軍および情報諸機関の内部にいるある種の闇の下部組織が、きわめて侵略的、特定の、実戦的な心理電子技術に取り組んできている。これらの工学技術は、ほとんどの人々が想像し得る以上にはるかに進んでいる。偽情報工作を目的とした、意図的に地球外工学技術を

装う能力が実際に存在するのである。

我々は、信用できる軍関係者から、“非致死性防衛（non-lethal defense）”および関連分野について説明を受けたことがある。彼らは、実戦に使える心理電子技術がすでに存在していることを我々に確証した。それは個人またはグループを標的にし、遠くから目標を操作して、彼らが彼らだけの神（God）と直接会話をするように仕向けることが可能である。その結果、彼らはそれが現実だと信じ、嘘発見器のテストを通過する。

## 結論

これは警鐘である。すべての特異な経験を額面どおりに解釈する単純なアプローチは、非科学的であるだけでなく、非常に危険である。UFO/ETに関連しているように思える個人的および集団的経験を誘発することのできる工学技術が、確実に存在する。しかし実際には、それはまさしく人間によるものである。過去に行なわれたプルトニウム人体実験や一般市民に向けた細菌戦実験と同様に、これらの‘実験’は、この 30 ないし 40 年間に開発され完成されてきた、現実の、闇の資金による活動である。きわめて迫真的な‘誘拐’事件を誘発することのできる、完全に人間の手になる電子技術および移植（インプラント）技術が存在している。軍事施設周辺で誘拐経験が多発すること、マークのない、黒い、電子装置満載のヘリコプターが、いわゆる誘拐被害者たちの住居近くで見られることは、偶然ではない。

大衆を惑わし、欺き、そしてなによりも地球外生命体の主題について偽情報を与えることを意図したこれらの特殊プロジェクトにより、一般市民は誤り導かれ、民間 UFO 団体は完全な被害者になってきた。地球外生命体の存在に貼り付けられた“Body Snatchers（人体乗っ取り）”の観念は、“... 我々が一丸となって対抗し闘わなければならないエイリアンの脅威”が存在することを大衆に納得させるための、手の込んだ計画により押し付けられている。

騙されてはいけない。地球上の生命と、新興しつつある我々の地球外文明との関係は、この現実には我々の目が開かれているかどうかにかかっている。

宇宙観の混乱と闇の人間による活動の関連性を、過小評価してはならない。地球外生命体の主題に関する人類の認識は、偽物の金の山に本当の金を隠しておきたい輩によって、巧みに操作され、ハーブを奏でるように弄ばれてきた。地球外生命体に起因するよう見え、感じられ、思われる出来事は、実際には他ならぬ人間に起因する偽装の一部であるかもしれない。だから、もし我々が、少なくとも我々の宇宙観のリストにある闇の偽情報計画の役割を考えることをしないならば、これらの出来事の多くを見誤り、誤解することになってしまうだろう。

宇宙観の混乱を増長させる人間側の原因は、闇の活動に限定されたものではない。誤解、幻覚、妄想、なりたがり、虚偽記憶症候群、でっち上げ、科学の傲慢さ、一般的な人間の利己主義といった、一連の通常要因がある。これらのすべてが、緊急に治療を必要とする宇宙観の集団的消化不良の原因になっている。そして、事実を認識することは、治療への第一歩である。地球

外文明。人類。非生物学的生命体。宇宙は複雑で、多様で、魅惑的な場所である。それとも「非-場所 (Non-Place)」(\*マルク・オジェ) だということか？最終的には、教育、そして何よりも経験が、この旅における我々の導き手となるだろう。それというのも、もし我々がこの広大な大海に船出しようとするならば、我々には方向舵、コンパス、そして最初は海岸線に沿った少しばかりの旅が必要だからである。

我々は共に合流し、知識と経験を持ち寄らなければならない。そして勇気と強い意志を持って、まずは海岸線に沿って船出しなければならない。それから海岸線を離れていき、次には精神世界と宇宙空間の、広大で無限の大海へと向かわなければならない。我々がいるところは、時の終わりでも歴史の終わりでもなく、むしろ無限の可能性への出発点だからである。そこには、人類が共に夢見るすべてが実現する世界がある。

(訳：廣瀬 保雄)

# SARAH MCCLENDON A TRIBUTE

9 January 2003

By Steven M. Greer MD, Director  
CSETI / The Disclosure Project  
[www.DisclosureProject.org](http://www.DisclosureProject.org)

## サラ・マクレンドンに捧ぐ

2003年1月9日  
スティーブン・M・グリア 医師  
地球外知性体研究センター / 公開プロジェクト 責任者

([CSETIのウェブサイトより](#))

サラ・マクレンドンの死去とともに、報道界の偉大な光が一つ、この世界を去った。

私がサラに初めて会ったのは、ナショナル・プレス・クラブにおける彼女のあるグループ会議のときだった。私はサラから、我々の調査によってCSETI（地球外知性体研究センター）と公開プロジェクト（ディスクロージャー・プロジェクト）が何を発見したのか、その概要を話すように頼まれていたのだ。すでに80代の後半になっていたサラは、機転の鋭さと強烈な存在感を見せつけた - それは1940年代以来、ホワイトハウス記者としての彼女をよく支えてきた特質だった。

すぐさま私の脳裏には、南部にいる私自身の家族の多くの面々が思い浮かんだ：一筋縄ではいかず、ワシントンの見せかけとくだらなさのすべてを見抜くことのできる、実に見事な人々だ。

ワシントンに群がる偏狭なメディアの間でUFOと地球外知性体が好ましからぬ話題であることも、この論議を呼ぶ問題の真実を追求しようとするサラを思いとどまらせることはなかった - 露ほどもだ。むしろサラは、たとえそうすることが嫌われることであるとしても - いや多分そうであるからこそ - 官僚主義と秘密の禁制領域を探ることに喜びを感じていたように思えた。彼女は、鋭く洞察力に富んだ多くの質問をし、その答について熟考した；もし答に満足しなかった場合には、再び私に質問を浴びせた。素晴らしいひとときだった。

私はサラとその助手の一人を交えただけの会話を持ったが、そこでこう言われたことを覚えている：サラはクリントン大統領に接近し、大統領がなぜUFOの秘密の公開を公然と支持しようとならないのかと訊ねた。サラによれば、大統領は車椅子の彼女の方に体がかがめ、静かにこう言った：“サラ、彼らはそのことについて私に何も話そうとしないんだ。だから、どうして私がそれを公開することができるだろうか？”

そのことを聞いたら私は驚くだろうとサラは考えていたが、私が、同じことはケネディ、カーター、その他の大統領にも起きたことだと言うと、彼女は心底ショックを受けた。私は彼女に、クリントン政権の初代 CIA 長官ジェームズ・ウルジーに会ったこと、そして彼が同じ経験をしていたことも話した。私の話を聞いたサラは、このような人物たちが嘘をつかれるということに本当に驚いていた；私は彼女に、それは毎日起きていることであり、少なくともこの主題についてはそうなのだとした。

結局、サラは公開プロジェクトのために、2001年5月9日にナショナル・プレス・クラブで開催された歴史的イベントの公式スポンサーになった。サラは会場の最前列に座った。ホールの後方では数十台のカメラが回り、20人を超える軍、情報機関、政府の部内者たちが、世界に向けて UFO と地球外知性体の実在について知っていることを語った。サラがそのすべてを楽しんでいたことは、傍目にも明らかだった！

報道界、そして世界は、一人の偉大な人物を失った。その不屈の精神と高潔さに導かれ、50年以上にわたり真実を求める活動をした人だった。

報道界からサラ・マクレンドンのような地位と誠意を持つ人物が立ち上がり、人類から隠され続けている最大の秘密の真実を世界に向けて誠実に報道することを、私たちはただ願い、祈るのみである。

ありがとう、サラ – あなたは今、私たちの心と祈りの中にいる。

スティーブン・M・グリア 医師  
公開プロジェクト 責任者  
バージニア州アルバマール郡  
2003年1月9日

(訳：廣瀬 保雄)

訳者注記) 関連資料が、下記にある：

[UFOの真実 \(ナショナル・プレスクラブでの記者会見\)](#)

[公開プロジェクトの摘要書 \(異常な沈黙\)](#)

# The Crossing Point

Copyright 1998 Steven M. Greer M.D.

## 光速の彼方へ - 新たなる現実への通過点 -

スティーブン・M・グリア 医師

著作権 1998 年

([CSETIのウェブサイトより](#))

洞察と結びついた経験および観察は、しばしば真理と現実の性質を解明する、新たな飛躍をもたらす。

科学（そして一般には真理の追求）とは、実証的観察を、ときにはインスピレーションを含め、知識、思考、洞察と協調的に融合させたものである。しかし、いかなる問題もそれを生み出した意識のレベルからは解決され得ないことが真実であるように、現実についての洞察および重大な科学的発展もまた、現状の環境のみから生じることはめったにない。むしろそれは、現状を超えた何かから生まれる。それが初めて人々の前に提示されるとき、多くは抵抗に遭い、非難中傷されることさえある - 斯くして、現在の科学界の指導層は、ガリレオを糾弾したバチカンの支配層からほとんど変わっていない。

地球外生命の問題を扱う場合、このことは疑いもなく真実である。なぜならば、我々が追求しようとしている現実には、本質的に人類にあらざるもの、地球上に存在せぬものであり、またそれゆえに、現在の科学的理解という、こぎれいに整理された箱の外側にあるからである。当然ながら、恒星間旅行の能力を持ついかなる進歩した地球外生命体も、我々には魔法のように見える工学技術を所有していることだろう。だから、もし我々が 20 世紀後半の人類中心の見方のみによってこの問題を追求するならば、その真実の 99.9 パーセントを見逃すことは確実である。なぜならば、新しい真実は常に現在のファインダーのまさしく外側にあり、さらにこのファインダーのレンズは、嘆かわしいほどの欠点を持っているからである。

ハーバードにある誇張され過ぎの 10 億チャンネル BETA (Billion-Channel Extraterrestrial Assay ; 地球外文明からの電波信号探知システム) を用い、知的生命体を探すために天空を走査するとき、我々は立ち止まってこう考えなかつただろうか? : この装置は、我々を探すための煙輪発見器のようなものかもしれない。すなわち、もし我々の先祖が、森から立ち上る煙輪のしるしを探して我々の文明を検出しようとしたとすれば、彼らはかなり落胆したことだろう。我々は煙輪信号を捨て、テレビやラジオの信号へと移行してしまったからである - しかし彼ら

は、電磁信号と呼ばれるこれらの異質物を検出する装置を持たなかつただろう。

我々は、地球外生命体 - 遠い恒星の周りを回っている別の惑星で進化した人々 - が、20世紀の人類の工学技術を実際に利用していると、本当に考えているのだろうか？煙輪の時代と何か別のものの時代との間 - 電波の時代はほんの一瞬間ではないだろうか？つかの間の流行、儂いカゲロウ...

地球外知性体研究センター（CSETI）は、実に数千人の人々とともに数千時間を星空の下で過ごし、異常としか言いようのない現象を目撃してきた。我々は、宇宙機が出現したり視界から消えたりするときの、興味深い写真やビデオを幾つか持っているが、本当に興味を引く現象は、ビデオにも写真にも撮ることはできなかつただろう - 実にその最良のものは、おそらく計測することも全くできなかつただろう。

これは、言ってみれば現象の良質部分が、従来の現実（conventional reality）とでも呼ぶべき世界の境界付近で起きているからである。多くのことが光速という通過点（crossing point of light）の両側で起きている - しかし最も興味深いことは、超光速の側で起きているのである。

地球外起源のUFO（未確認飛行物体）は、我々の現在の工学技術など全く利用していない - だからもし我々が、現在の科学的知識という、こざい箱の内側からのみそれらを検出し理解しようとするならば、ひどく落胆することになる。実に、我々はそのデータの99.9パーセントを見逃し、真実は我々自身の視覚にある濃霧によって隠されるだろう。

この論説で述べられることを支持する人は、ほとんどいないだろう。その内容は馬鹿げたことだと反対され、答よりもさらに多くの疑問を提起するだろう。それは現状の体制を大いに困惑させ、偏狭な人々を怒らせるだろう。その内容はまた、我々がいわば気がふれ、ET（地球外知性体）問題がこれほどにもナンセンスであること、等々の証拠とされるだろう。これまでもずっとそうだったのだから...

私自身、以下に述べる内容を書くことには随分ためらいがあった。その理由は今さら言うまでもないだろうが、それにもかかわらず、この情報が謎を解明する核心であることもまた同じくらいに確かなことである。そしておそらく、地球外知性体に関わる現象から我々が学ぶべき、本当の教訓でもあるだろう。それは、我々が知識、科学、真実、および個人的な経験において、次の段階に進むことに他ならない。

これから述べる観察事実と仮説は、UFO目撃報告という従来の経験的データを、多くの接近遭遇に伴うさらに異様な“摩訶不思議”体験に結びつけることになるだろう。一旦、物質と心、機械装置と意識、物理科学と認識および思考に関する新しい科学を繋ぐ統合理論が理解されたならば、そのとき初めて、雑多で一見矛盾するET諸現象が何らかの意味を持つことになる。我々は今、我々の未来という領域に足を踏み入れようとしているのである - ほとんど正しく認識されてはいないが、それは今ここにある隠された現実である。この論説を読んだ読者は、こう言

って困惑するかも知れない：この情報は科学か、精神世界の話か、その両方か、そのどちらでもないか、それとも... あなたがそれを必要としそれで安心するなら、どのように分類してもかまわない。どのみち、真実は常に分類を超えたところにあるのだから。

この惑星を発見し、地球の近くまたは地球上で数十年間我々を観察している地球外生命体がいることに、疑問の余地はない。ある人々は、彼らは我々の近くに数百年間、いや数千年間いると考えている。それが数百万年間だと言う人さえいる。確かなことは、彼らは今ここにいるということである。その証拠は圧倒的であり、ここで詳しく述べることはしない。

しかし、これらの疑問について考えて欲しい：彼らはどうやって地球に来たのか？生物学的生命体の自然寿命の中で、彼らはいかにして恒星間の遠大な距離を移動し、どこかの場所に到達するのか？また、そのような距離のリアルタイム交信を、どのような方法で行なうのか？

考えて欲しい：もしある地球外生命体が、1000 光年（秒速 186,000 マイルで伝播する光が 1000 年かけて進む距離）彼方の恒星系から来るものだとすると、彼らが地球に到達するためには、光の速さで 1000 年を要するだろう！再び故郷に戻るのに、さらに 1000 年を要する。すなわち、往復旅行をするのに、光の速さで少なくとも 2000 年を要するのである。これはキリスト生誕のとき以来経過した時間である。一つの生命体がこれほどの長い時間を生き、地球にたどり着くことはとてもありそうになく、ましてや故郷に戻るなど考えられない。そしてこの 1000 光年という距離は、我々に比較的近い銀河系が存在する辺りなのである。さて、交信について考えてみよう。今地球上で流行しているラジオ、マイクロ波、テレビ、その他のどのような電磁信号を用いても、この ET が地球に到着しそれを故郷に知らせるためには、（ラジオのような電磁信号の伝播速度である光の速さで）1000 年かかるだろう。ET の故郷惑星からその返事が届くのに、なお 1000 年かかる。さらに 2000 年である！

明らかなことは、いかなる恒星間旅行文明も、必然的に、今日用いられている 20 世紀地球の装置が検出できる領域の外側で作動する工学技術を発達させているだろうということである。それどころか、そのはるか外側である。その隔たりが余りにも大きいので、ET 宇宙機がその姿を全く‘見られる’ことなしに、全機体を SETI (Search for Extraterrestrial Intelligence ; 地球外知性体探査) 電波探査プロジェクトの真上に滞空させることも可能だろう（おそらく、そうしていた）。なぜか？我々は間違った装置で見ていたのである。我々は、人類にあらざる文明を、まさしくこの 20 世紀の工学技術で検出しようとしている。しかし、別の方法があるのではないか？

‘光速’移動および交信に要する時間のかかり過ぎについて先に考察したことからお分かりのように、当然ながら、恒星間宇宙から地球に到達する能力を持ついかなる ET 文明も、我々が知る線形時間/空間を迂回する工学技術を利用しているだろう。すなわち、彼らは線形時空の現実から抜け出し、彼らを検出するためにハーバードや SETI で現在使われている電磁スペクトルのはるか外側にある工学技術 - および現実スペクトル (spectra of reality) - を利用して、交信および移動を行なっているに違いない。

X線、ガンマ線、紫外線、赤外線、電波といったものは、我々がそれらを正確に測定する装置を手にするより前に存在していた。それと同じように、進歩した ET たちにより利用されている現実スペクトルもまた、確かに存在する。すなわち、ET たちは、現在のいわゆる正統 (non-covert) な科学装置では正しく測定できない、物理的宇宙 (physical universe) の諸側面を利用しているのである。

覚えて欲しい、我々はずいぶんそれを検出する科学装置を開発したためにガンマ線を発明したのではない。ガンマ線は、我々がそれを‘発見’するより前に永劫に存在していた。ガンマ線は存在していたが、人間の目に見える可視スペクトルの外側にあったために、感知されなかったのである。

同様に、ET たちは地球にいるが、通常彼らは現在の一般的な測定装置が検出できるエネルギースペクトル (spectra of energy) の外側に存在している。時々彼らは、我々の測定可能な現実にひょいと入り込むか通過するかして、結局我々に目撃されたり、写真に撮られたり、それが着陸したり、さらに墜落したり (または撃墜されたり) する。こうして彼らは、レーダー画面に痕跡を残し、またマイクロ波、超音波といったあるエネルギースペクトルにおいて顕著な場の流束を発生させることになる。しかし、それから彼らはいなくなった。どこに消えたのか？ 何に戻ったのか？ いつの時に帰ったのか？

実に、これは真の難題である。私は 35 年間様々な機会にこれらの物体を目撃してきたが、今確信していることは、これらの物体とその中にある生命体は、振動数シフト (frequency shift) および高々エネルギー物理学を利用して、線形時空と現在の検出能力の外側にある別の物理的エネルギーおよび物理的現実 (physical reality) スペクトルとの間を往来しているということである。それを次元間移動 (inter-dimensional)、または多次元移動 (multi-dimensional) と呼ぶ人々もいるが、明確に定義されて初めて役に立つ言葉である。しかし、一旦それを理解し経験すると、それはガンマ線が石器時代の人々にとり超自然であったのと同様の別の次元であることに気付く：実際には、これらの‘次元’のすべては、結局それほど‘別’であるわけではなく、この現実の一部、一区画であり、その中に折り畳まれている。

残念ながら一部の研究者は、UFO が地球外のものではなく、次元移動の物体であると結論づけている。我々自身の直接調査からきわめて明らかなことは、それは両方だということである。

すなわち、ET の現実の性質は、我々自身のそれととてもよく似ている - 彼らは旅行、交信、および関連する仕事のために、少し幅の広い現実スペクトルを利用しているだけなのである。

この少し幅の広いスペクトルは、越境して次元間移動などと呼ばれる現象に入り込んでいるが、実際にはすべてこの現実内に存在している。ただ異なるのは、それがより微細かつ繊細であるために、我々の一般的な科学装置では今のところ測定できないということである (闇の諸計画は、これを測定する能力を確実に持っている)。

この議論をもっと明確にし目に見える現実とするために、CSETI（地球外知性体研究センター）の目撃証人であるこの軍人の報告を考えてみて欲しい。

ある晩に、一人の紳士から私に電話がかかってきた。彼は空軍にいたことがあり、またロッキード・スカンクワークスのケリー・ジョンソンとも一緒に働いたことがあった。彼が電話をしてきた表向きの用件は、CSETI の UFO 事象に対する軍の目撃証人の一人になりたい、という申し出だった - しかし、もっと大きな目的は、彼が 1960 年代初めから半ばにかけて経験したあることについて、私の意見を聞くことだった。当時彼は、いわゆる体外離脱またはアストラル体投影を経験するための実践法を学んでいた。体外離脱とは、身体の繊細な部分またはアストラル体が、肉体を離れてどこかへ飛んでいくときのことである。ある日、彼の指導者が彼に、もう間もなくこのような経験をする段階になったと告げた。そしてその晩に、彼は実際に最初の OBE（out of body experience；体外離脱）を経験したのである。しかし、彼はそのとき起きたことに本当に驚いてしまった。彼は何度も、自分としては完全に正気で理性的な人間のつもりである旨をことわり、また、これから余りにも奇想天外な話になることを前もって詫びたうえで、次のように語った：彼は肉体を離脱すると間もなく、自宅の天井を突き抜けて急上昇し、その上に広がる空間へ飛び出した - そして、地球大気中のどこかに滞空していた 1 機の地球外宇宙機の側面に突っ込んだのである。それをしたとき、彼は本当にその宇宙機を揺らし（思い出して欲しいが、このとき彼はアストラル体だった）、それからその内部にひよいと入り込んだ。入るとすぐに、彼は何人かの ET が操作卓についているのを見た。彼らは彼の方に目を向け、彼を見、そしてこう言っているかのような表情をしたのである：‘おやまあ、どうして君は自分の進行方向に注意しなかったの！’

この紳士が私に、自ら経験したことについて絶対の真実を語っていることに、私は何の疑いも持っていない。彼が体外離脱（OBE）をしたこと、制御できないまま自宅の上に広がる空間へ飛び出したこと、実際の ET 宇宙機に突っ込んだことを、私は全く疑っていない - その宇宙機は、我々が体外離脱（OBE）や明晰夢を経験するときのそれにきわめて近いエネルギー形態で滞空していた。

彼は、自分のアストラル体で宇宙機を揺らした。そして、その内部にいた ET たちは彼を見た（彼もまた彼らを見た）。ここで考えて欲しい：この軍人はどのようなエネルギー形態にあったのか、また ET たちは？もし、その ET たちが天使やゴーストの類であったならば、どうして彼らは進歩した工学技術の所産である宇宙機の中において、コンピュータ操作卓を操作していたのか？天使はコンピュータを必要としない…

さて、この紳士だが - 彼は、自分が一種の変わり者に思われるだろうと考えて、この話をとてもおずおずと私に語った - 私が、これはとてもありふれた経験であること、さらに ET 工学技術が光速という通過点を超えて機能する性質を持つことを説明すると、驚いた。すなわち、ET 宇宙機や人々がそれに移行したり、それから抜け出したりすることのできる物理的エネルギーのスペクトルまたは側面は、神秘主義者や昔からの言い伝えがアストラル界（astral field or

plane) と呼ぶであろうものによく似ているのである。現実を構成するこの要素を我々が正しく検出し測定することができないからといって、それが実証的観察と経験を退ける理由にはならない。つまるところ、実証的観察と経験はすべての科学の母なのである。木から落ちるリンゴを観察していたニュートンを思い起こして欲しい。

しかし、いわゆるアストラルまたはエーテル的側面と ET 工学技術との間のつながりは何か？そもそも、なぜそれらは関係があるのか？

これを理解するために、我々はこう問う必要がある：“光速という通過点を越えたところに何かがあるのか？” すなわち、光速という壁の向こう側には何かがあるのか - 光、電子、さらに素粒子の速度または振動を越えたとき、あなたは何を経験するのか？その壁を横切って光速を超え、物質の振動数およびエネルギーを超えたところに、何が存在するのか？

当然ながら、地球を訪れているいかなる ET 文明も、恒星間旅行および恒星間交信の能力を持っている。これが意味するものは、それらの技術が、我々がラジオを使ったりジェット機で飛んだりするのと同じくらい容易に、光/物質の壁の向こう側で作動するということである。これが彼らの現実であり、世界なのである。これが彼らの携帯電話であり、自動車なのである。これが彼らが存在する世界の工学技術であり、理論であり、日常なのである。しかし、それが我々にとり魔法のように見えることは確かだ。

これを考えて欲しい：光速のとばりを横切るとき、あなたは何を発見するのか？光速という通過点を越えたところに何かがあるのか？そこで物理学はどのように働くのか？そこでの空間および時間はどのようなものか？そこで我々は思考を測定することができ、それを思考子 (thoughtron) と呼ぶのか？心と機械装置は一体化するようになり、融合して作動するのか？そこでの生存はどのようなものであり、何を経験するのか？その現実を、我々はいかにして知り得るのか？

大まかとはいえ、これらの問題に取りかかるために、我々は観察事実および経験を光/物質の通過点の両側から矛盾なく説明できる、一つの宇宙観を明らかにしなければならない。ここで私は、内面的なもの、外面的なものを含めて、現実についての私自身の理解を述べておかなければならない。そして、読者には前もって忍耐をお願いしたい。この議論は、多くの人々に不愉快な思いをさせる領域へと我々を連れて行くことになる。特に、科学的素養のある人々や、きわめて伝統的な宗教的背景を持つ人々である。ここで私が話すことは、私自身の経験と背景からきたものであることを認めざるを得ない。だから、読者には、以下に述べる考えおよび用語を考察するに際して、寛容であることを願う。

初めに、私の先入観を述べさせて欲しい：神 (God) は存在し、考え得るあらゆる形で遍在する。これは、私の生い立ちと教育に完全に対抗するものである。というのも、私は、試験管内で測定できないものは何も存在しないと信じていた両親の手で、きわめて敬虔な無神論者として育てられたからである。それにもかかわらず、私の経験がそうではないことを私に教えてく

れた。とにかく神は存在する。我々がそれを認識するか否かに関わらず...

それゆえに、私がこれから提示する宇宙観は、心の普遍的要素をその方程式の中に織り込んでいる。一部の人々は、それを神の非人格的側面 (impersonal aspect of God) と呼ぶかもしれない。偉大な宇宙の心 (Great Mind)、普遍的な宇宙の心 (Universal Mind)、原初から存在する宇宙の心 (Preexistent Mind)、絶対不変のもの (Absolute)。

私が理解するようになったこの調和宇宙では、あらゆる存在 - あらゆる原子、あらゆる星、あらゆる分子、あらゆる人々 - の根幹は、時空のあらゆる点に存在しながら、空間、時間、物質のどの点にも束縛されない、ある非局在的な本質 (non-local essence) である。この本質は覚醒し、知性を持ち、認識している。それは意識である。それは心である。それは覚醒した認識 (awakeness of awareness) であり、宇宙の分化されていない純粋な知性であり心である。それは草のあらゆる葉身に宿り、空間の隅々を満たし、宇宙の最遠部に及んでいる - なおかつ、それは分割することも、空間、時間、物質の一点にとどめることもできない。すなわち、それは一体状態にある、不変かつ不可分のものであり、その働きにより絶対不可分の統一体 (oneness) が創造されているのである。また、その働きがひとたび認識されるや、あらゆるものが非局在性を帯び、時空のあらゆる点は他のあらゆる点への窓となり入り口となる。この知性を持つ本質のあらゆるものを貫き統合する側面により、すべての存在物は、存在のこの非局在性、統合性を介して常に結びついており、実際にアクセスすることが可能なのである。

存在の仕組みは、この意識と知性を持つ存在の非局在的要素が、空間、時間、物質、等々の相対性または変化により影響されないということである。なおかつ、矛盾するようだが、この非局在的要素はあらゆる砂の一粒にも、あらゆる銀河系にも、ただ一つの形でまさしく存在している - それは常に一つであり、不可分の全体である。

非局在性 (non-locality) は、考える存在のレベルが微視的であれ巨視的であれ、その有機的かつ統合的側面により、まさしくその局所的レベルで存在している。すなわち、調和宇宙は、あらゆるレベルの絶対的統合が存在するような形で統合されているのである - だから、神秘主義者たちが、一滴の水の中に全宇宙を見るとき、彼らは正しかったのだ。

原初から存在する、この絶対不変の知性と意識の場から、他のすべてが現れる。繰り返すと、矛盾するようだが、分割することのできない知性と意識の統一場は、そのレベルがどれほど大きくても小さくても、あらゆるレベルで存在している。絶対不変のものは絶対不変のままである - なおかつ、それはあらゆるクォーク (quark ; 素粒子) に存在する - しかし、そのクォークにより束縛も、制限も、分割もされない。

この驚嘆すべき無 (Nothingness) (これは絶対認識で充滿している) から、表現された調和宇宙をそのすべての星々、銀河系、原子、人々とともに生じさせるために、単純であると同時に複雑優雅な、ある創造的プロセスが存在する。すなわち、絶対不変の領域から創造がわき起こり、それは神の創造的側面 (Creator aspect of God) と呼ばれているものにより維持され

るのである。この創造的プロセスに不可欠な要素として、まず意思 (will)、すなわち想念の音声成分 (sound component of thought) がある。次に想念の映像成分 (visual component of thought) があり、アストラル界の構造的側面 (structural aspect of the astral world) があり、物質世界を生み出す母体 (matrix of the material world) がある。これらの諸要素が宇宙全体を展開し、そのすべてを包み込んでいる。

絶対不変のものの創造的側面 (Creator aspect of the Absolute) は、その意思 (His Will) の働きにより、次のようにして、きわめて繊細な部分からきわめて物質的な部分まで、調和宇宙を創造する：

- 純粋な理念/想念 (idea-forms/thought) の音声成分が、ありとあらゆる創造物 - 蟻であれ銀河系であれ - のための理念/想念の音声質である、普遍概念 (universal) の側面 (必要ならばそれを次元と考えてもよい) を生じさせる。創造におけるこの最初の理念 (idea form) を青写真として、進化と変化がその周りに起こる。調和宇宙そのものが、この想念の音声成分による音声質として存在する。非局在的な、遍在する心/知性 (mind/intelligence) という本質が、この段階とそれに続くあらゆる段階を貫いて存在する。一部の伝統においては、宇宙全体とそのすべての内在物を含む、この理念/音声の成分または形態を、'原因の世界または因の世界' (causal or causative world) と呼んでいる。聖書その他の教えに言う神の言葉 (Word of God) とは、このことだと私は考えている。'初めに言葉ありき...'

続いて、想念の音声/理念の成分は、抽象性をより減じた、しかしまだきわめて微細かつ繊細な側面を生じさせる。一部の人々はそれを'アストラル' (astral) と呼んでいるが、私はそれを意識的-知性的映像成分 (conscious-intelligent visual ; CIV) と見なしたい。原因の世界の青写真または理念/想念/音声を内包するこの側面は、より明確であり、想念につながっている形が表現されたものとして、'見る' (visible) ことができる。この世界は広大で美しいものであり、多くの明晰夢がこの世界または側面との相互作用に関係している。あの体外離脱をした軍人は、基本的にこのエネルギー形態または側面に位相シフト (phase shift) していた ET 宇宙機と、アストラル体または CIV 体相互作用をしたのである (これについては後でさらに述べる)。

- 絶対不変の、分化されていない宇宙の心は、原因の世界の理念/音声/想念、およびその CIV またはアストラルとともに、いわゆる物質宇宙を支える、または生じさせる母体を創造する。理念/想念/音声という言うなれば青写真および繊細な CIV が、より粗い、または表現された物質宇宙の創造を実際に支え助ける。しかし物質宇宙は、原因および CIV の側面もそうであるように、一体状態にあり分割することのできない、絶対不変の心 (Absolute mind) を内包している。実に、科学が現在の装置類を用いて測定し研究することのできる、表現された物質宇宙のありとあらゆる側面が、これらのより微細な側面、またはエネルギースペクトルのすべてに結びついているのである。物質宇宙を織りなす縦糸と横糸は、その基礎を意識と想念に置いており、またアストラルまたは CIV という創造母体を内包している (またはそれと結びついている)。それゆえに、これらの

諸側面を、全くかけ離れた‘別の次元’と見なすのは正しくない。

このかなり大まかで簡単な概説が、いくつかの細部を除外していることは認めざるを得ない。それらはまた別に論じるのが適切である。しかし注目すべきことは、上に述べたそれぞれのレベルにおいて、多くの中間段階および細部の表現があるということである。すなわち、原因および CIV（意識的-知性的映像成分）の側面は、幾多の分化、表現、働きの諸法則を内包しているのである。それは、物質宇宙が微細な素粒子、渦巻く巨大銀河、および銀河集団を持つのとよく似ている。実に、これらの広大な領域に作用を及ぼしている細部および諸法則の様相は、物質宇宙のそれが小さく見えてしまうほどであり、この論説で明らかにすることは余りにも愚かと言うべきである。

人間というもの（これには人類以外の高い知性を持つ生命体、すなわち ET たちも含まれるだろう）は、あらゆる側面（または次元）をその内に折り畳んで持っている。人間の意識または精神は、個々人がそれに気付かなくても、絶対不変の意識的存在（Absolute conscious being）と常に接続している。というよりも、すでに述べたように、意識または純粋な心はその本質的側面において、実に我々を覚醒せしめている - そして我々を我々たらしめている - そのものなのである。意識または純粋な心は一体状態にあり、分割することができない。それは常に絶対不変のものと本質的に一体であるが、我々は多様性と分離のみを見るように教えられている。こうして、個別化（individuation）が一体状態（unitive state）を圧倒する - その結果、我々は自分たちが分離した別々の存在だと考える。これは、すべての宗教的実践が、その儀式、祈り、瞑想の中で正そうと試みている、一つの知覚欠損である。

アリ（Ali）による古代スーフィー（\*イスラム）の教えは、こう述べている：“汝の中に宇宙が折り畳まれているというのに、汝は汝自身を小さな者と考えるのか？”この修辭的疑問は、心のホログラフィー的性質と、宇宙における人間の潜在的立場を思い起こさせる：我々は、心または意識の非局在的、遍在的側面を経験することにより、宇宙のあらゆる側面に直接アクセスし、経験することができる。なぜならば、意識の非局在的側面こそが認識そのものの核心だからである。宇宙のあらゆる側面は、常に‘そこ’にあり、経験しさえすればよい。

人々が時折、非局在性の自然な経験をするのは、心のこの側面または性質のためである：彼らがある夢を見ると、翌日または翌年に、夢の中で知覚された出来事が見たとおりの正確さで生起する。なぜ、このようなことが起こり得るのか？

心の性質は、それが一体状態にあり、分割することができず、時間空間のあらゆる点に存在している - しかし空間または時間のどの側面によっても、束縛も制限もされない - というものである。すなわち、この特質により、空間時間の中の二つの点に同時アクセスすることができるということである。人類の歴史は、このような報告で満ちている。それらは、現代の科学により不思議なものとして退けられるのが普通であるが、実際には次の科学的飛躍を理解するための鍵を握っている：意識と非局在的現実の研究。

明晰夢の中では、その人のいわゆるアストラルまたは CIV(意識的-知性的映像成分)の側面が、空間および/または時間の遠い点を呼び起こすか知覚するのに伴い、益々深まる非局在性の経験をする。これは、一旦我々が、心または意識がその基本的性質を帯びて常に存在していることを理解したならば、それほど不思議ではない。心または意識は、時間的限界も空間的限界も超越した一体状態にあり、それにより空間および時間のどの点にもアクセスすることができるのである。初めは一度に一点である。しかしこれを、神 (God) の特権および能力と混同すべきではない。神、すなわち絶対不変の普遍的心 (Absolute universal mind) は、すべての時と場所で、常に同時にすべての物事を知っている。しかし個人の場合、上に述べた特質、およびその個人の基本的認識に不可欠な一体状態にある心の性質により、予知、インスピレーション、直観、遠隔視、等々を経験することができる。

プリンストン大学のロバート・ヤーン博士は、この意識の非局在性の、機械システムに関係する別の側面を研究した。読者はこれらの実験結果を学ぶべきである。それは、心および思考が、例えば乱数発生器に向けられるとき、その装置が発生する結果に影響を与え得ることを実証している。これは、認識と物質の間にはある結びつき (nexus) またはつながり (link) が存在するがゆえに、達成されるのである：物質を織りなす縦糸と横糸は、意識とともに織り込まれており、実際には別の振動数で表現された心というものに過ぎない。だから、個人は祈りや視覚化により、自分の身体や別の人間の健康に影響を与えることができるし、機械システムにさえも、思考および意識を経由して影響を及ぼすことができる。

ラリー・ドッシー博士らは、この心または現実の非局在的性質を実証する、多くの科学研究を収集した。読者は、その意味を十分理解するために、これらを詳細に学ぶべきである。歴史は、このような不可解な出来事の報告で満ちている：祈りの最中に自然に空中浮揚をした人物、物体を物質化したり非物質化したり、部屋を越えてそれを遠隔移動したりすることのできるアデプト (達人)、等々。それを奇談や迷信的話題として退けることは容易であるが、人類の歴史および最近の科学的実験は、意識が非局在的であること、我々が定義する時間空間の外側で作用し得ること、離れている無生物または機械に明らかに影響を及ぼし得ることを、はっきりと確証している。

一旦、基礎にある宇宙観を正しく理解したならば、上に述べたことを理解するのは容易である：意識は決して分割されず、どこにでも存在し、空間にも時間にも決して制限されず、なおかつ、矛盾するようだが、空間および時間のあらゆる点に存在する - あらゆる原子からあらゆる銀河系に至るまで。このように、意識と物質の間の接続は本質的であり、不自然なことでも難しいことでもない。想念された事象は、この結びつきの中で次に現実化するのである。

以前の論説で、私は最近起きた ET 工学技術の異常な現れ方について論じた。ET 現象に関わるこれらの多くの側面は、主流の UFO 誌や研究者たちからさえも、抑圧されたり報告から除外されたりする。なぜならば、それらの現象は、従来の科学的基準という常識の外にあるからである。しかし、最も我々の興味を引くべきことは、まさにこれらの ET 工学技術の異常な現れ方である：それらは、我々の現在の科学的知識など幼稚園児の思案にも思える、宇宙の新しい

理解への扉を開けることになる。

本題に戻ろう：ET 宇宙機とその搭乗者たちは、どのようにして広大な恒星間宇宙および時間を往来しているのか？ よろしい。一旦、あなたが光速という壁の向こう側に振動数シフトすると、その広大な空間の剛直性は完全な柔軟性になり、その大部分は迂回可能であることが分かる。一瞬のうちに ET 宇宙機とその搭乗者たち全員が、上に概観した調和宇宙のより微細な側面に位相シフトし、次には現代科学に知られている物質宇宙よりもさらに非局在的な、ある側面または次元の中に存在する。すなわち、これらの物体がしばしば消えたり、瞬間に相当の距離を隔てて再び現れたりするように見える現象は、それらが固定された時間/空間の物質的側面から、本質的により非局在性を帯びた側面に位相シフトする、またはその逆のシフトをする、という事実によるものである。（そのとおり、非局在性は相対的に相対的である）

私の観察によれば、これは高々エネルギー物理学および電子工学を用い、一瞬のうちにその物質的 ET 宇宙機と搭乗者たち全員を、先にアストラルまたは CIV（意識的-知性的映像成分）と述べたものにきわめて近い、調和宇宙のある側面へ完全に位相シフトさせることにより行なわれる。この位相シフトは、強力な回転電磁場、重力場、および質量慣性の間の、ある複雑な相互作用を介して行なわれる。その宇宙機が光速という通過点のこちら側にあるとき、それは何か物質的な作られた物体のように見えるが、質量慣性および重力を否定するような動きをすることができる。一旦、それが光/物質の通過点の向こう側に位相シフトすると、それは消えたように見える。しかし、それはいなくなったのではない。それは、我々の SETI（地球外知性体探査）BETA 電波が及ばない、その場所にいる - 我々の軍の目撃証人がアストラル体でそれらの宇宙機に衝突した、その場所にいるのである！

宇宙機は、その形態またはエネルギースペクトル（または次元）に存在しながら滞空し、あるいは光速のはるか何倍もの速度で物質宇宙の中を移動することができる。その速度は、少なくとも光速の壁のこちら側で測定される場合、非相対論的である。しかし、1000 光年の距離を瞬時に横切ることにはできない。なぜならば、この側面に存在しながら物質宇宙を移動するとき、そこには‘抵抗’（drag）の要素があるからである。言い換えれば、物質宇宙の底部（underbelly）に粘着する物体の成分があり、それに伴う宇宙抵抗係数（coefficient of cosmic drag）が、広大な恒星間距離を瞬時に輸送することを妨げるのである。ET 宇宙機はまた、側面（または次元）間の‘接合点’（junction）のように作動し、両側面の中間に位相を合わせることができる。つまりは、宇宙機は部分的に両方の側面に存在することも可能である。

宇宙機は、こうして SETI 協会の探査が及ばない領域に滞空することができる - そして、探知されないままに滞空し続けることができる。宇宙機が物質的側面に完全に姿を現し、さらに建物の中の SETI 協会員がわざわざ外を眺め、装置を見 - それを正直に報告しない限り。

同様に、ET 交信システムは、心、思考、およびコンピュータ制御のテレメトリと接続している。数十年間、人々は UFO とのテレパシクな経験として退けられてきた出来事を報告してきた。そのような報告が告白されるや否や、科学界は怒りの声を上げ、事件全体を放り出す。

なんてことだ、彼らは赤ん坊を風呂桶の水ごと捨ててしまった。ヤーン博士、ドッシー博士、その他の人々が実証したように、心および思考は物質、さらには工学技術的システムにさえも接続し、それに影響を与えることができる。この現象に関わる 35 年間の経験から明らかなのは、恒星間距離をリアルタイムで交信するために、ET の交信プロトコルは AT&T 社のマイクロ波システムを使用していないということである。それは不可能である。ET たちは、思考および意識と直接相互作用をするほどに進歩したコンピュータ制御システムを使用しており、そのようにして非局在的なエネルギースペクトルにアクセスし、線形時間および空間を迂回しているのである。

まさに数千人の人々が、彼らに対して思考/物質またはテレパシクな要素を持つ、これらの物体と相互作用をしてきた。我々がそのような報告を退けることは、危険な賭だと私は感じている。我々は、次の偉大な科学に向かう扉を荒々しく閉めているのかもしれないのだ：意識、そして意識と物質および工学技術的システムの接続に関する科学。

これらのシステムを、脳波の活動およびそのコンピュータとのつながりを用いた人類による現行実験と混同してはいけない：脳波の実験では、光速でしか進まない電磁エネルギーが依然使われている。ここで述べた ET システムは、光速という通過点の向こう側で作動するものであり、工学技術の力を借りながら、思考および心と直接に接続する。そのようなシステムを介して、情報は数百万光年の宇宙空間を瞬時に伝達される。それは、心、思考、およびエネルギーの非局在的側面が利用されているからである。その交信システムには、上に述べた宇宙抵抗係数に起因する、リアルタイムの遅れがない。

本質的に、電磁気や物質よりもさらに微細 (sub-electromagnetic, sub-material) なエネルギースペクトルがある - しかし、それはまさに実在するものであり、物理的 (physical) なものである。この分野に関連して使われる超-物理的 (meta-physical) という用語は、きわめて不正確かつその場限りである：ホログラムもフラッシュライトも、500 年前の人類にとっては超-物理的または超自然的 (supernatural) であっただろう！重要な点は、ここで述べられたエネルギーもエネルギースペクトルも、自然に発生した創造の側面だということである。それらはすべて、我々の周りにも内部にも存在する。それは‘他のもの’ではない。それは超自然的でもなく、超-物理的でもない。それはただ、現代科学によって正しく研究され、理解されてこなかったに過ぎない - 恒星間宇宙を往来する進歩した ET 諸文明は、それを研究し、理解してきたのだ。

数十年前に遡り、ごく普通の人々がこれらの ET 宇宙機の一つを目撃し、思考のみによってそれと直接相互作用をした、多数の報告がある。すなわち、その目撃者が‘あー、あの物体が右に曲がらないかな’と考えると、その宇宙機が右に曲がる。または、宇宙機が飛び去るとき‘あの物体が向きを変え、また戻ってこないかな’と考えると、それが直ちに停止し、向きを変え、再び戻ってくる。偶然の出来事として片付けられる報告も、少しあるかもしれない。しかし、これらの報告の多さは、これらの物体が思考と直接に接続できるテレメトリ能力を持つ、と経験的に結論せざるを得ないほどである。

私はどこかで書いたが、ET 工学技術のこの分野は、一般に「意識の力を借りた工学技術」(consciousness assisted technologies ; CAT)、および「工学技術の力を借りた意識」(technology assisted consciousness ; TAC) と考えることができる。すなわち、彼らの工学技術は、上に述べた結びつきを利用しているのである。そこでは、心/意識、思考が物質、機械装置、交信装置、等々と工学技術的かつ再現可能な方法で接続する。CAT (意識の力を借りた工学技術) とは、個人 (またはグループ) の意識および思考が、受容体装置の機能を助ける、またはそれと接続する場合のことである。また TAC (工学技術の力を借りた意識) とは、ある装置が、個人またはグループの意識または思考を増強する、投影する、または助ける場合のことである。

例を挙げよう。CSETI (地球外知性体研究センター) は、かつてベル研究所/ルーセント・テクノロジー社で働いていた一人の科学者を見つけ出した。彼は 35 年以上も前、ある闇のプロジェクトに取り組んでいたとき、ある将軍から 1 個の ET 交信装置を渡された。この科学者は、その装置を調べて逆行分析 (reverse engineer) するように頼まれた - すなわち、それを分解し、どのように働くのかを明らかにするのである。彼の話は、次のとおりだ。

それはグレープフルーツほどの大きさを持つ、丸い暗色物体で、表面は織り目加工されていた。彼がそれを受け取ると、その装置は直接彼の意識の中で、思考により‘話し’始めた。そのことに彼は驚愕した - 特に、その装置が心の中で彼にこう告げたときだった：彼にその物体を調べないように頼んだ人々は、内心悪意を持っており、科学者はその装置を破壊すべきだと！

この難問にどう対処するか悩んだ末に、この科学者は、実験中に‘誤って’その装置を過熱させてしまった。そして装置は破壊された (少なくとも物質的には)。しかし、それが破壊された後で、彼は最後の思考がこう言ったのを聞いた： ‘ありがとう...’

これがとても奇妙に聞こえることを、私は承知している。しかし、最も奇妙なことが真実なのである。そしてこの報告は、とても奇妙ではあるが真実な報告の一つである。我々は、このような情報から光の速さで遠ざかり - 我々の電波信号に戻りたいかもしれない。しかし、未来がここにある。もし我々がそれに賢明に対処しなければ、他の誰か - その装置を初めに渡したあの将軍のような - がその未来を乗っ取り、我々が行きたくない場所に連れていくだろう。

過去 8 年の間、CSETI はこの現象を追いかけて世界中を回り、その現れ方を観察してきた。写真に撮ったり、着陸痕を見つけたりすることに得意な人々がいる。これらの証拠となる多数の昼光写真がある。レーダーによる証拠もある。4000 以上の着陸痕が、テッド・フィリップスにより記録されている。リチャード・ヘインズ博士は、これらの物体に関する数百件のパイロット報告を所蔵している。

我々の目的は、これらの ET と彼らのレベルで相互作用をすることである。そして、彼らの現実とは何かを考え、そこに行くことである。それは一つの実験であり、経験である。それは、

関係者の全員にとり、めくるめくような体験だった。

この8年間に、我々は、この論説で定性的に述べられた物事のあらゆる側面を伴う現象を経験し、目撃してきた。この現象を列挙すると、以下のとおりである：

- RV X 2 (CSETI トレーニング資料参照)。我々の実験である CE-5 構想 (CE-5 Initiative ; 第5種接近遭遇) には、数多くのプロトコル (手順) が含まれる。その幾つかは明白かつ現実的であるが、中にはきわめて実験的で、大いに論議を呼ぶものもある。論議を呼ぶプロトコルの一つでは、グループによる非局在的意識へのアクセスが行なわれる。続いて、遠く離れた、あるいは近くにいながら人間の視覚の可視スペクトル外に位相シフトしている ET またはその宇宙機を、(意識によって) 遠隔視 (remote viewing ; RV) する。一旦、ET またはその宇宙機が'捕捉' (locked on) され視覚化されたら、そのプロセスを逆向きに進行させ、ET またはその宇宙機を、CIV (意識的-知性的映像成分) /映像的思考成分の誘導 (visual thought component vectoring) により、CSETI 調査隊サイトに向けさせる。すなわち、ET/宇宙機には、先に論じた CIV 成分を介して、我々の座標および所在地がはっきりと示される。CSETI 調査実験はこのプロトコルにおいて、その ET 宇宙機を RV (意識による遠隔視) し、その CAT (意識の力を借りた工学技術) テレメトリシステムに接続し、その宇宙機を我々の正確な位置に誘導することが試みられる。本質的に、我々はヤーン博士が PEAR (Princeton Engineering Anomalies Research ; プリンストン大学工学部特異現象調査) 研究室で行なっている実験を、動的応用設定の中で行なっているのである：明確な指向性を持つ意識-映像的思考を ET 交信装置に接続する。彼らが我々を見、我々も彼らを見、コンタクトのための経路が確立されるように、十分な正確さをもってそうすることを試みる。

これが一部の人々にとり、どんなに奇妙に思えることか、私は完全に承知している。しかしこれは、しばしば物体が頭上にひょいと現れる - またはそれ以上の - 結果をもたらしている、一つの実験なのである。誘導し、コンタクトを確実にするために、照明、レーザー、および電波信号を使用しているが、プロトコルの核心はまさしく CAT (ET たちからの応答に応じて、しばしば TAC - 下記参照) である。

RV X 2 の要点は、以下の要素である：

- 意識の非局在的要素にアクセスする
- ET またはその宇宙機を正確に遠隔視する
- CIV 認識の中で ET の CAT 交信システムに接続する
- グループが一致して繰り返す、深宇宙から調査隊サイト特定細部に向かう映像的思考を見せることにより、ET 宇宙機を調査隊サイトの区域へと明確に誘導する

- 出現前に ET から何らかの応答があれば、それを遠隔視する（相互作用的 RV）

プロトコル全体が、これらの生命体と平和的なコンタクトおよび関係を確立するという、明確な意思を持って行なわれる。

RV X 2 の実行中に、複数のメンバーが同一の物体または生命体を‘捕捉’し、それらの位置および/またはその出現時刻と場所に関して、同じ情報を受け取ることがしばしば起きる。この情報は、グループが目撃した実際の出来事で確認されない限り、確かなこととは見なされない。

結果として、世界中でこれらの実験を行なった期間中に、我々は先に述べた種々の工学技術を実証する経験をした。それらを一般的に述べると、次のとおりである：

- 巨大な構造（円盤、三角形、等々）を持つ宇宙機の突然の出現。それは数秒、さらにその何分の 1 かの間に‘ひょい’と現れ、次に姿を消す。しかし、複数のメンバーにより目撃される。
- 最大で数分間の、より長時間に及ぶ物体の出現。物体はそれから姿を消す（可視的/物質的な知覚の外側に位相シフト）。
- 様々な色彩の球形物体から成る、知性を持つ探査体。これは頭上、さらにはグループの間に出現する。知性的に制御されているだけではなく、それ自体が意識と知性を持つ（進歩した AI - 人工知能）。通常これらは、半透明からやや不透明な赤、青、緑または金色の球体であり、サイズは 6 インチから 1 ないし 2 フィートである。探査体はメンバー個人またはグループと意識的に相互作用をし、次に姿を消す。探査体は、ほぼ間違いなく TAC（工学技術の力を借りた意識）を実証するものであり、宇宙機に搭乗している ET の意識および思考（さらに性格も）が、工学技術の力を借り、制御されたやり方でグループの中へ投影される。
- すべての方位で同時に聞こえるかのような、全方向成分を持つ特異なビーブ音または高い音。これは、CSETI ビーブ音を電波で発射した後にしばしば起きる。調査隊サイトからは、常にこのビーブ音が送信される。
- 機器、自動車、等々への特異な電磁気的作用（EM）。ET 宇宙機の接近とともに、しばしば機器が機能不全に陥る。このようなことが、1993 年にメキシコで起きた。このとき、直径 800 フィートの無音三角形がグループに接近し、すべてのカメラおよび他の電子機器が機能しなくなった。他に発生した現象には、レーダー探知機、レーザー探知機の始動、自動車電気系統の機能低下または電圧低下、メンバーの皮膚または衣服への静電気帯電がある。また、反時計回りに回転する宇宙機が接近したとき、私のコンパスが目盛盤を反時計回りに回転したことが数度あった。CIV/物質（下記参照）の接続が起き

ている間に、私のコンパスの磁北がほとんど真南（160度の狂い）に変化し、ほぼ3ヶ月間そのままになった。コンパスは現在、完全に機能している（次の接近遭遇までは！）。

- 高速移動物体（fast-walker；早足）との相互作用。RV X 2 の後で、最初は衛星のように見える複数の物体が、グループにより頻繁に目撃される - しかし物体は、それに向けられた思考または信号と相互作用をする。例を挙げると、高空を飛んでいる物体が思考指令を受けるや否や、それは停止したり不意に方向転換したりする。衛星は後退したり、右旋回したり、急降下したりしない。また、地上の人々と相互作用をしている間に輝きを増すこともない。この種類の出来事は、数度の CSETI 調査活動中に、多数のメンバーにより目撃されている。
- CIV（意識的-知性的映像成分）/物質の接続現象。この種類には、ET 物体が光と物質の通過点の向こう側にあり - こちらの側面または次元に‘滲み出’（bleed through）始めるときの、多くの現象が含まれる。しばしば調査隊チームは、辺り一帯に突然ストロボライトに似た光が放射される現象を目撃する。これは複数のメンバーが同時に見ることから、眼に起因する網膜発火ではない。続いて ET 宇宙機、さらには ET 自身がかすかな姿を現し、それから形になる - ある種のきらめく電子ホログラムのようである。これらが、グループ自身の内側、またはそこから数フィート離れた場所に出現したことがある。このようなきわめて接近した遭遇が起きている間は、しばしば複数の現象が発生している：きらめく ET またはその宇宙機の視覚認知とともに物体の遠隔視が行なわれ、AI 探査体がグループの中へ飛来し、特異な音が聞こえる。往々にして、メンバーたちは誰かに触れられたと報告する。しかし、彼らが目を向けると、かすかに揺らめく光が見えるだけである。この種類の出来事が長時間続く間に、異常な時間/空間の膨張または収縮が起きる：時間は止まったように - またはとても速く進んだように感じられ、グループの周囲空間はより明確な輪郭を持つものとなる。これらの種類の遭遇が2時間以上続いたことがあるが、つかの間のことなのかもしれない。1998年に英国オールトンバーンズの近くで、別々の夜にきわめて巨大な円形宇宙機が目撃された。それはひょいと現れ、数秒で消えた。そのことがあった後で、グループの近くに同じ物体が降下した。それはきらきら輝く形をしており、それと分離して ET 生命体たちのきらめく部分があった。彼らはグループのメンバーそれぞれの間に入って並んだのである！設置点の温度は、少なくとも華氏 10 ないし 15 度上昇した。メンバーの全員がその物体と生命体たちを見た。生命体はどれも完全に‘固い’（hard）物質ではなく、ただ部分的にこちらの次元にとどまっていた。

1997年に英国で調査のトレーニングをしていたとき、私の信頼すべき同僚であるシャリ・アダミアクと私は、我々が借りていた荘園屋敷の2階の一室にいた。チームの他のメンバーは6名ほどだったが、荘園屋敷の外にいた。突然私は、1個の青白い光体または物体が、閉まった窓を通り抜けて部屋に飛び込んできたのを見た。それは暖炉近くの空中に浮かび、次に拡大して身長約3フィートのきらめく ET になった。まるで繊細な電子ホログラムが出現したかのようだった。それは意識と知覚を持っていた。それは物質的かつ可視的であるすれすれの状態に

あったが、はっきりと分かった。これは、ET の意識および CIV（意識的-知性的映像成分）/ アストラル体の AI（人工知能）投影であり、それがこの部屋に投影されていたのだった。他のメンバー（彼らは最初、シャリと私がこの部屋にいたことを知らなかった。そして翌朝になるまで、我々二人が経験したことを知らなかった）が外で目撃したことは、1 個の青白い物体が空から急降下し、二人がいた部屋の窓に飛び込んだということだった。彼らは全員この物体を目撃したが、その後でシャリと私がこの ET との間に持った経験に気付くことはなかった。これは、TAC（工学技術の力を借りた意識）のもう一つの好例である。

- 明晰夢の状態における ET またはその宇宙機との相互作用。ET 工学技術の現実は、彼らが CIV 次元とこの物質次元との間を、境目なく移動できるようにする。また、彼らの交信システムは、CIV 伝達モードの方を好むために、しばしば個人（ときには複数）は、夢の状態に細部に及ぶ相互作用をする。このエネルギースペクトルと接続する CIV/アストラル成分および工学技術は、夢の状態と容易に接続できるようにすることを覚えて欲しい。というのは、明晰夢の状態とは、個人の CIV/アストラル体または成分が活性化されたものだからである。ET たちは、我々が電話を取ってニューヨークを呼ぶのと同じくらい容易に、この側面に接続することができる。私の考えだが、ET たちが最も普通に我々個人と相互作用をしてきた方法は、明晰夢の中であって、物質的なコンタクト（身体的コンタクト）ではない。物質的なコンタクトは起きてきたが、それは危険であり、一旦これらのより繊細な工学技術がマスターされ理解されたならば、不必要である。CIV/アストラルのスペクトルが、恒星間交信および旅行のために ET たちが移行しているに違いない好ましい領域であること - また、それが明晰夢の中で活性化または利用されているものと同じスペクトルであること - が正しく認識されたならば、これほど多くの人々がこの種の経験を報告する理由を理解することができる。上に述べた RV X 2 プロトコルは、ET 工学技術および ET と意図的に接続するために、拡張された認識および CIV 成分の意識を活性化するものである。
- 固体物質を通過する宇宙機。一度ならず、我々は固体に見える ET 物体または宇宙機（その金属表面から日射が照り返っている白昼の目撃）が、衝突することなく、そのまま山体に入っていくのを目撃した。これは、宇宙機の物質に振動数シフトを起こさせ、実質的に互いに影響を及ぼすことなく、従来密度の物質を網目のように通過することにより、達成される。すなわち、振動数シフトは、一つの固体物体がもう一方の物体を、相互作用を及ぼし合うことなく通過することを可能にするのである。我々が‘固体物質’と呼んでいるものの大部分は、少しも固体ではない - それはほとんど空間である（または何かである - ヒント：上に概要を述べた宇宙観を参照）ことを覚えて欲しい。この現象は、数十年間報告されてきたが、一部の人々がそのような報告を、‘霊もどき’またはポルターガイストのようなものとして退ける原因となってきた。本当は、それは物質の振動数を変えて（彼らはまた、同様な方法により時間/空間の関係をも変えることができる）、より深い、または繊細なレベルの実在上で作動する、ET 工学技術のもう一つの現れに過ぎない。さらに指摘すべきことは、私の知る間の軍関係情報源が直接証言したことが、少なくとも 1953 年には、人類の秘密プロジェクトが物体の物質化および非物質化

を行ない、それを区切られた空間を越えて移動していたということである。我々が 1953 年にこれを秘密裏に行なっていたとするならば、恒星間 ET 工学技術がどれほどの進歩を成し遂げられるのか、想像に難くない。

このリストをさらに続けることもできようが、読者は上に述べたことから、ET 工学技術の現れ方がどれほど異常なものであり得るのか、うかがい知るはずである。上記のことから、ET 事象がなぜ、CIV（意識的-知性的映像成分）/アストラルまたは因のレベルに起源を持つ現象と混同される可能性があるのか、容易に理解される。それは ET ではなく、同じ現れ方の成分を持つ現象なのである。文献資料が ET、天使、ゴースト、そしてあらゆる種類の、すべてをひと絡げにした奇現象の錯綜した報告で満ちていることは、少しも不思議ではない。確かに、数百年前の人々にとり、現代人は超自然的な何かに見えただろう：携帯電話、ホログラム、衛星テレビ、レンジ・ローバー（\*4WD 車）を持って、1692 年にマサチューセッツ州セイラムの教会に現れることを想像して欲しい。あなたは魔女として、即刻火あぶりにされただろう！

それでも、調和宇宙が多くの存在レベルを含むことを覚えておくことは重要である。ET にあらずる CIV/アストラルおよび因の世界があり、その存在者たちがいる。また一方で、時々、またはほとんどの時をそれらの繊細な領域に属する物理的宇宙の側面と接続し、それを利用している ET たちがいる。（スティーブン・M・グリア 医師による 'Extraterrestrials and the New Cosmology ; 地球外生命体と新しい宇宙観' を参照）

また、次のことも覚えておくべきである。ET のすべてが、そのような進歩を遂げているわけではないだろう。数十億の銀河系がそれぞれ数十億の星々を持っていることを考えるとき、一部の ET たちは石器時代の人類のようであり、また一部は我々と同じ進化のレベルにあり、さらに別の ET たちは、今日の我々よりも数百万年進歩していると思われる。SETI（地球外知性体探査）協会の人々よ、あなたたちが、我々と同じレベルにあって、何よりも線形的な電波技術を今も利用している ET を発見しますように。見込みはあるだろう、そこには誰かがいる。

しかし、このことを知って欲しい：電波や内燃機関を超えて進歩した ET たちが、確かに存在する。彼らは地球にいる。彼らは我々の周りにもいるかもしれない。我々は、まさに我々の目の前に滞空する類い稀なる機会に、心と目を開こうではないか。物事の多くがとぼりの向こう側 - 光速という通過点を越えたところ - に存在するからだ。それは人類による探求を待っている。

スティーブン・M・グリア 医師、CSETI 責任者  
1998 年 11 月 5 日  
バージニア州シャーロットツビル

（訳：廣瀬 保雄）

# GLOBAL FRAUD: GLOBAL HOPE

An Address to the International UFO Congress  
Fort McDowell Resort, Scottsdale, Arizona  
Saturday, February 26, 2011

by

Hon. Paul Hellyer, P.C.  
Former Canadian Minister of National Defence

## 壮大な詐欺：新生への希望

元カナダ国防大臣、枢密顧問官ポール・ヘルヤー閣下による  
国際 UFO 会議に向けた演説草稿  
2011 年 2 月 26 日（土）

[\(公開プロジェクトのウェブサイトより\)](#)

世界の金融システムは完全な詐欺である。それは友人、隣人から金を騙し取ったバーニー・マドフ同然の壮大なネズミ講 (Ponzi scheme) であり、幾世代にもわたり搾取してきた被害者の数を合算するならば、その数千倍も悪辣である。

これら二つの詐欺の主な相違点は、マドフが法律に違反していたのに対して、国際銀行カルテルは代々の国王、大統領、首相たちを説得し、自分たちの窃盗行為に法的保護を与えるようにしてきたことだ。

銀行ネズミ講は驚くほど単純である。彼らは複数の個人または団体に同じ金を同時に貸し、その利息を各々から回収する。しかし銀行が実際に貸すのは彼らの信用 (credit) であり、その恩恵の対価として取り戻すのが、利息付きで返済しなければならない借金 (debt) である。

彼らが同じ金を貸す回数をレバレッジ (leverage) と呼ぶ。その起源はきわめて古いが、ここでは英国ロンドン、ロンバード街の金匠 (goldsmiths) のことから始めれば十分である。彼らは金貨を預かり、いつでも換金できる証文を発行した。彼らは、より高い金利で顧客に金を貸し出せることを条件に、預金者には名目だけの利息を払った。間もなく彼らは、金庫室に保有する以上の金を貸し出せることを知った。というのは、金銀を受け戻しに来る預金者は常にごく少数だったからである。それは一種の詐欺であり、違法なことだった。違法ではあったが、彼らは長い間うまく処罰を免れた。そしてこの違法行為は、ウィリアム国王が戦費調達のためにイングランド銀行の設立を許可したとき、合法化されたのである。金持ちたちは銀行を設立するために金銀 120 万ポンドを出資し、これが利率 8 パーセントで政府に貸し付けられた。

ウィリアム国王は謝意を示すために、イングランド銀行が 120 万ポンドの銀行券を刷り、それを高利率で貸し出すことを許可した。こうして実質的に、イングランド銀行は同じ金を 2 回 - すなわち政府に 1 回、人々に 1 回 - 貸すことを許可されたのである。

銀行の強欲と政治家たちの共謀により、この比率は長い年月の間に著しく上昇した。20 世紀初頭、米国の国法銀行は 25 パーセントの金準備 (gold reserves) を保持することを義務づけられた。これは、彼らが同じ金を 4 回貸し出せたことを意味する。私はカナダの銀行が 8 パーセントの現金準備 (cash reserve) を維持するよう義務づけられたことを覚えているが、これは彼らが同じ金を 12.5 回貸し出せたことを意味する。

ミルトン・フリードマンが現金準備 100 パーセントの支持者から対極的な 0 パーセント支持者へと突然理不尽な転向を遂げ、世界中の主要中央銀行が彼のアイデアを 1974 年に採用したお陰で、今日その倍数は著しく上昇した - 時として 20 対 1 またはそれ以上に。銀行は、現金を求めて来店する少数の顧客のために、当座の必要を満たすだけの現金しか保有しない。だから、事実上それは完全な詐欺なのだ。

銀行システムは次のように機能する。あなたは新車を買うために 35,000 ドルを借りたいとする。そして行きつけの銀行を訪れ、ローンを申し込む。銀行員はあなたに担保を求める - 何かの株券、債券、住宅または別荘への 2 番抵当、もしこれらのどれも提供できない場合には裕福な友人または親戚の連帯保証人。この担保要件が満たされると、あなたは同意した利率の元本借用証書に署名することを求められる。

書類上の手続きが完了し証書に署名がなされると、銀行員は銀行のコンピュータに記帳する。すると直ちに、その車を買うために使える 35,000 ドルの貸付金があなたの口座に現れる。重要な点は、数秒前にその金は存在しなかったということだ。言ってみれば、金は何もないところから創り出されたのである。

銀行方程式は複式簿記の一種である。あなたの借用証書は銀行の帳簿上で資産となり、あなたの口座に払い込まれた新しい金は債務となる。銀行の利益は、仮にあなたが口座に持つ金を直ぐに使ってしまわないとした場合にあなたに支払われる申し訳程度の低金利と、あなたが借用証書に対して支払うべきはるかに高い金利との差から生じる - 専門用語ではこれを “スプレッド (spread)” と呼ぶ。

しかし、いずれあなたは元本と利息を返済して借金を精算しなければならない。あなただけではない、銀行から “金 (money)” を借りた者は誰でもそうである - これには政府も含まれる。ところで、政府は紙幣の発行権を持つが、無責任にもその権利を民間銀行のあるエリート集団に渡してしまった。返済不履行者は、誰であろうと大変なことになる。個人の場合、担保資産を銀行に差し押さえられる。返済不履行の危機に陥った政府は、国際通貨基金から借金することを余儀なくされる。そうすると次には国際通貨基金が、公共サービスの縮小、国際ハゲタカファンドへの公有資産の売却を含め、政府に政策を指図することになる。

現実には、こうして銀行が世界を一つの同質な質屋 (pawn shop) に変えてしまったのである。あなたは株券、債券、住宅、会社、裕福な義母、または国家を質に入れる。そして銀行は、その担保価値にもとづいてあなたにローンを貸し付ける。

すべての金が借金として創出される世界システムというものは、進行中の終わりなき大災害である。それはまるで、銀行が借金を目一杯注入して膨らました巨大な風船である。その風船はますます膨張し続け、借金の重さを支えきれなくなる。するとそれは、ピンを突き刺した風船のようになる。世界システムは崩壊し、数千人、時には数百万人の罪なき人々が彼らの仕事、家、農地、会社を失なう。

高校生ならほぼ誰でも、借金の創出に基礎を置くどんな通貨制度も完全に狂気の沙汰であることを理解できるはずだ。数学的には、世界が負う借金総額は常に無限大に向かう傾向を持つ - 無限大の借金を返済できる方法はない。それを返済できる実際の金 (法定通貨) は存在しない。そして成長が現金 (cash) に依存する実体経済は、信用通貨 (credit money) の供給が枯渇すると必ず減速する。

当然のことながら、米国においては 1890 年以來 25 回の不況や恐慌が起きてきた。1930 年代の大恐慌および目下進行中の大不況を含む幾つかのケースでは、破滅的状況の引き金を引いた少数のインサイダーが、株価暴落を予期しそれに備えていたことを示す証拠がある。

大恐慌の後、ペコラ委員会報告書の名前で広く知られるようになった米国上院銀行・通貨委員会による調査報告書は、この崩壊から利益を得たインサイダーがいたことを指摘した。“合法的なごまかしと漆黒の暗闇が銀行家の最強の味方だった”、ペコラは回顧録にそう書いた。同様の主張は、2007 年から 2008 年にかけて起きた株価暴落に関するチャールズ・ファーガソンの告発ドキュメンタリー “インサイド・ジョブ (Inside Job)” の中でも明白だった。これらの報告および他の歴史的証拠は、ウォール街の大部分が芯まで腐っていることを確実に立証している。ウォール街は、米国と世界の経済にとり、巨大な重荷になった。

最近の株価暴落から受けた巻き添え被害は甚大である。米国労働統計局の推定では、米国だけでも 840 万人の仕事が失なわれた。ほとんどの国々も、同様の劇的な損失を被った。世界中の資産価値下落は 20 兆米ドルと見積もられているが、その犯人の誰一人として刑務所に入っていない。この破滅的現象に多少なりとも荷担したあらゆる個人、あらゆる組織を相手取り、少なくとも 10 兆ドルの集団訴訟を起こす者がいても当然だったとあなたは思うだろう。

そもそも、これほど市場操作に脆弱なシステムが成立したことは驚くべきことである。その発生は偶然ではなかった。それはアダム・スミスの神の見えざる手に導かれたものではなかった。それどころか、1 世紀半以上もの間、このシステムはロスチャイルド家およびその同盟者たちの辛うじて見える手により、画策されたのである。そして第二次大戦以後はロックフェラー家である。この二つの支配者層は力を合わせ、ビルダーバーグ会議が構築した秘密の覆いに保護

されて、多くの領域に影響を及ぼした。

長期にわたる銀行カルテルの影響は、計り知れない。彼らが起こした最大のクーデターが、米国における連邦準備制度の設立だった。ニューヨークの大銀行は、真の競争という考えを心から嫌った。そして少数のグループが、ジョージア州沖合のジキル島にあった J・P・モルガンの個人別荘に集まり、秘密の会合を持った。ポール・M・ワーバーグが考案し、その後議会で承認された彼らの計画とは、公益の保護と促進に名を借りて少数者の利益のために運用される、米国通貨供給の合法的な私的独占だった。

国際銀行家たちは法案を起草し、それを改正し、名前を変え、ほんの少いうわべだけの妥協をして、大勢の下院議員たちが然るべき注意を払う代わりに金平糖の妖精たちの夢を見たに違いないクリスマス直前の議会で承認されるようにした。そのようなことができたのは、彼らの手腕のたまものである。チャールズ・リンドバーグ卿だけが、進行しているものごとの本質を理解していたように思える。

はっきり言えば、議会は金 (money) を創出するという、憲法で規定された至上の権利を、民間銀行グループの単独監視権へと委譲してしまったのである。その強奪の規模は世界史に前例がない - 現在その額は兆の桁の後半である。

法案の通過後間もなく、悲劇の大きさが認識され始めた。民主党の院内幹事を務めたウィリアム・ジェニングス・ブライアンは、後日こう語った：“私の長い政治家人生において心底から後悔している一つのことは、銀行および通貨法 (1913 年連邦準備法) の立法化に自分が関与したことだ” 連邦準備法が通過してちょうど 3 年後、ウッドロー・ウィルソン大統領はこう書いた：“偉大な産業国家がその信用システムにより管理されている。我が国の信用システムは (連邦準備制度に) 集中している。その結果、国家の成長および我々の活動のすべてが、少数の人間の手中にある... 文明世界の中で我々は、最悪の統治が行なわれ、最も完璧に管理され支配される国の一つになった” しかし、この法案が撤回されることはなかった：ほぼ 100 年を経ても、この裏切り行為は法律のままである。人民の代表たちは、彼らの給料を稼ぐために一体何をしてきたのか。

このごまかしを最初に始めた人々は、とても先見の明があった。将来の政府が自分たちから金を借りなければならなくなったとき、政府には債券利息を払うための一定の収入源が必要であることを彼らはよく理解していた。そこで彼らは政府に対して、債券保有者に対する債務の支払いが可能になるように、初めは臨時的措置として、後には恒久的なものとして、所得税の導入を促したのである。米国における 2005 会計年度の個人所得税総額は 9,270 億ドルだったが、そのうちの 3,520 億ドルすなわち 38 パーセントは、連邦政府負債の利息払いだけのために必要だった。現在その比率はもっと高いと思われる。

悪徳銀行家たち - 彼らはしばしばそう呼ばれるが - は次に、独立系の新聞がこのごまかしに気付いたに違いないと思い込んだ。1917 年 2 月 9 日の連邦議会議事録の中に、オスカー・カ

ラウエーが次のように記載されている。

“1915年3月、鉄鋼、造船、火薬業界の財閥であるJ・P・モルガン財閥およびその下部組織が、新聞界の上層部12名を集め、彼らを使って米国内で最も影響力のある新聞、さらにその中から国内日刊紙の方針をおおむね管理下に置くために十分な数の新聞を選ばせた... 彼らは、最大手25紙の管理権を買収するだけでよいことを発見した。その25紙とすることが決められた；これらの新聞の国内的、国際的な方針を買収するために、密使が送り込まれた；... 軍備、軍事主義、金融政策といった重要問題、および買収者たちにとり死活的利害を持つと考えられる他の国内的、国際的な事柄に関する情報を適切に監視し編集するため、また、仕える財閥の願望に対抗するあらゆるものを抑圧するために、各々の新聞に1人の編集者が配置された”

20世紀の終わりと21世紀初め、ビルダーバーグ会議が彼らの利害を保護するために、モルガン財閥の先例を手本にした可能性が示唆されている。それを証明することは不可能である。なぜならば、会議のメンバーは秘密厳守を誓っており、報道機関もその会合については報道しようとしなからである。悪徳銀行家たちの最も直接的な受益権に関わる三つの主題、すなわち通貨制度、グローバル化の負の側面、地球外生命体の存在および工学技術（とりわけ石油株の価値に影響を与えるクリーンなエネルギー源）についての数十年にわたる隠蔽が、主流報道機関により疫病の如く忌避されている三つの主題であることは、単なる偶然だろうか？

私は、国際銀行システムの背後にいる輩を悪人とまで言うつもりはない。彼らの思想は彼らのみが知るものだからだ。しかし、後にスタンプ男爵となった元イングランド銀行総裁のジョサイア卿が、めったに知ることのない真実を我々に垣間見せてくれた。

“銀行業は不正行為の中で生まれ、罪の中に生まれた。銀行家が地球を所有している。彼らから地球を取り上げて、金を創り出す力を彼らに残すなら、ペンを軽く走らせるだけで彼らは再びそれを買い戻すのに十分な金を創り出すだろう。しかし金を創り出す力を彼らから取り上げるなら、私が持つような巨大な富はすべて消え失せる。銀行家は消えるのがよい。その方が世界はもっと幸福で住みやすくなるからだ。だがもし、あなたが銀行家の奴隷のままでいて、奴隷であることの代償を払うことを望むなら、彼らに金を創り続けさせよ”

2007年から2008年にかけて起きた最近の株価暴落の中で、FED（連邦準備制度）はネズミ講ピラミッドが完全に崩壊するのを防ぐために、素早く行動した。FEDは、銀行および銀行に多額の借金をしている少数の業界を救済するために、数兆ドルの金を刷った。

銀行を救うために、納税者の金はそれほど乱暴に価値を希薄化させられた。しかしその彼らのために、FEDは何をしたのか？ 何もしなかった！ 納税者は自力で何とかするように放置された。数百万人の人々が、彼らの管理外にある事情により、仕事、農地、住宅、希望、そして尊厳を失なった。納税者は銀行を救済したが、その見返りは何もなかった。

救済に素早く取り組んだ政府についても、同じことが言える。株価暴落の結果、政府の歳入は

減り、赤字の増加とともに必要不可欠な公共サービスの縮小に着手することを余儀なくされた。

FED（連邦準備制度）は金利をゼロ近くまで下げ、経済のてこ入れを取り繕った。この安価な金（low-cost money）のすべてに何が起きたのか。その解明は興味深い課題であろうし、議会が注目するよい題材であるだろう。銀行は、国内外の資産を激安値で買い取るためにいくら使ったのか？ 数百万人が飢えているときに、金融機関は世界の食糧市場を買い占め、価格をつり上げる企てにその金を使わなかったか？

低金利をうまく活用した納税者がいたことは間違いない。しかし彼らは、古い餌とスイッチゲーム（switch game）について警告を受けただろうか？ 低金利の融資金で資産を取得した者は誰でも、FED が最後に金利を上げたときに財産を失うリスクを負う。それはすべて、我々の限りなくばかげた通貨制度に内在する、景気循環の一部である。

## 経済学者たち

### *The Economics Profession*

このすべてが経済学者たちについて言っていることは何か？ 彼らが実際に口にすることは印刷に値しないということだ。こう言った人がいる：もし 20 人の経済学者を一つの部屋に入れるとすると、あなたは 21 通りの意見を得るだろう。

私の経験はそうではない。もしあなたが 20 人の経済学者を集めるとすると、たった一つか、せいぜい二つの平凡な答しか返ってこない可能性がある。また、もし意見を異にする者が 1 人いると、彼または彼女は、教授の教えた言葉を暗記してオウムの群れのように大声でわめき立てる 19 人によって、押し流されてしまう公算が大きい。

私は、この飼いならされた家畜のような精神構造を目の当たりにしたことがある。私が 1949 年に初めて下院議員に選ばれたとき、オタワにはほんの一握りのケインズ信奉者しかいなかった。それから 20 年後には、ほぼ全員がケインズ信奉者だった。リチャード・ニクソンもその 1 人だったと私は聞いている。

当時、周りにはごく少数の通貨主義者しかいなかった。しかし、彼らは雨後のタケノコのように勢力を拡大し、まもなく経済の風景を支配した。ケインズが忌み嫌われるものとなり、ミルトン・フリードマンの通貨主義革命に参加しない限り、経済学の学派内で終身身分保障の地位を得ることはほとんど不可能だった。

ケインズもフリードマンも正しく理解していなかったという可能性は、ほとんど考慮されなかったようだ。ケインズはフリードマンよりもほんの少し現実に近かったが、どちらの理論も、一つの否定できない事実という岩礁に乗り上げ、沈没した。両理論とも、経済システムは自己修正的であることを前提とした。しかし、2 世紀以上にわたる経験が、そうではないことをは

っきりと示している！ 誰かが、経済破綻という浅瀬や岩礁を避ける役割を担って、舵を握る必要がある。そしてその人物は、景気を操る身勝手な輩 (boom-buster) にではなく、人民 (people) に対して責任を負う者でなければならない。

## 地球温暖化

### *Global Warming*

銀行改革が、今日の世界が直面している最も緊急の課題である一方、それと同じくらいそれ以上に重大な、長期にわたる影響を及ぼす問題が、地球温暖化 (global warming) である。温室効果ガスの排出削減まで、我々にはまだ 30 年、40 年、あるいは 50 年の時間的余裕がある、と主張することは、完全な詐欺である。我々はすでにルビコン川を渡ったのかも知れないと考える、信頼できる科学者たちがいる。たとえそれが本当だとしても、我々には時計の針を巻き戻すことができない；我々は現在と未来に影響を与えることしかできない。米国海洋大気庁 (NOAA) が 2010 年 7 月に発表した報告書によれば、過去 30 年間のどの 10 年も、観測史上最高の気温を記録してきた。NOAA の報告書は、48 カ国 160 の研究グループにより測定された、10 項目の気候変動指標データをまとめたものである。

データによれば、海面水位が上昇している；北極圏の積雪の融解が早まっている；平均気温が上昇している；海水温も上昇を続けている；夏季の海氷域面積が減少している；海域の気温が上昇している；過去 19 年間に氷河の質量欠損が起きている；陸域の気温が上昇を続けている - 世界的な傾向である。

こうしたことのすべてが、科学的データの信頼性に疑念を抱かせることを狙った石油業界のブロパガンダが嘘であることを立証している。タバコ業界は、自ら事実を密かに知り、何年も経ってから製品の安全性に関して疑念を持たれてしまったが、石油業界はタバコ業界に倣って、化石燃料をクリーンエネルギーで代替させる緊急性について疑問を提起することを試み、かなりの成功を収めてきた。しかし石油の場合、その危険度はさらに高い。喫煙がもたらす結果について健全な情報が欠如していたために、多くの人命が失われたことは悲劇だった。しかし地球温暖化の場合、その何倍も多くの人命が危険にさらされることになる。

それでも石油カルテルは、何も変わっていないかのように計画を立てている。そして我々は、被害が回復不可能になるまで数十年間、破滅的な石油経済を続けることになる。今さら海底油田の掘削を始めても遅すぎる。新たにアルバータのオイルサンドを開発しても間に合わない。これ以上騒音の酷い風力発電地帯を増やしたところでもはや手遅れである。移行 (transition) を、今始めなければならない。それも、10 年が最終期限である。

そんなことが可能か？ もちろん可能だ。ただし、生き残り戦争に勝つために不可欠な、ある種の動員が必要である。これまで無為の言い訳は、政府の歳入不足と債務による資金不足だった。しかしこの障害は、もし政府と議会がシステムを変え、物理的に可能なことを財政的に可

能にする彼らの至上の権利を行使するならば、1年もしないうちに克服可能である。この難題に対処しようと待ち構える、数百万人の失業者たちが世界中にいることを、天はご存知だ。

もう一つの主要な障害は、化石燃料を代替するクリーンエネルギーの種類について、合意が欠如していることである。これでようやく私は、今日の主題、すなわち地球外生命体の存在と工学技術に言及することができる。

## 地球外生命体と工学技術

### *The Extraterrestrial Presence and Technology*

米国政府が UFO に関心がないかのように振る舞うのは、詐欺である。事実を言えば、UFO は数十年間にわたり高い関心、おそらくは群を抜いて高い関心を持たれてきた問題である。

初期のカナダ人 UFO 研究者ウィルバート・スミスは、運輸省の上級職員だった。私はスミスが退職して間もなくその大臣になったが、彼は 1950 年 11 月 21 日付、通信監査官宛の最高機密覚書を書き、UFO 推進システムの地磁気的特徴を研究するグループの結成許可を求めた。

その覚書の中でスミスは、ワシントンのカナダ大使館員を通じて慎重な調査を行ない、次の情報を得たと書いた。

- (a) この問題は、合衆国政府において水爆をも凌駕する、最高度の秘密事項である。
- (b) 空飛ぶ円盤は実在する。
- (c) その操作方法は未知であるが、バンネバル・ブッシュ博士に率いられた少数のグループにより、集中的な研究が行なわれている。
- (d) この問題の全体は、合衆国当局によりとてつもなく重要なものと考えられている。

つまり、米国の傑出した科学者の 1 人であるバンネバル・ブッシュ博士と彼が集めた専門家たちのチームが、1950 年までにはすでに逆行分析 (back-engineering) に取り組んでいたのである。(逆行分析とは、ある物体、この場合は墜落した円盤の部品であるが、それを分析するために技術と科学を併用するものである。その目的は、複製または改造を意図してその物体の諸特性を究明することにある)

UFO の主題に興味を持つ多くの人々は、その出発点として、1947 年 7 月に起きたロズウェル墜落事件の一つを用いる。しかし最近の証拠により、米国陸軍航空隊がそれより前に、墜落物体の回収に従事していたことが確認されている。パオラ・ハリスが、2010 年 7 月 5 日に 2 人の人物と面談した。ホセ・パディリヤとレメ・バッカで、当時それぞれ 9 歳と 7 歳だった。彼らは 1945 年 8 月、ニューメキシコ州サンアントニオに近いパディリヤの土地に、1 機の円盤が墜落するのを目撃した。パオラは彼女の新著 *Exopolitics: Stargate to a New Reality* の中で、この 2 人が子供の時に見たこと、すなわち実際の墜落、乗っていた生命体たちの風貌、彼

らが墜落円盤から取った部品、軍による残骸除去の詳細な説明、およびこの事件の重要性に関する綿密な分析を書いている。

私は最近、レメ・バッカと電話で話す機会があった。そして印象に残ったことは、アビラ軍曹が“物体”を回収するため土地への立ち入り許可をパディリヤ氏に求めに来たとき、それを“実験用の気象観測気球”と言ったことである。それは、2年後のロズウェル事件でロジャー・レイミー准将が用いた策略と全く同じだった。陸軍側には相当な想像力の欠如があったようだ。

後年、陸軍航空隊を継承した空軍は、誤報や偽情報の技巧においてはるかに洗練されるようになった。その中には、映画の中で‘宇宙からの訪問者たち (Star Visitors)’を邪悪な存在として描き、我々はそれを恐れるべきだとするものがある - おそらくは正当な理由なしに。

パオラがつい最近私に教えてくれたもう一つの興味深い事例は、チャールズ・ホールのものだ。チャールズ・ホールは物理学者であり、情報技術の専門家でもある。彼は1960年代に、ネバダ州インディアンズプリングスにある米国空軍の爆撃砲撃訓練場で、気象兵として働いた。

チャールズは、背の高い白色系 ET (Tall Whites) と緊密に連携しながら働いた。これは私がこれまであまり聞いたことのない種族だった。彼は数ヶ月かけて、空軍の敷地内に住み、働き、遊んでいた異星人たち (aliens) への恐怖をなくすことを学んだ。

チャールズは2時間の電話会話の中で、この白色系 ET の特徴について多くを私に語った。彼はまた、ET たちが乗る小型円盤 (scout ships) の様子を述べ、彼らの大部分が米国に集まっていると言った。さらに彼は、ET たちの母船が満月の夜に到着し、近くの山腹に堀抜かれた格納庫に滑り込む様子を語った。

1960年代半ばに、背の高い白色系 ET が米国空軍と緊密に連携して働き、技術交流をしていたという事実を含む彼の話は、まったく興味深いものだった。だから、我々よりもはるかに進歩した異星人工学技術の逆行分析に関して、60年間にどれほどのことが達成されたのか、想像するのは大変難しい。きわめて多くの科学者、技術者、米国最先端の航空機および兵器製造企業が、ほんの数年前なら奇跡に分類されたであろう事柄を達成しているのは間違いない。

巨大地下施設の一つで働いている米国の技術者たちが、他惑星からやってきた人々のものと事実上区別がつかない輸送機を建造したと言われている。これが本当だとしたら、彼らは何の目的にそれを使うつもりなのか？ それは良い目的のためか、それとも軍事目的か？

しかし、ここでの発表に最も関係する発見の領域は、外来 (異種) エネルギー源 (exotic energy source) の問題である。何年か前に、ゼロポイント・エネルギーと常温核融合エネルギーの両方が開発されていたと報じられた。これらは、10年目標期日の設定を容易にし、世界を良い方向へと大変革するだけでなく、それを地球人の幸福な居住地として維持することに役立つかもしれないエネルギー源である。

万が一これらのエネルギー源がいまだに商業的に実現可能でないなら、我々がなすべきことは、友好的な種族の一つに支援を要請することだ。そうすれば彼らは支援するだろう。なぜならば、彼らは我々の地球管理能力について深く憂慮しているからだ。我々が今なお彼らを敵対的異星人として扱い、彼らを撃墜することに全力を尽くしているなら、我々は自らの闘争心を抑制し、受け入れ可能なレベルの銀河系間礼節を導入しなければならない。

## より良き人々 *Better People*

第三の不可欠な変化は、個人としての我々自身に関するものである。世界が汚職、詐欺、あらゆる種類の墮落で満ちているとき、そこに公正と平和は存在し得ない。貪欲が王となり、拝金主義が世界を支配する。

団体もまた、変化せざるを得ない。幾世紀にもわたり、主要宗教は彼らの独善的な優越性または排他性を武力で受け入れさせ、数千人の罪なき人々を死に追いやってきた。例えば、アブラハムの三大宗教は、すべて天国に至る秘密の経路を主張する。数学的にそれはあり得ない。数学的にそれよりはるかにありそうなことは、彼らはすべて間違っており、真理はより大きくより包括的であるということだ。

古代史も現代史も、すべての宗教と宗教を持たないすべての人々が、互いの違いを忘れて力を合わせ、地上に神の国（Kingdom of God on Earth）を建設し始めない限り、公正で平和な世界は望み得ないことを示している。

公正で平和な世界を、私はこのように定義する：どの子供にも食べ物、きれいな飲料水、十分な衣服、屋根のある住居、必要な医療支援が約束される。どの子供も十分な教育を受け、尊厳と自己実現を実感しながら、各々が積極的に人類に奉仕する最適の道を決めることができる。

何と素晴らしい世界だろうか！ しかしその実現には、政策と優先事項における 180 度の転換、およびすべての宗教が共通テーマとして掲げる黄金律（Golden Rule）の実践に取り組む、真剣な努力が必要である。

黄金律を実践すると、帝国建設と軍事力および優位性の追求は終わることになる。例えば米国は、自分自身の最悪の敵であることを止めなければならないだろう。テロとの戦いを宣言したことは、私がこれまで見た最悪の戦略的失態だった。

2001 年 9 月 11 日に、世界貿易センターへの攻撃を受けた後、米国はアラブ諸国とその人々を含む、世界の同情を集めた。アルカイダの脅威は限定的であり、警察と情報収集活動の潜在能力の範囲内で十分に対処可能だった。

イラク戦争の始まりとともに、状況は一変した。善意は一夜にして消滅し始めた。間もなく、わずかに数十人の暴徒に代わって、大義のためなら死をも厭わぬ数千人の若きイスラム教徒が出現し、憎悪と不信の大きな溝が世界を覆った。

米国は、イスラエル-パレスチナ紛争において、公平であることを一貫して拒否してきた。そしてイスラエルは、彼ら自身と世界を欺き、自分たちは犠牲者だと主張する。長い間、平和は彼らの手の届くところにあった。もし彼らが、公正な和解と活気に満ちたパレスチナ国家の設立に同意していれば、それが可能だったのである。しかし、偉大なラビ・ヒレルの訓戒を受け入れたくない一握りの原理主義者たちが、常に和平プロセスを中断させることに成功してきた。“だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である” その一方で、世界の平和と安定は、危機にさらされたままである。

国際社会は、キリスト教原理主義、イスラム教原理主義、ユダヤ教原理主義、または経済原理主義のどれであれ、原理主義者たちを圧倒する理念と実践を取り入れなければならない。また、宗教的な人々は自らの聖典にもっと注意を払うべきである。聖書の中に、予防戦争をその絨毯爆撃とともに正当化する教えはないし、無実の人々を巻き添えにする危険を冒しながら1人を殺すために発射する無人機またはミサイルを正当化する教えもない。同様に、コーランの中にも、無実の人々を無差別に殺戮する自爆テロを正当化する教えはない。

## 新生への希望

### *Global Hope*

もしあなたが、世界は急速に破壊されつつあるという印象を持つなら、あなたは正しく私の話を聞いている。しかし、世界がそうである必要はない。打開策はあるが、それらはここで論じられた分野における大変革を必要とする - そのどれもが、現時点では政治のレーダー画面に映ることすらない。トンネルの先には明るい光がある。しかし、元パークレイズ銀行会長ジョン・クイントン卿の言葉を借りるなら“銀行家には政治家たちが、トンネルの先に光が見えているのに、さらにそれ以上のトンネルを求める人々に思えるときがある”

我々が実際に語っているのは、諸国に民主主義（democracy）を復活させる、ということについてである。その諸国とは、たとえそれが実際には辞書で定義される民主主義でなくても、民主主義を掲げ、かつ誇りを持ってそれを世界に広めようとしている国々のことである。ウェブスター辞書では、民主主義をこう定義している：“最高権力が人民に帰属し、人民またはその選ばれた代表たちにより行使される政治形態” まず始めに、ウォール街は数十年間にわたり米国を支配してきた勢力であり、現在もそうである。加えて、軍最高司令官である米国大統領は、彼の指揮下にある部隊が管理する幾つかのプロジェクトに対して、機密取扱許可を持たない。このことから、米国は本当の民主主義ではないと結論せざるを得ない。

同じことは、カナダ、英国、ドイツ、そして現実には国際金融システムの傀儡となっている多くの国々についても言える。いずれの場合にも、有権者の本当の利益は、国際金融の要求に従属させられている。

アメリカ革命当時の米国史を読むと、そこには一つの悲しい皮肉がある。しばしば歴史家は、茶に対する課税が革命の原因だとする。他方では“[ベンジャミン]フランクリンは、大陸植民地が母国から離反した主な理由の一つとして、紙幣についての規制を挙げた” 米国は革命戦争に勝ったが、その次の決定的に重要な戦争に負けた。米国は、植民地時代に試行していたより良い通貨制度を続ける代わりに、英国の銀行制度を採用したのである。

現在米国が、国際通貨基金および世界銀行を使い、執行者として英国の習慣を世界中の国々に押しつけている行為は、米国を誕生させた英国王の命令に相当する。だから、金融という抑圧の鎖 (financial chains of oppression) を断ち切り、あらゆる市民に自由を取り戻さなければならない。

ティーパーティーは忘れ、米国および世界が直面する、極めて重要な諸問題に取り組むときである。これら諸問題のすべてが当然ながら超党派的課題であり、人種、肌の色、宗教、または政治的所属の違いを超えた、すべての真の愛国者が注目し支持するに値するものである - 米国でも、世界的規模でも。我々は、人類の生得権 (birthright) であるこの美しい惑星を持続させ向上させるために、一体とならなければならない。

## 行動計画

### *An Agenda for Action*

最初の、最も緊急を要するプロジェクトは、銀行家たちの行動を制限し、金を創出する機能 (money-creation function) を民主化することである。米国においては、連邦準備制度を廃止し、彼らが言う通貨供給管理の機能を、連邦政府またはその直接管理下にある政府機関に担わせなければならない。経済兵器の最強かつ最も価値ある手段は、その成功または失敗に責任を負うことのできる、人民の代表たちが利用可能でなければならない。

一部の通貨改革論者は、負債を生まない新しい通貨、すなわちグリーンバックまたはその同等物を、政府が 100 パーセント発行することを提言する。私の提案は、迅速かつ円滑な移行のために、政府が発行する通貨を 34 パーセントとし、銀行が創出する金を 66 パーセントにすれば、十分な効果があるだろうということである。銀行は、預金高に対して 34 パーセントの現金準備を維持することを義務付けられることになる。

各国政府が直ちに、財政健全化のために必要な多額の通貨を発行し、経済が再び最大生産量を維持するようにすることが重要である。私が言っているのは、手始めにまずは 10 兆米ドル相当を注入し、必要に応じてその額を増やしつつ、経済を期待どおりの水準に高めて数百万人の

雇用を新たに創出し、世界の失業率を少なくとも半分にするということである。

これにより、大規模なインフレーションが引き起こされることになるのか？ 金融カルテルは即座にそう主張するだろう。というのも、これが長期にわたり最も成功してきた‘怖いお化け’だからである。彼らのまやかしの音声に対する返事は、大音で響き渡る“ノー”である。経済学者なら誰でも知るべきだが、物価に影響を及ぼすのは創られた金であって、それを刷った者ではない。つまり、政府が経済学者たちの言う“乗数効果”を制限する限り、何も問題は起きないだろう。

現行制度がインフレーションを引き起こすものであったことは確かである。1950年の1米ドルは、今日ではたった7.5セントの価値しかない。常識的な通貨制度なら、これよりましな結果をもたらすはずである。だから、銀行制度を抜本的に改革 - それも直ちに！ - してはならない理由など、どこにもない。

我ら世界の人民が我々の政治家たちに要求すべきことが、他に四つあると私は考えている。

1. 政治家と、行政官庁および政党に入る者はすべて、任意の金融機関から金を受け取することを禁じるとともに、直接的であれ間接的であれ、金融機関が献金を行なう行為を刑事犯罪とする法律を、早急に可決しなければならない。
2. 世界の指導者たちは、温室効果ガスの排出を90パーセント削減する10年の期限を導入しなければならない。
3. 上記のことは、米国が地球外生命体の存在と工学技術についての知識、60年間の逆行分析（back-engineering）により達成された事柄を公開して初めて可能になるだろう。
4. 国連は、2012年を寛容と和解の年と宣言すべきである - 全世界および銀河系間の両方において、人種、部族、宗教、国家、地域間の協調と（神の）愛の新時代。我々には、医療と食糧生産を含む多くの分野において、宇宙からの訪問者たち（star visitors）に学ぶべき事がたくさんある。

それゆえ米国は、人類のすべてが夢見るより良き世界（better world）を創造する、新しい種類のリーダーシップの一環として、“蚊帳（the loop）”の中心という特権的地位を放棄しなければならない。

## 国際金融 対 世界の人民

### *International Finance vs. The People of the World*

公正で平和な世界というこのビジョンは、国際銀行の権力が解体されていない限り、どれも実

現できないだろう。1999年に私は1冊の本を書き、その中で、次の世界大戦は銀行と世界の人民との間で行なわれるだろうと述べた。数世紀の間小競り合いがあり、これまでは常に銀行が勝利を収めてきた。今彼らは、最近の株価暴落およびその結果もたらされた国家債務危機に乗り、最後の決戦に向けて国際通貨基金、世界銀行、連邦準備制度、国際決済銀行を含む、彼らの重火器を準備しようとしている。

いつものように、策略の目的は、世界の人民を支配するために彼らの権利を奪い、世界を自分たちの私有領地として運営する国際銀行、選ばれた産業界の同盟者たち、軍内部にいる小さな陰謀グループの権力を、揺るぎないものにするることである。彼らが行なおうとしていることを言い表すのに、“不公正 (unjust)” という言葉はあまりにも小さすぎる。もし私が現実を誇張していると疑うなら、私の言葉は信じなくてもよい。このウェブサイトを訪れ、参考になる何冊かの本を読みたい：<http://www.victoryfortheworld.net>。例えば、金 (money) の歴史を詳しく述べている 'The Web of Debt (負債の蜘蛛の巣)' を百ページも読めば、多分あなたは胃の調子をおかしくするだろう。私は夜にそれを読むのを止めた。というのは、その本はたびたび私を憤慨させるので、眠れなくなってしまったからだ。

私は60年以上前に政界入りした。理由は、不景気 (recessions) というのは全く必要がないと考えたからである。不景気は、比較的容易に解決できる、貨幣的現象だった。私はこの主題について数百回の講演をし、数千人の人々を納得させてきた。しかし、有力者たちはそうではなかった。また、主流報道機関は、まるで役に立たなかった。彼らは大変な偏見を持っていたために、権力者に真実を語る1人の異端児には、関心を示さなかったのである。つまり、聖書の話にたとえれば、それはいつもダビデとゴリアテの状況だった。

今初めて、形勢を変え、手痛い攻撃を加えるための力が存在している。インターネットが、今まで決して手に入れることのできなかった力を、人々にもたらしている。世界中の若者が、世界情勢について心配する数千人の親たちと共同して、社会的ネットワーク (social networking) の力を利用し、彼ら自身と続く世代のために、奇跡を起こすことができる。

チュニジアとエジプトの勇気ある人々は、不可能と思われていたことを成し遂げて、その道を示した。我々は、彼らの幸福感を共有する。と同時に、彼らも、我々も、それがほんの始まりにすぎないことを認識しなければならない。本当の自由は、人々が国際銀行の圧制から逃れ、最早ウォール街が日々のパンの値段を操作できなくなったとき、初めて実現されるだろう。

幸先のよいスタートは、まずこの演説のコピーを百万部配り、幾つかの言語に翻訳することかもしれない。そうすれば、若者たちの世代が彼らの社会的ネットワークの力によって、バリケードに攻撃を仕掛けることができる。トンネルの先の明るい光を拒む指導者でない限り、体制の変革は不要だ。しかし、憂慮する世界の市民は結束して、中央政府のすべての政治家たちを動揺させるべきである。政治家たちにはっきりと伝えよ：あなたたちは上記の行動計画を積極的に支持しなければならない。そうしないと、次の選挙では必ず落選する。このメッセージは単純であるが、政治家たちが理解する唯一のものである。

ジョージ・W・ブッシュ大統領は、2001年3月29日の記者会見において、米国は京都議定書から撤退すると宣言しつつ、こう述べた：“友人とは、あなたに真実を語る者だ” これは、私が今日までしてきたことである。それは、世界中のあらゆる人種、肌の色、宗教、および国籍の人々に向けた希望のメッセージであり、別世界から訪れる人々との平和的関係を伝えるメッセージである。

-----  
Paul Hellyer  
20 Bay St., 12th Floor  
Toronto, Ontario M5J 2N8 Canada  
Tel: 416/850-1375  
[phellyer@sympatico.ca](mailto:phellyer@sympatico.ca)

(訳：廣瀬 保雄)

# ET Contact: The Implications for Post Contact Advancements in Science and Technology

Theodore C. Loder III, PhD  
Professor Emeritus, University of New Hampshire  
and Member of CSETI

Copyright: Theodore C. Loder III, 2011, All Rights Reserved

## ET コンタクト： 地球外文明との公然コンタクト後に予測される 科学および工学技術の進歩

セオドア・C・ローダー三世, 博士  
CSETI (地球外知性体研究センター) メンバー

著作権 セオドア・C・ローダー三世, 2011 年

[\(公開プロジェクトのウェブサイトより\)](#)

### 要 旨

進化した ET 諸文明との公然コンタクト (open contact) が起きた後の科学および工学技術の進歩が、地球を訪れるために必要な工学技術、知識を分かち与えようとする ET の意思、コンタクティーたちによる多数の目撃情報および彼らが ET から伝えられた事柄の複合的分析にもとづき、予測される。今ひとつの問題は、習得した知識を持ちながらそれを数十年間抑圧し続けてきた地球人グループの、知識を共有しようとする意思である。恐らく彼らの知識には、ET も開発している多くの工学技術が含まれるであろう。ここでは輸送 (反重力を含む)、エネルギー発生 (オーバーユニティ装置を含む)、通信 (超光速装置および意識通信を含む)、医療 (病気の治療、それによる延命を含む)、および意識 (人間の精神性についての理解向上を含む) の 5 分野が取り上げられる。換言すれば、一般に認知された公然コンタクトが起きた暁には、人類活動の多くの分野において重大な変化が生まれ、もはやそれが “後戻り” することはない。最終的にこれは “きわめて望ましいこと” になるであろう。

### 序 論

別の恒星系の知的存在者たちが、これまでこの地球を訪れてきたし、今も訪れている。彼らは訪問者 (Visitors)、別世界の人々 (Others)、宇宙人 (Star People)、地球外生命体 (ETs) な

どと様々に呼ばれる。本論では、一般に地球由来の人々ではないという意味で、ET という呼称を用いることにする。彼らは“今”地球を訪れている；このことは憶測でも思い焦がれてもならない。それなりの知能指数と時間を持つ者なら誰でも、それを調べて、次のことを理解することができる：我々は、地球の一般に認知されている科学および工学技術を凌駕する技術を持つ、知的存在者の“訪問”を受けている。彼らは、必要なエネルギー発生および通信技術を含め、恒星間宇宙を安全かつ迅速に移動するための先進的工学技術を開発している。彼らは生命と意識に関する理解力を発達させ、宇宙とその複雑さについてのより包括的な観念、および人類に対する比較展望を持っている可能性が高い。

本論で述べる全面公開 (open Disclosure) とは、世界の諸政府とメディアが、ET の実在性、彼らがこれまでも現在も地球を訪れているという事実、および彼らと平和的に交流する時が来たことを全面的に受け入れ、かつ公然と議論する状況を意味する。ひとたび全面公開が起き、これらの事実が地球上で広く受け入れられると、人類活動の多くの分野において劇的かつ急速な変化が生まれることになる。この変化は、ET による知識の供与とともに、地球人の闇のプロジェクトが獲得した知識の解放によりもたらされるであろう。これら闇のプロジェクトは、1940 年代以前から、ET および彼らの工学技術を研究するために数十億ドル単位の資金を費やしてきた。この新たに得られた知識は、前世紀に達成された通常の人類の進歩と相まって、闇のプロジェクトがきわめて先進的な工学技術を開発し、現在それを利用することを可能にしてきた。それらの中には、電気重力/反-または抗重力技術、ゼロポイント・エネルギー装置、超光速通信、進歩した医療および意識技術などがある。本論ではこれらの工学技術の幾つかを概観する。全面公開が起き、ET との公然かつ平和的な意思の交換が可能になると、これらの工学技術は必ずや利用可能になるであろう。

これらの工学技術が知られて受け入れられるようになる速度は、4 つの要因に依存する：1) 知識を分かち与えようとする ET の意思、およびその知識を供与する速度、2) 習得した知識を持ちながらそれを数十年間抑圧し続けてきた闇の地球人グループの、知識を共有しようとする意思、3) コンタクティーたちによる多数の目撃情報および彼らが ET から伝えられた事柄の受容、4) 硬直的な地球人の諸機関および政府がこの新しい知識を社会に組み入れる速度。

## 輸送技術

恒星間宇宙を迅速に移動する工学技術には、現在の物理学が表明する通常の光速度限界を回避し、またそうするために必要なエネルギー供給を可能にする物理学の理解が含まれる。全面公開が起き、ET がすでに地球を訪れているという事実が受け入れられると、人々が最初に抱く疑問の一つは、彼らはどのようにして地球にやってくるのか？であろう。それに続いて、もし彼らにそれが可能ならば、なぜ我々にはできないのか？となるはずである。これらの疑問に対する答は、我々にはそれが可能、または少なくともそれを可能にする工学技術を開発中、とい

うものである。T・T・ブラウンらによる初期の実験（1920年代終わりから1960年代）以来、人類は自身の科学と逆行分析されたET工学技術にもとづき、反重力輸送技術を発展させてきた。一部には抗重力（counter-gravity）または電気重力（electrogravitics）とも呼ばれるが、ここでは反重力（anti-gravity）という用語を用いる。これらの工学技術の発展については、ローダー（Loder 2002）、バロン（Valone 2004、2006）、ラビオレット（LaViolette 2008）を含む、多くの著者が論評している。

我々は、少なくともこれらの工学技術の一部をすでに開発済みであろうか？ - 答はイエスである。公開プロジェクト（the Disclosure Project）（Greer 2001）の目撃証人である複数の軍関係者は、1950年代終わりから続く軍による闇の諸計画について語った。その中では、作動する反重力または電気重力航空機がすでに開発されていた。例を挙げると、国家偵察局（NRO）の退役諜報員ダン・モリスは、こう述べた：“UFOには地球外のものと地球人が造ったものの両方がある”（Greer 2001、p.364；\* 摘要書邦訳 P.217）彼は、このようにも述べた：我々はすでにゼロポイント・エネルギー装置を持っており、それは電力会社にコードを繋ぐ必要はない、何も燃やさず、汚染も発生しない。別の目撃証人 A・H（ボーイング・エアロスペース社の元社員）は、こう述べた：“宇宙機の大部分は反重力と電気重力推進によって作動する” “我々はまさに今反重力輸送機をそこ（エリア 51）で、またユタ州で飛ばしている...”（Greer 2001、p.402；\* 摘要書邦訳 P.232）ビル・ユーハウス（米国海兵隊、退役）は約 30 年間、“新型航空機（exotic aircraft）”（実際の空飛ぶ円盤）のテストパイロットとして働いた。彼は、こう述べた：“この 40 年ほどの間、シミュレータは数えないで - 私は実際の宇宙機について話している - 我々が建造したものはおそらく 20 から 30 数機だろう。様々な大きさのものがあった”（Greer 2001、p.384-387；\* 摘要書邦訳 P.225）彼はまた、彼が取り組んだ宇宙機の一つが“異星人たちが我々の政府 - アメリカ合衆国 - に提供しようとした一つの制限された機体だった”と述べた。この機体には 4 人の異星人が搭乗しており、そのすべてが研究のためにロスアラモスに運ばれた。航空宇宙イラストレーターマーク・マキャンドリッシュは、ブラッド・ソレンセンが語った 3 機の ARV（複製された異星人の輸送機、フラックス・ライナーとも呼ばれていた）のうちの 1 機を図解した。ソレンセンは、1988 年 11 月にノートン空軍基地にある格納庫を訪れてこれらを見た（Greer 2001、p.497-510；\* 摘要書邦訳 P.261-272）。その中で、彼はこう語った：“床から浮揚した 3 機の空飛ぶ円盤があった - それらを吊り下げている天井からのケーブルなどはなく、下に着陸ギヤもない - まさしく床の上に浮揚、空中静止していた” それらの円盤は、直径が 24 フィートから 60 フィートあった。地球人が建造したものであり、2 個の大きな 24 ボルト・バッテリーを用いて始動した。我々に言えることは、これらのタイプの航空機技術は著しい発展を遂げ続けているということである。なぜならば、ソレンセンが見た円盤は四半世紀以上も前に建造されたものだったからである。その当時の早い時期に、ET と米国政府との間に何らかの協力関係が存在していたように思えることは、注目に値する。全面公開により、この協力関係が一般に認知され、公然と再開されるようになることを願うばかりである。

これらの輸送技術の開発は、どれほど進展しているのでしょうか？ 元ロッキード・スカンクワークス所長ベン・リッチの言葉が我々の心を深く揺さぶる。彼は（1993年に）ジャン・ハーザンらに、こう述べた：我々はETを故郷の星に帰す技術をすでに持っている（Keller 2010、P.168）。そのときの二人だけの会話で、ハーザンはリッチに、それ（UFO推進システム）はどのような仕組みで作動するのかと訊ねた。リッチ - “あなたに質問しよう、ESP（超感覚的知覚）はどのような仕組みで働くと思うか？” ハーザン - “時空のすべての点は連結している、ということでしょうか？” リッチ - “それこそが答だ！ この概念は1927年にシュレディンガーによって洞察されたものだ”（後述する通信技術の項を読みたい）

過去60年以上行なわれてきた大規模なET情報隠蔽の大きな理由の一つは、それが数兆ドルの規模を持つ我々の輸送およびエネルギー部門全体に関係するからである。人々から金を絞り上げ、自らの利益のために世界経済を支配する、そのことのために世界に対してET情報を公表しないことは、闇の支配者グループによる重大な犯罪行為である（Greer 2001；Marrs 2010）。将来の地球社会が輸送用の動力に化石燃料を必要としなくなり、反重力工学技術が利用され始めるにつれて道路の必要性がなくなっていく様子を想像して欲しい。これらの技術が公共利用のために開発されると、物資や人々の輸送にとどまらず、化石燃料／エネルギー部門の全体、世界の銀行業や製造業、世界政治といった、人類活動のあらゆる側面に甚大な影響を及ぼすことになる。全面公開が起きると、支配者グループは支配力を失う。明らかに彼らはそれを恐れてET情報を秘密にしているのである。

## エネルギー発生技術

上述したように、恒星間宇宙の広大な距離を移動するETは、従来の地球型燃料ではなく、空間自体から得られるエネルギーを利用している - いわゆるゼロポイント・エネルギーまたは量子真空エネルギーである。前項においてダン・モリスは、闇のプロジェクトの中ではそのような装置がすでに開発されていると述べた。マキャンドリッシュによるARV（複製された異星人の輸送機）の説明の中にも、我々の初期のARV技術においてさえ、この問題が解決済みであったことを示す証拠が含まれている（Greer 2002）。この分野の研究への公共科学的支持は、より従来型の方法によるエネルギー発生研究に比べるときわめて少ない。しかし現在、このような工学技術の可能性に大きな関心が持たれている。現在理解されているゼロポイント・エネルギーについてのすぐれた論評が、ビーデン（Bearden 2002）、キング（King）、マニングおよびガーボン（Manning and Garbon）、バロン（Valone 2007）、バシラトス（Vassilatos 1999）、その他多くの著者により発表されている。

全面公開が起き、世界のエネルギー需要を賄うための化石燃料および膨大な配電網が不要であることが理解されると、大規模なブローバック（吹き返し）が始まり、世界経済の原動力を様変わりさせると予想される。例えば、21世紀初頭を特徴づける“石油戦争”は、もはや必要が

なくなる。我々はこれらの工学技術がすでに開発され、秘密にされていることを知っているので、自らの利益のためにこのような知識を世界に知らせないでいる輩に対して、恐らく訴訟と尋問が行なわれるであろう。

化石燃料からゼロポイント・エネルギー技術への切り替えは、一夜にしてならないことを覚えておいて欲しい。何と言っても世界には6億台を超える自動車、電気を必要とする数十億の家や会社があるのである。これらすべての自動車を世界が一夜にして取り替えることは出来ない。世界の自動車の年間生産台数は5千万台に過ぎないからである。ゼロポイント・エネルギーを抽出するための様々な装置を開発試験し、世界のエネルギー利用に重要な変化をもたらすほどの数量を製造するためには、長い年月と、マンハッタン計画に匹敵する多くのプロジェクトが必要になる。このプロジェクトには大量の資金が流入するであろう（恐らくベイルアウト（救済）がまた起きる）。まさしくそれは、我々が知っている世界の転換（transformation）である。ゼロポイント・エネルギーが利用可能になり、さらに反重力または電気重力輸送技術がこれに加わると、人々の生活、移動、仕事の様式は完全に様変わりするであろう。

“力の均衡”も変化することになる。世界の石油企業上位20社のうちの15社は、収入の相当部分をそれらに依存する各国政府が所有しているため、世界の資金フローに重大な変化が起きるであろう。さらに、エネルギー部門は米国でも海外でも、政府に税金を払う多くの人々を雇用している。各国内の税務戦略も変わることになる。例えば米国の場合、すでに地方自治体／州政府が、道路の維持管理とハイブリッドカー／電気自動車の問題に対処しつつある。これらはガソリン税を全く払わないか最小限しか払わないのである。多くの国々において資金フローの方向が変化し、貿易収支に影響を及ぼすであろう。大量の石油埋蔵量を持つ人口過疎の国々（中東諸国の多く、その他）は、現在のような高い平均所得を享受できなくなる。技術製品を大量に生産することのできる国々（韓国、日本、中国など）には、石油豊富な国々に代わり、かつてのオイルマネーが流入するであろう。

これらのことは一夜にしてならず、全面公開が始まった後の数年間は、依然として我々は石油製品を使い続ける必要がある。しかし全面公開は、石油業界の投機的性格を変えるであろう。これらの新しい工学技術への転換には、大企業および一部の政府による強い抵抗がこれまでもあったし、これからも続く。いずれ近い将来にはこの変化が起きるはずであるにもかかわらず、彼らは抵抗するであろう。大規模かつ採掘容易な浅い化石燃料鉱床はすでに開発されており、採掘が困難な深い鉱床によりエネルギーに飢えた世界の増加し続ける需要を賄うのは、いよいよ難しくなっている。容易に採掘できる石油生産量が急減するピークオイル（peak oil）の時期がいつになるのか、“専門家たち”は今も議論している。しかし、石油を見つけ出し市場に送り込むのが、益々困難で費用のかかるものになっていることは確かである。ピークオイルの時期が2年後なのか、それとも20年後なのかは、いまだに不透明である。しかし、もし人類がそのエネルギー需要を満たしつつエネルギー生産による環境汚染を減少させ、持続可能な生存を続けるならば、最終的にピークオイルは到来するであろう。そうでなければ“マッド・

マックス (Mad Max)” の時代である。

## 通信技術

恒星間宇宙を迅速に移動する工学技術には、超光速通信 (super luminal communication; SLC / faster-than-light; FTL) を可能にする物理学の理解も含まれるであろう。この技術は、宇宙探索および宇宙植民の両方にとって必要である。だから、我々の太陽系や地球を訪れているどのような進化した文明も、故郷惑星との間で、瞬間的ではないにしてもリアルタイムに近い通信を行なう能力を持っていないと考えるのは、筋が通らない。

SLC (超光速通信) は、ウィキペディア記事の中で横柄にもこう述べられているように、一部の研究者により不可能だと考えられている：“科学によりこのような通信は不可能だと考えられているため、このカテゴリーの大部分の論文は架空の創作である”(Wikipedia 2011a) この考え方が優勢であるにもかかわらず、超光速通信の可能性をきわめて慎重に考察している多くの人々がいる。これが理論的に可能であることを、我々の一部の先進的物理学が発見しているのである。宇宙探索および宇宙植民のために必要な工学技術を述べた論文の中で、ローダー (Loder 2002) は SLC の可能性に関する最近の科学論文について概説している。ワンら (Wang et al. 2000) は 10 年以上前に、FTL (光よりも速い) 現象があることを実証し、現在の科学者たちから不可能と分類されている全く新しい科学的現象の分野が生まれる可能性を示唆した。クラマー (Cramer 1997) は FTL 通信の可能性について論じ、ロドリゲス (Rodrigues 2011) はこのテーマに関する幾つかの参考文献リストを作成した。ビーデン (Bearden 2002) は手紙の中で、多くの文献を引用しながら、通常のスカラー・ポテンシャルが超光速通信その他の基礎であると述べた。ビーデンはまた、すでにケルン大学で行なわれた SLC 実証実験についても述べている。ニュー・サイエンティスト誌 (著者不明 2002) の報告によれば、“ミドルテネシー州立大学の科学者たちが、わずか 500 ドルの市販装置を用い、120 メートル余りの距離においてあの速度限界を破った” これらの初期研究が実用的な SLC 工学技術をもたらすものなのかどうか、現時点では不明である。

しかし、これは始まりに過ぎない。これらの初期実験はその大部分が現在理解されている物理学を用いているが、ET 工学技術はすでにそれを越えたところにあるからである。ET が SLC 問題を解決していることは明らかなので、我々の理解を発展させるために彼らの支援を受けることは、当然ながらきわめて有益であろう。またその結果、物理学に対する我々の今日的理解を抜本的に見直すことになる可能性が高い。その理由；SLC のために心と意識を高度に利用することが、恐らく ET の通信方法である。詰まるところ、エルウィン・シュレディンガーが 1927 年に述べたように、“多様性とは見かけに過ぎず、実際には一体化した心 (one mind) があるのみ...” “量子力学は、このようにして宇宙が基本的に統一体 (oneness) であることを明らかにした”(Wilbur 1984) この“一体化した心”へのアクセスが、“遠隔透視者”についての

報告を説明する助けになる。基本的に彼らは、はるか遠くの物体を時間の遅れなしにリアルタイムで見るのである。一方、パソフ（Puthoff 2008）は遠隔視がどのような仕組みで機能するかについて、それが“多次元的な付加的次元”または量子もつれ（quantum entanglement）のある側面に関係するかも知れないとしつつも、今自分に言えることは“私はそれを解明する糸口をつかんでいない”ということだと述べている。“一体化した心”へのアクセスは、闇のプロジェクトの中で利用されていると報告された CAT（consciousness-assisted-technology; 意識の力を借りた工学技術）により、さらに増強される（Greer 1999）。ET による CAT の利用が、ベル研究所の科学者により報告された。この科学者は 1960 年代に、それを調べて逆行分析するために、グレープフルーツほどの大きさを持つ 1 個の ET 交信装置を渡された。その装置は心の中で彼と交信し、こう告げた：それを複製したいと思っている人々は内心悪意を持っているので、科学者はそれを破壊すべきだと（Greer 1999）。

ET 通信における心（mind）の利用については、元空軍軍曹ダン・シャーマンがその著書“Above Black”の中で報告している。同書には、シャーマンがある計画の中で“直観通信員（intuitive communicator）”として広範囲な訓練を受けたこと、その計画は 1960 年代初めに胎児に対する遺伝子操作から始まったこと、彼が関わったのは 1990 年代の数年間であったことが述べられている（Sherman 1998）。彼が様々な ET との間で行なった交信の大部分は、数字の羅列を繰り返し記録することだった。そのことを彼は律儀に述べている。しかし彼はさらに経験を積むことにより、より高い“次元（plane）”で交信できるようになった。彼は質問を発し、その答を受け取り、視覚イメージを受け取った。ET たちは驚き、人類がこのような高い次元で交信することを予想していなかったと述べた。

約 20 年間に行なわれたほぼ 100 回の CSETI（地球外知性体研究センター）トレーニング中に、ET が CSETI メンバーと様々な方法で交信したのを我々は目撃している。これらの交信現象がグリア（Greer 1999）により簡潔に記述された。それらは心による交信（mind communication）、光景（sight）、触感（touch）、におい（smell）、音（hearing）、印象（feeling）を含む、人間の全感覚を利用している。それから 10 年後に、CSETI チームの主要メンバーが自ら目撃し体験したことを一冊の本に編集した。これは彼らと ET との間の驚くべき交信の記録である（Greer 2009）。上述したように、ET は人々と交信するために多くの方法を用いるが、しばしば交信者の心の状態、また実に意識レベルが、交信を成功させるために重要な役割を果たす。例を挙げると、1999 年にカリフォルニア州シャスタ山の近くでトレーニングに参加していた CSETI のグループが、地球の平和を祈る瞑想ガイドを聴きながら瞑想していた。このとき誰の目も閉じられていた。突然、トレーニングをしていたメンバーの一人アル・ダナウェイが、頭の中ではっきりと声を聞いた。その声は、彼に上を見上げるようにと告げていた。彼が上を見上げると、巨大な三角形宇宙機がまさに頭上を通過していた。この時点で瞑想は中断され、誰もがその宇宙機を見た。それはビデオテープにも撮られた。その宇宙機は同じ週にさらに 2 回目撃された。これは、CSETI トレーニング中に起きた数千回の心による交信のうちの 1 例に過ぎない。

余談であるが、SETI（地球外知性体探査）と呼ばれる計画が、ET と交信するための間違っただ工学技術である、巨大電波望遠鏡やコンピュータシステムに数百万ドルを費やし、全く見当違いのことをしている。ET は光速度に制限された工学技術を利用していない - それは 'あまりにも' 遅い。SETI は偽情報、誤情報を流すことを目的としたものである可能性が高い。彼らによると、信号は受信されていない - だから何者もそこにはいない。事実を言えば、彼らは何回か信号を受信したことがあるが、それを一般には知らせてこなかった。

全面公開が起き、ET の交信方法について人々や科学者が疑問を持ち始めると、この知識の一部は明らかになる。しかし、それを本当に知るためには、心、意識、現実、および宇宙の性質についての深い理解が必要である - 硬直的な科学界が容易に受け入れられるようなものではない。これは闇のプロジェクトの中では多少理解されている。しかしそれが完全に理解され、一般の科学界に受け入れられるまでには、しばらく時間がかかるであろう。これらの通信技術が、ビーデン (Bearden 2002) により述べられたスカラー・ポテンシャルまたは量子ポテンシャルに関係するのか、それともパソフ (Puthoff 2008) が言及した何か別の現象に関係するのかについては、もう少し先まで待たなければならない。

## 意識と医療に関する科学

知的生命の意識、そのような生命の調和宇宙における位置、これらの理解において少なくとも一部の ET は、人類の大部分よりもさらに進化を遂げている - コンタクティーたちからの情報にはこのことを示す多くの事例証拠がある。ひとたび全面公開が起きると、人類の間に ET の精神性、彼らの多様な文化（多くの文化がある）における神 (God) の概念、および意識と知性の性質について知りたいと思う機運が、いやが上にも高まるであろう。多くのコンタクティーが心によって ET とのコンタクトを経験しているので、意思疎通のために心の能力を拡張することが、多くの人々の目標になると予想される。意識の科学が新たな覚醒の時を迎え、多くの人々は瞑想や意識拡張がもたらす多様な技能または能力 (Siddhis; 超能力など) を学ぶ意欲を呼び起こされるであろう。

人間の意識についての理解が深まると、治療や延命を含む医療科学の分野に大きな進歩がもたらされることになる。この進歩は、医療専門家がヒトの身体 (physical body) と精神体 (energy or spiritual body) の関係をよく理解し始めるにつれて起きる。すなわち、心-身体 (mind-body) のつながりのさらに進んだ理解である。これは一部の実験医学ではすでに起きているが、まだ医療専門家に広く受け入れられるまでに至っていない。上記の予想を裏付ける証拠の源は、ある種の末期疾患と診断され、数週間または数ヶ月の余命を宣告されたコンタクティーたちによる多くの物語である。彼らはある種の ET コンタクトまたは精神的コンタクトを経験し、それから間もなく自分の病気が治ったことに気付く。我々の現在の医学的理解の枠に収まらないからというだけで、そのような報告を頭から退けることは難しい。

例として、米国人ではないある友人が私に語ったことであるが、数年前に彼女は医者から乳癌と診断された。間もなく彼女は、深い瞑想中にきわめて緊密で直接的な ET コンタクトを経験した。瞑想の間、1 個の黒い小箱のような装置が彼女の周囲を舞い、身体に入り、脚から肩まで移動した。その装置は静電気のようなものを放射しており、彼女は身体にやや圧迫を感じた。彼女は、一緒に瞑想をしていた友人が彼女に触れているのだと考えたが、彼女が薄目を開けて見ると、その友人は離れた場所で深い瞑想に入っていた。また、部屋には複数の光球（オーブ）が浮遊していた。彼女はそのとき、部屋の閉じたドアの外を ET が歩いているのを感じていた。それから 2 週間後、彼女が次の検査を受けたとき、癌は完全に消えていた。

ET から何かの支援を受け、心-身体をつながりについての理解が向上すると、それは人間の寿命を延ばす我々の能力に必ず影響を及ぼすであろう。健康な身体はより長く生存する可能性が高いので、健康が増進すると寿命が延びるのは当然の帰結である。人間の寿命を、地球年齢 100 歳余の壁をはるかに超えて延ばすことが可能かどうかは、さらなる研究が明らかにするであろう。しかし、今日の科学者たちはこの分野の研究を続けており、特に老化過程におけるテロメアの役割に注目している（Wikipedia 2011b ; Ritter 2009）。例えば、ケルシー（Kelsey 2011）による最近の論文では、ELF 電磁共鳴場に曝すと、テロメアの長さにプラスの効果を生じることが示されている。

## 結語

最後に、‘ET が地球に来ていることなどあり得ない’ という公式見解に賛成している多くの科学者にとり、全面公開を受け入れることは感情的で苦痛を伴うパラダイム転換になるであろう。宇宙における人類の位置について大変気の滅入る、暗い、率直に言えば悲慘な考えを持っている、これら二人の科学者を考えて欲しい（出典：Davie 1995、p.58）。フランス人生物学者のジャック・モノーはこう書いている：

“古の契約は粉々に砕けている：人間はついに宇宙の無情な広漠の中で孤独であることを知る。その中から人間はほんの偶然によって現れ出たのである。人間のさだめも、務めも、書き留められたことはない”

物理学者のスティーブン・ワインバーグは、同様に悲慘な見解を述べている：

“宇宙が理解可能だと思えるようになればなるほど、宇宙が無意味なものにも思えてくる”

全面公開が起きると、この二人の科学者は大変驚くであろう。彼らは、人間と宇宙の性質について自分たちが間違った評価をしていたことを認めることができるであろうか？

全面公開は、地球に住む我々のすべてにとり、大変関心を引くものになるはずである。一般に認知された公然コンタクト（公開）がひとたび起きるや、人類活動のほぼすべての分野において重大な変化が生まれるであろう。それが“後戻り”することはない。人類は宇宙の知的存在者たちの仲間入りを果たすのであり、最終的にこれは人類にとり“きわめて望ましいこと”になるであろう。

## 引用文献

[\(原文を参照されたい\)](#)

(訳：廣瀬 保雄)

---

2011年 MUFON (相互 UFO ネットワーク) シンポジウム提出論文, 2011年 5月 27日  
<http://www.2011mufonsymposium.com/Speakers/TedLoder.php#01>

# ONE UNIVERSE, ONE PEOPLE

Copyright 1991

Steven M. Greer, M.D.

## 一つ宇宙、一つ人々

著作権 1991 年

スティーブン・M・グリア、医師

[\(CSETIのウェブサイトより\)](#)

人類が歴史を通じて直面してきた最大課題の一つは、多種多様な人々の間に融和と平和を確立することである。性別、人種、民族的出身、国籍、宗教といった表面的、外見的、文化的な差別が長い間人類を分断し、多くの戦争や社会的混乱の原因になってきた。人間が世界的規模で真剣に融和点を模索し、人類を分け隔てている障壁を克服し始めたのは、この百年ほどのことに過ぎない。この進化過程の中心をなすものは、多様性を受け入れ称えながら、同時にすべての人間が共有する基本的な一体性（oneness）を見る、ということであった。この融和の原動力 - 一体性の視点で見ること - は、世界の恒久平和と繁栄の最も重要な礎であり、次の千年の行動原理となるものである。偏見を克服し、人類の本質的一体性を受け入れるという、長く苦痛に満ちた過程は、決してまだ完結していないとはいえ、一つ人々（one people）という、真に世界をつなぐ共同体の黎明期に我々を導いたのである。人間は人間性を共有するという点において一つなのであり、人種、国籍、性別、宗教などは二次的なことに過ぎないという認識は、実に 20 世紀最高の偉業と言えるであろう。

しかし、人間であるとはどういう意味なのか？ 純粋に生物学的定義を離れて、本質的に人間であるとは？ 我々の最も深い融和点は、人種、文化、性別、職業、人生での役割、さらには知的水準、感情的気質といったものをさえも超越する。これらの属性のすべては、人々の間で大きく異なるからである。むしろ人間の一体性の基盤は意識そのもの、すなわち意識を持ち、自己を認識し、知性を持つ知覚者となり得る能力である。他のすべての人間性は、あらゆる属性の根源であるこの意識より生じる。意識的知性は、他のすべての人間性が生じる場所の根源的本質である。意識は普遍的であるとともに基本的に純粋なキャンバスであり、その上に目もくらむばかりの多様な人生が現れるのである。人間融和の最も堅固にして永続的かつ超越的な基盤は、意識そのものである。というのは、我々はすべて知覚する存在であり、意識を持ち、自己を認識し、知性を持つからである。この意識という基盤は、すべての人間が共有する最も単純な、しかし最も深い共通の土台であるがゆえに、二人の人間や二つの文化がどれほど異なろうとも、融和が広く行き渡ることを可能にするのである。

人間にとり、融和の課題はこれまで困難であったし、これからもそれは続く。しかしそれならば、人間と地球外文明との間に生まれつつある初期関係の困難さは、それにもましてどれほど大きいであろうか。例えば、米国人とケニア部族民との間の表面的、文化的な違いは、人間と地球外文明との間にあるそれよりもはるかに小さいのである！もし不和や闘争が、我々が人間の間の違いのみに目を向けるときに起きるものだとすると、我々が人間と地球外存在者との間の相違点しか見ることができない場合、起こり得る不和と闘争はさらにどれほど大きくなるのか。失敗した過去の破滅的見方 - 違いと異質性のみを見る - は、新しい見方に道を譲らなければならない。すなわち、一体性の視点で見るということである。この一体性の視点は我々人間のみならず、地球外の人々にも同じように向けられなければならない。人間の間にある融和の基礎と同じものが、人間と地球外の人々との関係にも存在するからである。

地球外知性体 (Extraterrestrial Intelligence; ETI)、このひどくありきたりな表現は、見事なまでに融和の概念に適している。地球外知性体はその起源の惑星、恒星系、銀河系が何であろうと、またどれほど様々に異なろうとも、本質的に知性を持ち、意識を持ち、知覚する存在である。人間も本質的に知性を持ち、意識を持ち、知覚する存在である。我々は本質的に同じ存在なのである。この基礎の上に、今我々が '一つ地球の子供として一つ人々' を思い描くように、 '一つ宇宙に生きる一つ人々 (one people inhabiting one universe)' について語るができる。違いとは常に程度の問題に過ぎないが、意識の内に築かれる真の融和は絶対である。他惑星から今地球を訪れている存在者たちは、表面的にもより深い意味においても、間違いなく人間とは異なるにもかかわらず、意識的知性を持つ存在である。意識は人間にとっても地球外存在者にとっても基礎であるがゆえに、宇宙の多様な人々をつなぐ融和と意思疎通の基盤となる。信念が異なろうとも、生物学的過程が異なろうとも、獲得した諸能力が異なろうとも、社会的システムおよび科学技術が異なろうとも、意識的知性というすべての人々を貫く単純な糸が、我々の融和を優雅に織り上げるのである。この本質的融和は、純粹かつ不変であり、知的生命体それ自身の存在にとり基本的であるために、多様性の試練を受けることはない。

宇宙の人々の間に融和を確立するという課題は、地球の人々の間に融和と平和を確立するという課題の壮大な拡張である。多様性、差別、違いには、より深い融和の基盤をしっかりと視野に入れながら、相互尊重、受容、さらには称賛をもって対処しなければならない。一体性の視点は、人々の間の多様性を排除することも拒否することもせず、むしろこの多様性を意識に根ざした普遍性のパラダイムへと関係づけるのである。この種の認識能力の発達、人間の間融和と平和のみならず、人間と宇宙の他の知的生命体との間の融和と平和にとり、最も重要な前提条件である。人類の長い、しかし今のところまだ不完全な世界融和への歩みの中で、人間はいくつもの誤りと欠点を示してきた。我々が地球外の人々と平和的に交流するという課題に直面したとき、その誤りと欠点が忘れ得ぬ教訓となるように、我々は心から願わなければならない。斯くも傑出した宇宙が見せる、終わりなき多様性に耐え得るのは、普遍的意識の静謐の中で形成された心のみであろう。これから数十年、数百年、数千年の間に、人類の生存がどのような外面的進歩よりも意識の発達に依存することを、我々は益々実感することになる。

ただ一通りに創造した一つの神（one God）があるように、それが地球上であれどこか他の場所であれ、すべての意識的存在者の起源となった一つの神がある。偉大な宇宙の知性（great Universal Intelligence）は、すべての意識的存在者を介してこの意識の光線を送り出している。その繊細で遍在する働きにより、我々は神と一つになり、互い同士が一つになる。人間の現実と、他の地球外の人々の現実が同じものであると私が述べるのは、これらの理由のためなのである。違いの視点で見れば、我々は多様であり無関係である。しかし一体性の視点で見れば、我々は異なる以上に類似しており、他人である以上に親類である。そうであるからこそ、我々は自らの内的現実に向き、我々人間との間の一体性のみならず、我々と宇宙の他の知的生命体との一体性をも見出さなければならないのである。つかの間の違いが、我々を困惑させるかも知れない。しかし、我々の意識の中にある本質的一体性が、我々を裏切ることは決してない。なぜならば、‘一つ人々が生きる一つ宇宙（one universe inhabited by one people）’がそこにあるからである。我々は彼らなのである。

（訳：廣瀬 保雄）

# DISCLOSURE AND TRANSFORMATION: Why Disclosure of the UFO/ET Subject Matters

Copyright 1999 Steven M. Greer M.D.

## 公開と地球の転換： なぜ UFO/ET の主題を公開することが重要なのか

著作権 1999 年 スティーブン・M・グリア 医師

([CSETIのウェブサイトより](#))

次世紀に向かって疾走する世界の叫喚のさなかに、我々の未来を左右する巨大な秘密が、人類に知られることなく存在している。この秘密は、ありふれた風景の中に隠されているにもかかわらず、大部分の人々はそれに気付かないままである。この秘密は、大衆文化の中では広く論じられている - しかしその重要性も意味も、依然としてとらえどころがない。

新たに出現したハイテク億万長者やインターネット長者があまたいる世界の中で、我々はいまだに 1800 年代からの遺物である基盤インフラ - 可燃燃料 - を使っている。しかもこの遺物は、おびただしい汚染の中、持てる者と持たざる者の格差が益々拡大する世界の中で、我々の未来を灰にしなから、人類の生存と可能性のすべてを脅かしている。

世界の上位 250 人の富が世界人口の半分の富に等しく、このまま進めば、大量の灰色スモッグの中で何らかの終末に行き着く他はない世界にあって、我々は宇宙で孤独ではない - またすでに訪問を受けている - ことが、どれほど重要なのか？

本当に、それはどれほど重要なことなのか？

その理由は、この秘密の中に大きな希望と展望があるからである。今の千年期が次の千年期になだれ込むこのときに、我々には一つの光景が見える。それは終末と絶望の光景ではない。我々に見えるのは、現在の閉塞的で絶望的に思える人類の諸問題が、別の世界へと転換されていく世界である。それは希望と持続可能文明の世界である。それは - 次世紀中に終末を迎える社会ではなく - 幾世紀にもわたり発展し続けることが可能な、地球規模の先進科学技術社会を実際に思い描くことのできる世界である。

良い知らせは、それを実現する方法を我々が知っていることである。その答はすでにあり、輝かしい未来が人類を待つばかりになっている。残念な知らせは、無気力と無関心が充満する現在の環境の中で、これらの答が人々の目から隠されていることを我々が知っていることである。

それは隠れた未来である - それはすでにここにあるが、隠されている。我々はそれを引き出すだけの気力と強靱な精神を持っているだろうか？

今朝、私はこんなことや他の多くのことを考えながら目覚めた。

このような目標を追求するために父親が 20 万ドルの年収を諦めている理由を、私の子供たちにどう説明すればよいだろうか？ このような情報公開への支持を取り付けるために、私は世界中を駆け回り、首脳たち、将軍たち、提督たち、さらには産業界の大物たちと会合を重ねた。私が引き受けたこの仕事の目的を、どうしたら伝えられるだろうか？ 私の最も親しい親友の一人と最も大切な同僚が、この目標を達成しようと奮闘しながら、この 1 年の間に世を去った。だから私がこの仕事を中断することなど、どうしてできようか？ シャリ・アダミアクが癌と闘っていた同じ時期に、私自身も癌と診断された。それ以来、私は 'この人生で何をなすべきか？' を自分に問っている。

この 8 年間に、我々はこの展望を実現しようと努力してきた。もちろん、キャリアや金といったものを求めて、いわば通常の生き方をする方が容易ではあっただろう。しかしそれこそが、ほぼすべての人々がそのように生き、世界を今日見られる状態にしてしまった原因ではなかったのか？

だから、私の子供たちのために、この苦闘とその危険性について知りたいと思っている - また心配している - すべての人々のために、そしてまた 'わざわざどうして?' と訊ねるかも知れない人々のために、私は展望されるこの世界を語らなければならない：

**その世界では**、我々が宇宙で孤独ではないこと、実際にはすでに訪問を受けていることを人々が知る - 地球は突然に、広大な宇宙の中のとてつもない小さな青い島となり、人類はすべてその上に住む家族となる。

**その世界では**、人々とその代表たちが、搾取勢力と権力の密かな濫用に立ち向かい、ついに民主主義と公正で自由な社会を実現する約束が果たされる。

**その世界では**、1 兆ドルの軍産複合体が転換され、世界のすべての人々を破壊するのではなく向上させるための推進力となる。

**その世界では**、人々の資金で賄われた闇の諸プロジェクトがその仕組みを解明し、使用可能になっている地球外起源の工学技術が公開され、すべての人々のものとなる。

**その世界では**、これらの進歩により、どの家も村も、それ自体のエネルギー源を持つことが可能になる。そのエネルギー源は燃料を必要とせず、空気、水、大地を汚染しない。

**その世界では**、第三世界が、限られた資源とエネルギーコストがもたらす貧困から解放される

- その結果、第三世界は、北半球の繁栄国家群に混じって同等の地位を占めることになる。

**その世界では**、我々は、戦争のための新たな発射台としてではなく、探査と発見のために宇宙を利用する。

**その世界では**、我々の子供たちの子供たちの子供たちが、大規模な環境破壊という亡霊から解放されて生活し、成長する。

**その世界では**、地球とその住人たちが、他惑星の人々の仲間入りをし、数千年続く進化のスパイラルに合流する。

**その世界では**、現在ハイウェイの下に埋もれている数百万エーカーの肥沃な農地が解放され、より良い利用のために耕される。我々は、今はまだ地下施設にしまい込まれている装置に乗り、静かに浮遊しながらあちこちと移動する。

**その世界では**、無汚染-自立型のエネルギー源がそれぞれの家庭やオフィスで利用されるため、見苦しい送電線、発電所、核廃棄物が、不適切なものとして姿を消す。

**その世界では**、どの熱帯雨林も、生産力の低い農地や薪を得るために、伐採されたり燃やされたりする必要がなくなる。エネルギーと生産の手段が、その火炎地獄を永久に鎮火させるからである。

**その世界では**、多くの社会不安や苦悩を生む、過酷な貧困という大きな窮乏と不公平が、強欲のゼロサムゲームではなく、豊饒の文化に取って代わられる。

**その世界では**、他者を搾取することに代わり、人間の潜在力と心の探究が行なわれる。

**その世界では**、世界の人々が、神聖 - かつ普遍的 - な平和の強化を誓い、どの指導者、勢力に対しても他者への侵略、搾取を許さない、集団安全保障を実現する。

**その世界では**、人間であるか否かを問わず、すべての生命が人種、性別、その他の外面的性質によっては判断されず、その内面的あり方の本質ゆえに、等しく敬意が払われ、保護される。出身惑星がどこであるかさえ、問題ではない。

このような世界のために、何らかの努力は当然であり、ある程度の犠牲も正当化される。

我々があと一つ、最後の山を登り切ると、この光景が現実のものとなる。この世界を実現するために、我々は本当にあと一步のところにいる。そのための手段はある。そのための工学技術は、すでに我々を待ちかまえている。なすべきことが何であるかは、明らかになっている。世界は急速に結ばれ、有機的統一体に向かっている。

私の友人が、生前のフィリップ・コース大佐から直接聞いた話を、私に語ってくれた。1950年代か1960年代初めのある時期、大佐がホロマン空軍基地/ホワイトサンズ・ミサイル実験場にいたとき、1機の地球外宇宙機が着陸した。そのETたちと軍の間には交流が持たれた。ある時点でコース大佐は、典型的な米国軍人の流儀で、ETとの公然たる協力関係についてこう訊ねた：“私の方にはどんな利点があるのですか？” ETはこう答えた：“より良き世界だ - もしあなたたちがそれを手にすることができれば...”

さて、この話が本当かどうか、私は知らない。私はそこにいなかったのだから。しかし、それは宇宙が我々に言っていることとまさしく同じである、そう私は理解することができる：我々を待っている、より良き世界がある - 我々はそれを創造することができる。我々は、それを手にすることができるだろうか？

確かに、やってみるだけの価値はある。

スティーブン・M・グリア、医師  
CSETI（地球外知性体研究センター）総責任者  
バージニア州アルベマール郡  
1999年1月15日

（訳：廣瀬 保雄）

# The Unacknowledged Threat - Secret and Covert Operations by the USA

published in the August 2004 issue of the World Affairs Journal

Updated 08-18-04

Steven M. Greer

## 認められざる脅威 - 米国による隠された秘密工作

ワールド・アフェアーズ誌 2004年8月号掲載

2004年8月18日更新

スティーブン・M・グリア

[\(公開プロジェクトのウェブサイトより\)](#)

第二次世界大戦の終結以来、米国の軍産複合体は密かに莫大な公的資金を使い、エネルギー発生、大気圏内外飛行、未来兵器といった、大部分が軍事目的である新技術の研究開発を主導してきた。それらの新技術が公共の利益のために提供されたことはない。しかし今日、環境および経済の非常事態が出現するに及び、蓄積された技術情報を人類の利益のために平和利用することが、否応なく求められている。

“それ自身の空軍、それ自身の海軍、それ自身の資金調達機構、そしてそれ自身が考える国益を追求する能力を持ち、あらゆる抑制と均衡の束縛を受けず、法そのものからも自由な、陰の政府が存在する”

- 上院議員 ダニエル・K・イノウエ

“政府の議会において我々は、求められたものであるか否かにかかわらず、軍産複合体による是認されていない影響力の支配を警戒しなければならない。根拠のない権力の破滅的な台頭の危険が存在し、これからも存続するだろう。この複合体の重圧が我々の自由と民主的プロセスを危険に陥れることを許してはならない。何事も当然のことと考えるべきではない。用心深く見識のある市民のみが、平和な方法と目的をもって巨大な産業と軍事の国防機構に正しい網をかぶせ、安全と自由を共に繁栄させることができるだろう”

- 大統領 アイゼンハワー、1961年1月

上記の演説は、共和党员として合衆国大統領を二期務め、陸軍五つ星将軍でもあったドワイト・アイゼンハワーが1961年に政権を離れるとき、将来を予見した警告として語ったものである。多くの人々は、あのような保守的かつ親軍政の大統領がなぜこのような警告を発しようとしたのか、不思議に思っていた。今、我々はその理由を知っている。

米国に本拠を構える民間非営利団体の公開プロジェクト (The Disclosure Project ; ディスクロージャー・プロジェクト) は、超憲法的に活動する違法なプロジェクトを証言する軍、情報

機関、企業の数百人に上る証人を確認している。それらの違法なプロジェクトは情報を隠蔽し、石油、石炭、原子力など、従来型エネルギー源の決定的な代替となり得る技術を一般社会が利用することを阻んできた。これらの技術は、米国、英国を始めとする諸国の軍産利害勢力が獲得し発展させたものであるが、彼らは合法的な当局機関および一般社会に対して繰り返し嘘をつき、この情報を公表しないできた。この情報は技術、エネルギー生産、推進、石油とエネルギー供給に関係する環境および地政学的問題の諸分野において、世界の現状を完全に転換する可能性を秘めている。要するに、これらの技術の賢明な応用により、持続可能で無汚染かつ豊かな文明を創造することが可能であった。また、このような技術の知識が意図的に抑圧されていなかったならば、国際社会が直面している最も差し迫った危機の多くは、回避されていたはずである。いわゆる“国家安全保障上の懸念”がこのような秘密の理由とされてきたが、実際には石油業界、化石燃料業界、および関連する特別利益団体の優位性を基盤とする現体制維持への強固な意志が、その政策の動因である。

アイゼンハワー大統領が政権を離れる時まで、西側陣営の軍事、情報、企業の計画には構造転換が起きていた。ソ連との間の核軍備競争および冷戦という緊迫した圧力が、極度の秘密主義を生み、それは第二次大戦中に原爆を製造したマンハッタン計画を取り巻く構造基盤の秘密をはるかに凌ぐものになった。自由主義陣営の運命は危機に瀕していた。このため、秘密主義の闇の中で、技術的進歩をもたらす手段の開発に惜しみなく資金が注ぎ込まれた。国家存続のためにこのような秘密を必要とする文化が生まれ、秘密計画における“知る必要性を持つ者のみ (need-to-know-only)”の制約は、ローゼンバーグ事件を含むこの時代のよく知られた数々のスパイ事件により、さらに強化された。

しかし、一般的には正当化され得るこのような秘密の文化は、軍、情報機関、企業、研究所の複合体内部に不正な秘密が生まれる機会をも与えることになった。アクセスするために本来の意味での知る必要性が求められる適切に構築された機密分類の諸計画は、次第に“区画化 (compartmented)”され、制約され、謎に包まれるようになった。資金調達の仕事は複雑かつ不透明になり、計画の構造は作り話や“店頭 (store front)”工作により隠蔽されて事実上侵入不可能になり、このような計画の内部にいる人々は孤立を深めると同時に異様な力を手に入れたことを知った。

極度の秘密主義（それが絶対必要だと主張する人々も多いだろう）が、あり余る数十億ドルのいわゆる“闇の予算”を資金源とし、多くの超常的な現象や技術を扱う無法で非合法かつ強力な“認められざる特殊接近プロジェクト (unacknowledged special access projects ; USAPs)”という怪物を生んだのは、まさしくこの闇の内部であった。USAPsの世界では、区画化が著しく進み、知る必要性の制約はきわめて厳しく、情報はあまりにも重要であるため、米国、英国を始めとする諸国において、憲法に規定された当局による意味のある監督は全く不可能になった。ここで“認められざる (unacknowledged)”とは、本人がそのプロジェクトについて完全に知る必要性を持ち、活動に関与することを直接求められるのではない限り、誰もそのプロジェクトについて知らされることはない、という意味である。たとえ政府高官がそれについて訊ねたとしても、答は“そのようなプロジェクトは存在しない”である。

さらに、軍、情報機関、企業の計画を取り巻くいわゆる“回転ドア (revolving door)” 世界の環境が、企業と金融界の影響力を生み出したが、それは真の“国家安全保障” 上の利益や正当な公共の利益に反するものであった。とりわけ米国においては、軍事技術、研究開発計画、外部委託の公共事業や運營業務に向けられる数十億ドルの支出が、国家財政と私的利益の混同を起しやすくした。このことは、計画の極度の区画化と相まって、国民の信頼の重大な悪用を許すことになった。

結局、このような計画 - 他の計画や企業の研究と入念に結びついた - の制約はきわめて厳重なものとなり、法的機関は常に当然のこととして蚊帳の外に置かれた。最終的に、蚊帳の外に置かれる人々には議会メンバー、さらには合衆国大統領も含まれるようになった。

実際に、アイゼンハワー大統領が政権を離れるとき、諸計画の運用はあまりにも複雑で制御不能になっていたため、彼は計画と開発の重要部分から閉め出されていると確信していた。そのとき以来、状況は飛躍的に悪化し、我々が今日推定するところでは年間およそ 1 千億ドルの資金が、大統領にも議会にも実質的に知られることなく、認められざる計画に流れている。

## USAP と先進的エネルギーおよび推進システム

このような USAPs の“最重要部分” は、きわめて先進的なエネルギーおよび推進システムに関係する事柄である。1940 年代と 1950 年代、新しく生まれつつあった科学に関係する幾つかの現象を研究するために、組織的な取り組みが行なわれた。その中に電磁気学および電気重力／磁気重力技術に関連する現象も含まれていた。それらには、切迫した国防プロジェクトにとって価値のある、エネルギーおよび推進システムを生み出す有望な可能性が秘められていたからである。

その時代、人々が UFO (unidentified flying objects ; 未確認飛行物体) と呼んでいたものに特別な関心が払われていた。重要なことは、UFO という言葉が新しくつくられたのが、そのような物体が未確認でもなく、従来の言葉の意味では決して“飛行していた” のでもないことが、闇の計画により発見されたまさにその後であったことである。実に、UFO に関連する情報や文化の大部分は、科学界、メディア、主流の政府機関による真剣な調査をかわすための偽情報である。人々は半世紀もの間、組織的に騙されてきたのである。

UFO としてよく記録に残されている空中現象の一部は地球外宇宙機 (\* 異星人の輸送機) であるが、その他は闇の政府の進歩した航空機である。それらは、地球の生活に転換をもたらす得るエネルギーおよび推進技術を利用している。注目すべきは、人間の手になるそれらの装置が、不法な機密計画の中で行なわれた技術の研究開発 (と獲得)、および回収された地球外宇宙機の研究の成果であったということである。

ひとたび技術的飛躍が達成されると、これらのプロジェクトに関連する秘密は並はずれたものになった。実際に、これらの先進的なエネルギーおよび推進装置を取り巻く秘密の深さは、水爆の開発を覆い隠す秘密のそれをはるかに凌いだ。

以下は、1950年11月21日付のカナダ政府最高機密文書からの引用である：

私[文書の作成者]は、ワシントンのカナダ大使館員を通じて慎重な調査を行ない、次の情報を得ることができた：

- a. この問題は、合衆国政府において水爆をも凌駕する、最高度の秘密事項である。
- b. 空飛ぶ円盤は実在する。
- c. その操作方法は未知であるが、バンネバル・ブッシュ博士に率いられた少数のグループにより、集中的な研究が行なわれている。
- d. この問題の全体は、合衆国当局によりとてつもなく重要なものと考えられている。

大衆文化、メディア、タブロイド紙に見られる UFO の主題にまつわる愚かしい雰囲気とは別に、当時この問題が重要であったことは、米国、英国、スペインを始めとする諸政府が公開プロジェクトに公表した 2,000 ページを超える文書により、明確に立証されている。紙幅の関係でその抜粋さえもここに掲載することはできないが、これらの文書の一部は公開プロジェクトのウェブサイトで見ることができるし、著者による本 'Disclosure' の中でも概説されている。

今日、UFO の主題は大抵の場合、笑い、困惑、拒絶の反応を引き起こす。確かにこれは理解できることなのである。この主題について話され、書かれ、映像化され、またはそれ以外の方法で一般に公表されるあらゆる情報の少なくとも 99 パーセントは、完全に事実と異なるからである。しかし権力の中核 - とりわけ闇の計画の中核 - では、UFO 問題は最重要事項である。その理由は、この謎の中心に多くの科学が存在しており、それは一世代のうちに石油、化石燃料の必要性とそれに関連する汚染を解消し、我々が知っている貧困のない、真に持続可能な世界文明を築くからである。UFO の主題についてまわる執拗な冷笑は、周到かつ計画的に行なわれている：それは、産業革命から今日に至るまでに生じた変化が桁違いに小さく見えるほどの変化を引き起こす、深遠な多くの科学を隠蔽する。初代 CIA 長官のロスコー・ヒレンケッター提督は、次のように述べた：

今こそ、真実が明かされるときだ... 舞台裏では空軍の高官たちが正気で UFO に関心を持っている。しかし、公職上の秘密とあざけりにより、多くの市民が未知の飛行物体は馬鹿げていると信じ込まされている... 未確認飛行物体についての秘密によりもたらされる危険を減らすために、議会は直ちに行動を起こすよう、私は強く求める...

我々は、これらの UFO 問題とつながりのある事象および計画を証言する、軍、企業、情報機関、研究所の 500 人近い証人を確認している。証拠は確かであり、信頼のおけるものである。我々は、2001 年 5 月にワシントン DC のナショナル・プレス・クラブにおいて記者会見を開催した。この会見では、20 数人の証人がこの主題に直接関わったことを証言し、それに関する文書を提示した。これは史上最も視聴率の高いウェブ放送であった。最終的には百万人を超える人々が、インターネット上でこの会見を見た。この会見は、CNN、CNN インターナショナル、さらには BBC、ボイス・オブ・アメリカ、プラウダ、新華社、テレムンド、'ザ・ワシントン・タイムズ' のような、世界の主要ネットワークで報道された。数万人の人々が大統領と国会議員に要請文を書き、この主題の調査と情報の全面的な機密解除を求めた。

それから 9.11 が起きた。米国議会は愛国者法、およびイラク戦争を含む別の事態の展開を考慮し、この UFO 問題を追及しないことを選んだ。しかし、継続される秘密によって甚大な被害を受ける国際社会は、その直接の犠牲者である。それゆえに国際社会は、UFO の主題に関わるこれらの問題を調査するための原動力となるべきである。

## 専門家の証言者による証言

UFO の主題が現実のことであり、それが不法に扱われていることを確実に論証する、十分な証拠、文書、物理的裏付け、および証言がある。1992 年を始まりとして、我々は米国、英国、国連、その他の機関の政府高官たちと会合を持った。そこで知ったのは、この問題を解決し、事実を全面公開することへの関心が驚くほど高かったことである。高官たちは米国防総省および英軍一般幕僚のきわめて高い地位にある提督や将軍も含まれていた。UFO の主題が人類の未来にとり途方もなく重要な意味を持つこと、またそれを秘密にすることが許されなくなったことについては、幅広い合意がある。

これまで欠けてきたのは、UFO 問題に対して意味のある行動を起こそうとする意志である。公開に向けた関心と心情的支持は高いが、恐怖はさらに大きい。以下に紹介する何人かの最高機密 "内部告発者" が、この秘密について何を語り、それがどのような恐怖を与えたのか、考えて欲しい：

---

**スティーブン・ラブキン准将**：陸軍州兵予備軍。彼は若い陸軍将校として、アイゼンハワー政権最後の数年間を大統領のもとで勤務した。

だが、起きたことはアイゼンハワーが裏切られたということだった。彼はそれを知らずにいたから、UFO 情勢全体について統制を失ったのだ。国民に向けた最後の演説で、彼は我々に、もし用心しないと軍産複合体に後ろから刺される、と語っていたのだと思う。彼は油断していた

と感じたのではないか。彼はあまりに多くの人間を信用したと感じたのではないか。アイゼンハワーは疑いを知らぬ人間だった。そして、前触れもなくこの問題が企業の管理下に入って行きつつあることに気付いたのだと思う。それはこの国を大きく損ねる可能性があった。

私の記憶では、この失意は何ヶ月も続いた。彼は UFO 問題への統制を失いつつあると気付いた。私が思い出せる限りでは、“最適に管理されそうにない” という言い方だった。本当に心配していた。こうして、結果は...

もし私がこれについて話したら、軍の立場で私に何が起きるか、このことを数多くの機会に私は議論してきた。政府は、絶望的な恐怖を植え付けることで秘密を強化するという、現代の記憶に残る何よりもよい仕事をしたと言えるだろう。

ある古参の将校と私は、もし暴露したら何が起きるかと話したことがある。彼は消されることについて語っていたので、私は“その、消されるとはどんな意味ですか？”と訊いた。そして、彼はこう言った。“だから、君は消される、姿を消すことになるんだ” 私はさらに訊いた。“あなたは どうしてそんなことを知っているのですか？” 彼の答は次のようなものだった。“私は知っている” これらの脅迫はずっとこれまで行なわれ実行されてきたのだ。脅迫が始まったのは 1947 年だ。陸軍航空隊がこの件を絶対統制するよう任された。これはこの国が今まで対処した最大の治安問題なので、消された人々もこれまで何人かいた...

あなたがどんな人間であろうと関係ない。あなたがどれほど強くて勇気であろうと関係ない。その状況はまさしく恐怖と言える。マット（この古参将校）がこう言ったからだ。“彼らは君一人だけの後は追わない。彼らは君の家族を追いかけるだろう” 彼はそう言ったのだ。だから、私に言えることは、こうだ。彼らは恐怖を与えることでそれをこんなにも長い間秘密にしていたのだ。彼らは見せしめをつくることに非常に長けている。それがこれまで行なわれてきたことなのだ。

**ジョナスン・ウェーガント海兵隊上等兵**：米国海兵隊。南米における UFO 回収に立ち会った。

“お前はそこにはいなかった” “お前はこれを見てはなかった” “お前を行かせたら危険だ” 彼らは実際私を殺そうとしていたのだと思う...

死をもたらす恐ろしい力が使われてきた。知らない人もいるだろうが、私は海兵隊の狙撃手のことを知っている。他の誰かがそれについて話しているのを聞いたこともある。これらの連中は街に出て行ってこっそり人の後をつけ、殺す。陸軍航空狙撃手も同じことをしている。彼らはデルタフォース（\*米陸軍特殊部隊）を使い、これらの人々を捕捉し、殺して黙らせる。

**ラリー・ウォリン**：米国空軍、保安兵。英国ベントウォーターズ空軍基地において UFO が着陸したとき現場にいた。

我々はガイガーカウンターで入念に調べられた。一人から反応があり、彼のポケットから何かを取り出された。(彼は回収された機体からある物体を取り出していた) この同僚はすぐに排除された。命にかけて誓うが、その後再び彼を見たことはない。彼は排除された。これは多くの人たちに起きたことだった。空軍が責任を負うべき自殺も一件あった。これは実際の名前を持った実在の人間だ...

**ダン・モリス曹長**：米国空軍、国家偵察局（NRO）諜報員。

私はその情報を調査し収集するグループの一員になった。最初にそれはまだブルーブック、スノーボードやその他の秘密プログラムの傘下にあった。人々が何かを見たと言ったとき、私は彼らに訊問し、彼らが何も見なかったか見たものは幻覚だったことを納得させようとした。それで効果がなかった場合、別の一団がやってきてあらゆる脅しをかける。そして、彼らとその家族を脅したりする。彼らの仕事はその人々の信用を落としたり、いかれた人間に仕立て上げたりすることだ。さて、それでも効果がなかった場合、また別の一団がいて、どうにかしてその問題に終止符を打つ。

**ロバート・ジェイコブズ教授**：米国空軍（退役）。彼は初期の ICBM 開発実験を妨害した UFO を映像に撮った。

[その事件について]ある記事を公表した後で... 私は仕事で嫌がらせを受け始めた。日中に奇妙な電話がかかり始めた。夜に自宅で私は電話を受けるようになった - 一晩中、時々午前 3 時、午前 4 時、夜中の 10 時、相手は電話をよこし、私に喚き始める。“くたばれ（印刷に適しないののしり言葉）！くたばれ！”彼らが言うのはこれだけだ。彼らは私がとうとう受話器を置くまで喚き続ける。

ある夜、何者かが大量のロケット花火を放り込んで、私の郵便箱を吹き飛ばした。郵便箱は炎を上げて燃えてしまった。その夜の午前 1 時に電話が鳴った。受話器を取ると、何者かがこう言った。“郵便受けの夜のロケット花火、きれいだったぞ！”

こんなことが 1982 年以来繰り返している...

UFO 問題の周辺を縁取るこの気違いじみた物事は、その真面目な研究を抑えつける協調した作戦の一部であると私は考えている。この主題を真面目に研究しようとする、いつでも誰でも嘲笑の対象になる。私は比較的主要な大学の正教授だ。私が未確認飛行物体を研究することに興味を持っていると聞いたら、私の大学の同僚たちは私を笑い、私の後ろであれこれ大声で揶揄することは間違いない - 未確認飛行物体はまさに我々が共生すべき物の一つなのだが...

マンスマン少佐が私や他の人々に語ったように、そのフィルムに起きたことは、それ自体興味深い話だ。私が立ち去ってから暫くして、私服の男たち - 私は彼らを CIA と考えたが、彼は違うと言った。それは CIA ではなく他の何者かだった - がそのフィルムを取り上げ、UFO が

写っている部分をリールから外し、はさみでそれを切り取ってしまった。彼らはそれを別のリールに巻き、彼らの書類カバンに入れた。彼らは残りのフィルムをマンスマン少佐に返し、こう言った。“機密保全誓約違反に対する罰則の厳しさは、説明する必要がないですよ、少佐。この事件は片づいたことにしよう”そして彼らはフィルムを持って立ち去った。マンスマン少佐はそのフィルムを再び見たことはない。

#### **メルル・シェーン・マクダウ**：米国海軍大西洋軍

その二人の男は、この出来事について私に質問を始めた。正直に言うと、彼らはとても手荒だった。私は文字どおり両手を上げてこう言った。“あなたたち、少し待ってください。私はあなたたちと同じ側にいる。ちょっと待ってください”彼らはまったく粗野だったからだ。とても脅迫的で、はっきりと次のことを言った。何も見なかったし、聞かなかった。何も目撃しなかったし、知られたことはこの建物から消える。君たちはこれについて同僚に一言も言ってはならない。また、基地を離れたら、これについて見たり聞いたりしたことは忘れる。何も起きなかった...

#### **ジョージ・A・ファイラー三世少佐**：米国空軍（退役）

時々私は核兵器を運んだものだ。つまり、私は核兵器を運ぶことに気持ちが慣れていたが、UFOを見ることに対してはそうではなかった。これまでずっと、このことに対する批判や嘲笑は、真実が明るみにならないようにするためのほぼ最良の方法だった。

#### **ジョン・キャラハン**：米連邦航空局（FAA）事故調査部長（退職）

... 質問が終わると、彼らはそこにいる他の人々全員に対して、実際にこう断言した。この事件は決して起きなかった、我々はこの会合を持たなかった。これは決して記録されなかった...

それはCIAから来た一人だった。いいですか？彼らはそこにいなかったし、この会合もなかったと。そのとき私は言った。しかし、あなたがなぜそう言うのか、私には分からない。つまり、そこに何かがあった。それがステルス爆撃機でないとしたら、ご存じのとおり、それはUFOだ。そして、もしそれがUFOなら、なぜあなたたちは人々にそれを知られたくないのか？なんと彼らは皆感情を高ぶらせた。あなたはそれを口にするささえ考えてはならない。1機のUFOが30分間レーダーに捉えられたデータは、彼らにとって初めてだと彼は言った。彼らは皆そのデータを入手し、それが何物で、何が実際に起きていたか、知りたくてうずうずしていた。彼はこう言った。もし彼らが公の前に出て、米国民に対してUFOにそこで遭遇したと言ったなら、国中にパニックを引き起こすだろう。だから、あなたたちはこれについて語ってはいいけない。彼らはこのすべてのデータを持ち去ろうとした...

... CIAが我々に、これは起きなかったしこの会合もなかったと言ったとき、このことが進行中であることを彼らは国民に知られたくないのだと私は思った。普通なら我々は、これがあつ

たあれがあったという類のニュースを流すものだ...

---

要するに、この UFO 問題に関連する秘密の保持が、あまりにも冷酷かつ執拗に行なわれてきたために、今日までこの問題に立ち向かおうとする組織はなかったし、指導者もいなかった。実際に、我々は 1993 年に CIA 長官ジェームズ・ウルジーと会い、この秘密を終わらせ公開を促進するために、クリントン大統領が直接大統領権限を行使するよう提言したが、その後で我々はその恐怖の大きさを目の当たりにすることになった。その会合の後で大統領の友人が我々を訪ね、こう告げたのである：“もし大統領があなたたちの提言どおりに行動したなら、彼はジョン・ケネディ[大統領]のような最後を遂げることになると思う” もちろん、我々は最初大笑いした。しかし彼は我々の笑いを制止し、このような懸念が現実のことだと語ったのである。我々は呆然とした。それまで我々は、そのような懸念を陰謀論のごみ箱に放り込んでいた。しかし、恐怖とこれらのプロジェクトが世界中で行なっている冷酷な統制が、UFO 問題を効果的に社会のレーダー画面から外れたままにしてきたように思われる。我々の考えでは、統制の手段としてこのような恐怖を広めることは、国際テロリズムのまさしく一つの形態である。その効果は壊滅的である：それは民主的な組織とプロセスを無力化し、身もすくむ恐怖を引き起こし、人類の未来を乗っ取り、数十億の人々を貧困にし、人間一代の間に地球環境を破壊し尽くす。実に、このような無法な秘密が及ぼす悪影響の大きさは、今日活動しているどのようなテロリスト組織の所業と比べても桁違いである。

それに続く議会メンバーおよび高官たちとの会合では、非常に強い懸念 - むしろ動揺 - が示された。しかし、彼らは何の行動も起こさなかった。高い地位にある多くの人々は、このような認可されていない秘密に懸念を示した。しかし、彼らはこう言いながら、責任を他に転嫁した：“なぜあなたたちは、別の委員会の誰それに会って、公聴会を開かせないのか？”

別の証人たちは、これらの活動を以下のように述べている：

---

#### **ポール・シス博士：マクドネル・ダグラス専門技術者**

闇の予算の世界は、あの親しげな幽霊カスパーを描写するのに似ている。彼の漫画を見ることはできるが、それがどれくらい大きいか、その資金がどこから来るのか、どれくらいの数があるのか、その区画化と守られる誓約のために、知ることはできない。私がいた場所で働いていた人々の今を知っているが、もしあなたがそれについて彼らに訊いても - たとえインターネット上で論じられていようとも - 彼らは“知らない、あなたは何を言っているのか” と言うだろう。彼らは今 70 歳台だが、依然としてあなたが言っていることを知っているときえ、決して認めようとしないうだろう。あなたには見当がつかないが、たぶんあなたが考えるよりも巨大だ。

**ジョン・メイナード氏**：DIA（国防情報局）職員

この問題に関与している企業の中で、アトランティック・リサーチ社は主要なものの一つだ。だから、これはあまり頻繁には聞かれない。その目立たない存在をそう呼びたければ、これは内部にいる環状道路沿いの悪党だ。その仕事の大部分を情報機関の内部で行なう。TRW、ジョンソン・コントロール、ハネウェル。これらのすべてがどこかの時点で情報分野に関わるようになった。ある種の仕事、活動は彼らに請け負わされた。アトランティック・リサーチはずっと以前からその一つだった。これらは“環状道路沿いの悪党”になるためにペンタゴン（国防総省）の人々によって創られた組織だ - ある極秘の区画化されたプロジェクトを実行するために、プロジェクト、助成金、資金を受け取っていた。あまりにも秘密で区画化されていたために、何が行なわれているかを知る人間は4人ほどにすぎなかっただろう。それほど、それは厳重に統制されていた。

**エドガー・ミッチェル**：宇宙飛行士

どんな活動が行なわれていようとも、それが秘密の、準政府的な、準民間のグループである限り、私が思いつく範囲では、政府によるどの段階の監視も伴わない。これこそが大きな懸念なのだ。

---

ミッチェルは後日メディアにこう述べたと、セントピーターズバーグ・タイムズ紙 2004 年 2 月 28 日版が報じている：“異星人たちは着陸した... ごく少数の部内者たちが真実を知っており、その遺体を研究している... 部内者たちの陰謀グループは、ケネディ大統領以後、大統領に ET に関する背景説明をしなくなった”

---

**クリフォード・ストーン軍曹**：米国防軍

... 彼らはすぐに出てきて、こう言う：“我々は秘密を隠しておけない、秘密なんか隠しておけるものじゃない”では、本当はどうか。秘密は隠しておけるのだ。

国家偵察局（NRO）は何年もの間秘密だった。NSA（国家安全保障局）があるかどうかさえも秘密だった。原子兵器の開発は、それを一回爆発させ、何が進行しているかを一部の人々に言わなくてはならなくなるまで秘密だった。

... 私は空軍が認めた秘密文書を入手した。私をもっと多くのファイルを開放させるために議会の議員たちの助けを借りたとき、それらの文書は直ちに破棄されてしまった。私はそれを証明できる。

文書を保護する仕組みと秘密のプログラムを実行する仕組みを議会が精査したとき、彼らは特殊接近プログラムの内部に特殊接近プログラムがあることを知った。つまり、そのすべてを議会が管理統制することは本質的に不可能だった。お分かりか？そのすべてを管理統制することなど本質的に不可能なのだ。

さて、UFO の場合、それと同じ原則が適用される。こうして、情報関係機関内の 100 人以下の小さな核、いや私はそれが 50 人以下であることを知っているが、それがすべての情報を支配している。それはまったく議会の調査や監視の対象ではない。

#### **ロバート・ウッド博士：マクドネル・ダグラス・エアロスペース技術者**

ご存じかもしれないが、あなたがこれらの秘密プログラムの一つに接近を許されると、特別なバッジをつけ、その部屋にいる誰とでも大変率直に話ができる。そして心のつながりを持ったグループの一員のように感じる - そこには形成された大きな仲間意識がある。こうしてあなたは特別な資料庫を利用できることになった。そこで我々にできることの一つは、空軍が運営する資料庫に行って、いわば遠慮なく極秘資料を渉猟することだ。私は UFO に関心があったので、やるべき通常の仕事があったとき、彼らの資料庫を覗き、彼らが UFO についてどんな資料を持っているのかを知ろうとも思った。約 1 年間に、私は様々な報告書の中にこの主題に関する相当数の資料を見つけ出していた。そしたら、まったく突然に主題の全資料が消えてしまった。この主題の分類全体がまさに消えたのだ。一緒に働いていた我々のグループの資料庫係は、この資料庫に 20 年間いるが何事も正常だったと言った。これは異例のことだとも言った。そして彼はこう言った。こんなことは初めてだ。君は一つの主題をまるまる失った、それは君を逃れて消えたのだ。君は何かを探り当てた...

そうこうしている間に、もう一つ別のことが起きた。それはジム・マクドナルド（著名な UFO 科学捜査官）との付き合いから生じた。私はヤツが好きだった。彼は実に元気のある物理学者で、しっかり者だった。彼はある事実をつかむと、何としても専門家の学会で圧倒的に説得力のある話をしようとした。彼は、米国航空宇宙航行学会と米国物理学会でよく話したものだ。私はたまたま両方の会員だったので、彼が町にいるときはいつも車で迎えにいき、付き添い、彼が歓迎されていると感じられるようにしてやった。

一度、彼が住んでいたツーソンを通過して旅行した折り、私はそこに立ち寄った - 私には 2 時間の飛行機の待ち時間があった - そして彼は空港に出てきて私とビールを飲んだ。私は“何か新しいことはないかい、ジム？”と言った。彼は“どうやらつかんだらしい”と言った。私は“何をつかんだんだい？”と訊いたら、彼は“答をつかんだようだ”と言うじゃないか。だから私は“それは何だい？”と訊いた。彼は“まだ君には話せない、確かにつかんだんだ”と言ったのだ。彼が拳銃自殺を図ったのはそれから 6 週間後だった。数ヶ月後、彼はとうとう亡くなった。

我々の防諜活動員が用いる技法について、私には今思い当たることがある。ジムに自殺を決心させる能力を、彼らは持っていたのだ。それが起きたことだった...

この主題の統制を効果的にやろうとしたら、あらゆる段階でそれをする必要がある。最もはっきりしている段階はメディアだ。だから、あらゆる種類のメディアに目を配る必要がある。映画、雑誌、そして言うまでもなく初期の頃は新聞がすべてだった。今や我々はインターネットやビデオなど、他のあらゆる種類の媒体を持っている。だが、これらの分野の技術が進歩するのに伴い、この統制を心配する人間たちが、媒体とともに、まさにこの分野に入り込んできている。こうして、新しい媒体が出現するたびに、彼らはそれに対応する新しい統制手段を持つのだ。

---

読者が注目すべきは、我々はあらゆる機関および軍の部門、秘密に荷担している選ばれた企業から、このような信用資格を持つ 500 人近い証人を集めているということである。

この秘密を保持しているグループは、少なくとも政策レベルでは 200 ないし 300 人で構成され、いくつかの国にまたがっている。彼らは各界の強力な利害勢力を代表しており、その中には金融、技術、安全保障、宗教、メディア、政治、科学の分野とつながりを持つ人々が含まれる。1993 年にこのグループ内の複数の接触者が我々に断言したことは、関与している人々の約 3 分の 1 は、秘密を終わらせ広範な公開を行なうことに賛成している、ということであった；今日の時点で、我々は 4 割を超える人々がこれを支持していると推定する。そのようなグループがこれほどの秘密を抱えたまま、いつまでも逃亡を続けることなどできるはずがない、と考えるのは正しい。我々は、起訴するのに十分な情報、情報源、文書を入手している。我々には、名前、計画コード番号、活動が行なわれている場所、企業の所在地、および関係する重大情報がある。しかし、この情報を誰に、何のために公開するのか？

これらの技術と活動に関係する秘密は、無法、違憲、有害なのであるから、どのような政府機関または国際機関も、公聴会を開き、そこで証人と証拠を提示することができると考えられる。公開プロジェクトと連携する法律専門家および国家安全保障専門家たちは、次のように判断している：秘密は管理されておらず、法の枠外にある。それゆえ、そのようなプロジェクトの指導者たちは、このような秘密を強制する正当な権利を持たない。これが意味するところは、秘密を保持している人々は、それが過去のものであれ現在のものであれ、機密保全誓約によって憲法上の拘束を受けることはもはやない、ということである。この評価を政府高官たちに伝えしたが、これまでどの機関、当局者によっても、この見解が問題にされたことはない。

意義深いことには、上記のナショナル・プレス・クラブで開催された記者会見を準備している間、またそれが終わった後でも、公開プロジェクトのスタッフや内部告発者の中で、何らかの方法で脅迫されたり、口封じをされたりした人はいないということである。我々は、秘密の証拠とともにその不法性を決定的に論証することができる能力を維持している。だから、どのよ

うな組織も我々を沈黙させることはできない。

## 公開に向けた行動要請

これらの法律上の議論はさておき、この秘密を終わらせるための切実な道徳倫理上の理由がある。第一に、これらの計画により獲得された重要な科学技術が公表されないでいるために、人類は無用の苦しみを受けている。

これらの技術は、いわゆる量子真空状態 (quantum vacuum state) から有用なエネルギーを引き出すことを可能にする。これは、アフリカやインドのあらゆる村が、配電網に頼らないエネルギー源を持つということである。このエネルギー源は、装置を取り巻く空間からエネルギーを引き出すのであり、燃料を燃やすことも発電所から送電線を引くことも不要である。このような“フリーエネルギー”発生装置は、貧困、汚染、経済停滞、等々に関して絶望的に思える世界の現状を、完全に転換する。

第二に、世界は新しい基幹技術から利益を得ることになる。化石燃料および原子力を、これらの新しい先進的なエネルギーおよび推進システムで置き換えることの意味は、どれだけ誇張してもし過ぎることはない：地球の生活のあらゆる側面が影響を受け、真に持続可能な先進技術文明が築かれる。開発途上世界は、産業汚染や費用のかかる集中型公共施設を必要とする段階を飛び越して、直ちに家庭内発電 (point-of-use power generation) の段階に移行することができる。

飛躍的な繁栄がもたらされ、教育が盛んになる。地球温暖化は止まり、汚染の大部分は抑制される。海水の淡水化は費用のかからないものとなり、砂漠化の進行を食い止め、資源の枯渇を防ぐのに役立つ。また、石油戦争はもはや起きることがない。

第三に、これらの秘密計画の公開により、否定的な結果が生じる可能性がないわけではない。このような新技術は不安定をもたらす軍事目的に応用されるのではないか、という議論があるかもしれない。確かにその通りである - あらゆる新技術は戦争目的に利用される。このことはしかし、ある重要な問題を提起する：我々はその一つの文明として、人類が惑星殺し (planetocide) - 惑星全体の死滅 - をするのを見る覚悟ができていないか？平和な世界を創造する責任から逃れられるということだけのために？世界の状態は、石油、石炭、太陽光や風力発電の表面的部分をいじくり回すだけで大きく改善されることはない。我々は、環境崩壊、爆発的に増加する貧困層、世界的な政情不安と戦争に直面している。この状況がある一方で、これらの問題を包括的に解決する手段が、闇の中に置かれたままになっているのである。

今や、これらの技術を適切かつ注意深く公開し、利用する時である。国際司法裁判所および他の国際機関は、事実を調査し公開するため、またこれらの新しいエネルギーおよび推進システムの解放を促進するために、先導的役割を果たさなければならない。公開プロジェクト (The

Disclosure Project ; ディスクロージャー・プロジェクト) は、政府の指導者たち、組織、機関に対して、情報の全面的な提供と背景説明を行なう用意がいつでもできている。

国際社会は、これらの問題を調査しなければならない - そして見て見ぬふりを止めなければならない。我々の最も差し迫った諸問題の解決策を公表しないでいる不法な秘密が、少なくとも現代における最大の道徳的、政治的危機の一つであることは間違いない。

公的資金で賄われながら“乗っ取られた” 研究を、全人類のために役立てる時が来たのである。解決策が悪意を持って意図的に公表されないでいる一方で、60 億の人間が自分たちの故郷惑星を切り刻むようにして生き続けている状態は、放置することができない。死にかけている石油経済を支える金融資本その他の利害勢力がいかに巨大であろうとも、我々は石油依存症により全人類をその道連れにさせる訳にはいかない。

それよりは勇気と慎重さをもって真実を公開し、これらの驚くべき科学が人類に平和で豊かな地球の生活をもたらすことができるようにしよう。これは実現不可能な夢ではない。そのような世界を創造する手段を我々はすでに持っている。今我々は、意思を持たなければならない。

(訳：廣瀬 保雄)